# 岡山大学構内遺跡調査研究年報14

１９９６年度

１９９７年１１月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

# 岡山大学構内遺跡調査研究年報14

１９９６年度

１９９７年１１月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

# 序

1996年度は農学部・薬学部動物実験施設と環境理工学部校舎の建設に伴う事前の発掘調査を行いました。いずれも津島キャンパスにおけるものですが，前者の調査では弥生時代前期の水田畦畔など重要な遺構のひろがりをみとめ，これまで遺構の密度が比較的希薄だと考えられてきたキャンパス南西部にも今後十分な注意をはらっていく必要があることを示しました。また後者の調査地を含むキャンパス東北部の一部は，これまでの調査で縄文時代の遺構・遺物がとりわけ豊富な地域であることが分かっていました。今次の発掘の結果，予想にたがわず縄文時代後期の住居跡や，溝，多数の小穴などを確認し，縄文集落の全体像の復元へさらに一歩近づくことができました。

1996年度には，本センター自己評価委員会において，大学基準協会の相互評価にかかわる点検・評価報告書を作成しました。また，本センターは1997年11月に10周年を迎えますが，センター運営委員会では設立以来の調査研究事業の成果と問題点を点検し，10周年以降の将来構想を検討しました。組織の運営は，日々の仕事や定期的に実施しなければならない作業に追われ，ともすれば長期的な展望を軽視する傾向におちいりがちです。センターも例にもれず相次ぐ発掘と報告書作成で多忙をきわめていますが，今回，設立以来の事業経過をあらためて整理しなおし，関係委員会で委員各位のさまざまな観点からのご意見・ご提言をいただいたことは，センターのこれからの運営にとってたいへん有益なことであったと信じます。

発掘調査の実施でご協力いただいた各機関・各位にお礼申し上げるとともに，本センターの運営と事業のあり方について建設的なご意見とご指導をたまわった管理委員会・運営委員会・自己評価委員会の委員各位にも，深甚の謝意を表する次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稲　田　孝　司

# 例　　言

1　本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1996年４月１日から1997年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存，および活動成果をまとめたものである。

2　岡山大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては，設定基準を次のように定めた。

1）津島地区では，国土座標第Ⅴ座標系（Ｘ＝－144,500m　Ｙ＝－37,000m）を起点とし，真北を基軸とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また，同地区では調査の便宜上，大きく津島北地区と同南地区に二分する（図13）。

2）鹿田地区では，国土座標第Ⅴ座標系（Ｘ＝－149,800　Ｙ＝－37,400m）を起点とし，座標軸をＮ15°Ｅに振ったものを基軸とした構内座標を設定した。地区割りは一辺５mの方形を用いる（図15）。

3）本文中で用いる方位は，津島地区・鹿田地区は真北を，他は磁北を用いている。

3　岡山大学構内の遺跡の名称は，周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については，全域を「津島岡大遺跡」と総称する。他地区は任意の名称で仮称する。

4　調査名称は，「発掘調査」に分類したものについては，各遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し，「試掘調査」「立会調査」に分類したものは，任意の名称を用いる。発掘調査のうち，小規模で，試掘調査から連続して調査したものは，「試掘調査」に分類する。

5　「発掘調査」についての記述は，現段階における概要であり，詳細は正式報告に依って頂きたい。第16次調査については，本年報での記述を正式報告にかえる。

6　表に記載した所属部は，原則として各学部の頭文字を略号として用いている。

7　本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表１と一致する。

8　突帯文土器が出土する時期を従来は縄文晩期・突帯文期と仮称していたが，本年報から弥生時代早期と呼ぶ。

9　本文は岩崎志保・山本悦世・横田美香が分担執筆し，執筆者名を末尾に記した。

10　鹿田遺跡出土種子の分析を沖陽子氏（岡山大学環境理工学部）に依頼し，その結果を別編として掲載した。

11　編集は稲田孝司センター長の指導のもとに，横田が担当した。

12　本年報に掲載の津島地区の地形図は岡山市発行の１/25000の地図を複製したものである。

# 岡山大学構内遺跡調査研究年報14　1996年度

## 目　　次


第１章　1996年度岡山大学構内遺跡調査報告 …… 1
　第１節　調査の概要 …… 1
　第２節　発掘調査 …… 1
　　1　津島岡大遺跡第16次調査〈農・薬学部動物実験施設〉 …… 1
　　2　津島岡大遺跡第17次調査〈環境理工学部校舎新営予定地〉 …… 9
　第３節　立会調査 …… 15
　　（１）津島地区 …… 15
　　（２）鹿田地区 …… 16
第２章　1996年度普及・研究・資料整理活動 …… 22
　　1　資料整理 …… 22
　　2　分析依頼 …… 22
　　3　刊行物 …… 22
　　4　調査員の活動 …… 22
　　5　日誌抄 …… 24
　　6　1996年度までの遺物保管状況 …… 25
　　7　遺物の保存処理 …… 25
　　8　展示会 …… 27
第３章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項 …… 29
　第１節　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程 …… 29
　　1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程 …… 29
　　2　岡山大学埋葬文化財調査研究センター管理委員会規程 …… 30
　　3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程 …… 31
　　4　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程 …… 32
　第２節　1996年度埋蔵文化財調査研究センター組織 …… 33
　　1　センター組織一覧 …… 33
　　2　管理委員会 …… 33
　　3　運営委員会 …… 34
　　4　自己評価委員会 …… 34
　第３節　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター関係委員会報告 …… 35
　　1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告 …… 35
　　2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について …… 42
第４章　1996年度活動報告のまとめ …… 48
附　表 …… 49
別　編 …… 63

# 挿 図 目 次


図１　津島岡大遺跡第16次調査地点位置図 …… 1
図２　津島岡大遺跡第16次調査Ａ地点土層断面図 …… 2
図３　津島岡大遺跡第16次調査土坑２平・断面図 …… 4
図４　津島岡大遺跡第16次調査Ｂ地点調査区平面図 …… 5
図５　津島岡大遺跡第16次調査Ｂ地点土層断面図 …… 5
図６　津島岡大遺跡第16次調査Ｂ地点遺構全体図 …… 6
図７　津島岡大遺跡第17次調査地点位置図 …… 9
図８　津島岡大遺跡第17次調査土層断面図 …… 10
図９　津島岡大遺跡第17次調査縄文時代後期の遺構 …… 12
図10　津島岡大遺跡第17次調査弥生前期～古墳時代の遺構 …… 13
図11　調査⑫⑬土層断面図 …… 16
図12　調査⑬遺物実測図 …… 17
図13　調査⑲土層柱状図 …… 17
図14　津島地区全体図 …… 19
図15　今年度の調査【１】津島地区 …… 20
図16　今年度の調査【２】鹿田地区 …… 21
図17　展示会会場見取り図 …… 27
図18　アンケート集計結果 …… 28
図19　構内の遺跡密度概略図 …… 46
図20　1996年度までの調査地点【１】津島地区 …… 61
図21　1996年度までの調査地点【２】鹿田地区 …… 62

# 写　真　目　次


写真１　津島岡大遺跡第16次調査Ａ地点南壁土層断面（北から）…… 2
写真２　津島岡大遺跡第16次調査土坑２完掘状況（東から）…… 3
写真３　津島岡大遺跡第16次調査土坑１・２土層断面（左：東から，右：西から）…… 4
写真４　津島岡大遺跡第16次調査Ｂ地点南壁土層断面（北から）…… 5
写真５　津島岡大遺跡第16次調査溝１完掘状況（南から）…… 5
写真６　津島岡大遺跡第16次調査５層上面検出状況（南から）…… 7
写真７　津島岡大遺跡第16次調査溝４内ピット断面（西から）…… 7
写真８　津島岡大遺跡第16次調査５層上面遺構（南東から）…… 7
写真９　展示会看板 …… 27
写真10　鹿田遺跡第６次調査出土種子(1) …… 64
写真11　鹿田遺跡第６次調査出土種子(2) …… 65
写真12　鹿田遺跡第６次調査出土種子(3) …… 66


# 表　目　次


表１　1996年度調査一覧 …… 18
表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 …… 25
附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）…… 49
附表２　1995年度以前の構内主要調査（1983～1995年度）…… 50
附表２―(1)　発掘調査 …… 50
附表２―(2)　試掘調査など …… 52
附表２―(3)　立会調査 …… 54
附表３　埋蔵文化財調査室刊行物 …… 59
附表４　埋蔵文化財調査研究センター刊行物 …… 59

# 第１章　1996年度岡山大学構内遺跡調査報告

## 第１節　調査の概要

当センターにおいては大学構内における掘削を伴う工事に際し，事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで，発掘調査・試掘調査・立会調査にわけて調査を実施している。

これまでのところ，その調査の対象は津島地区と鹿田地区とが中心になっている。特に鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として，掘削を伴う工事に際し，届出を提出した上で対応を行っている。また，津島地区においても，新たな遺跡の確認が進んでいることから，遺跡名称を「津島岡大遺跡」と総称し，届出の有無に関わらず，少なくとも立会調査を実施している。

1996年度は，発掘調査２件，立会調査34件（津島地区33件，鹿田地区１件）を実地した。そのうち発掘調査については本章で概要を述べ，立会調査の詳細については表１（ｐ18～19）に記す。

## 第２節　発掘調査

### １　津島岡大遺跡第16次調査（農・薬学部動物実験施設工事に伴う発掘調査　津島南BD19～20区）

#### ａ．調査に至る経過

農・薬学部の動物実験施設建設予定地は，津島キャンパス南地区に位置する。本地点には，東側に建つ遺伝子実験施設建設時の発掘調査（津島岡大遺跡第８次調査，1991年度実施）あるいは1988年度・1994年度の試掘調査などから，遺跡の広がりが予想されていた。そのため，建設決定段階から建築側と協議を重ね，本体部に関しては基礎を造成土内におさめる工法を採用し，試掘調査によって状況確認を行うこととした。ただし，予定建物の西端に位置する水槽部分および東側の遺伝子実験施設と連結する共同溝の東半分に関しては，掘削が遺構面深くに達することは避けられず，小規模ながら発掘調査を実施することとなった。両地点は東西約50ｍ離れて位置する。調査面積は水槽部分（Ａ地点）が13.5㎡，共同溝部分（Ｂ地点）が16.8㎡の合計30.3㎡である。期間は1996年５月７日～５月15日の予定で，調査員１名が調査に入った。

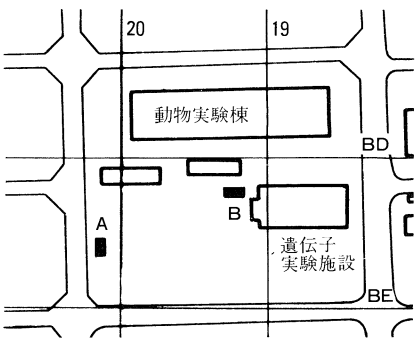



**図１　調査地点位置図**（縮尺1/2,500）

#### ｂ．調査の経過

〈Ａ地点〉調査区の北および東半部の壁面は本体工事

部と接するため，矢板を打った上で造成土の掘削を行った。明治の耕作土までを機械で除去し，近世層上面で耕作痕を検出した。側溝掘削終了後，土層観察から，遺構面を中世層（灰色粘土層）の上・下２面に想定し，両面で精査を実施した結果，下面において土杭２基を確認した。１基は西壁面において明瞭に認められ，側溝内をかすめて調査区の西側へ広がる。他の１基は土層の堆積状況の検討から縄文後期に属することが予想され，慎重に対応した結果，住居址の可能性も考えられた。同遺構を完掘後，全ての記録をとった上で，土壌のサンプリングを行い，５月15日に調査を終了した。

〈B地点〉 A地点の調査開始後，５月８日に機械によって造成土を除去した。側溝掘削後の土層観察から，中世層の上・下面と弥生前期と見られる「黒色土」上面の合計３面に遺構の存在が期待され，各面で遺構の検出・完掘・記録を行った。最後に縄文時代対応面を精査したが，遺構は確認されなかった。調査は５月14日に調査区の土層断面の記録を行い終了した。

**c．調査の成果**

〈A地点〉

（１）層序と地形

１層：1907～1908年（明治40年）に旧日本陸軍の駐屯地設営の際に造成された土である。上面は標高４～4.1m（以下標高は略す）にあり，厚さは1.3m前後を測る

２層：青灰色粘質土で細礫を多く含む。上面は2.7～2.8mに位置する。明治の耕作土である。

３層：基本的には淡灰褐色系の砂質土で，鉄分とマンガンが互層に薄く沈着する層群である。a層は多量の鉄分の沈着で黄色化が進む。

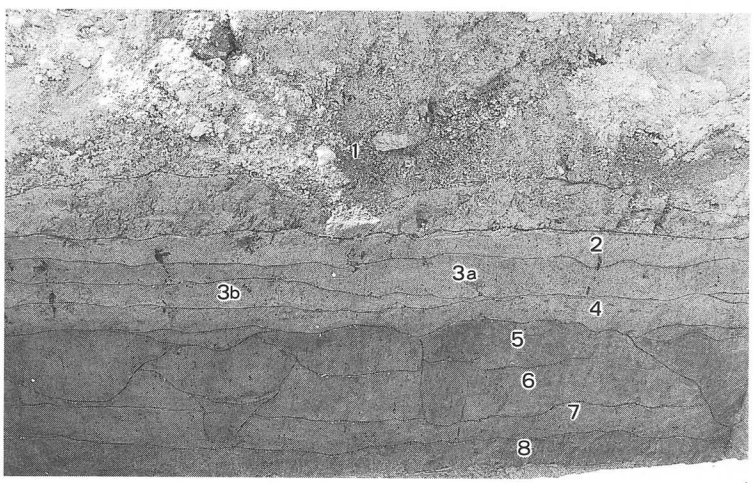
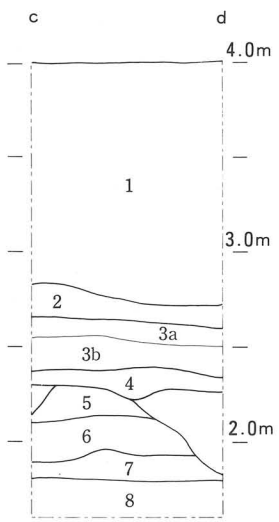



**写真１　A地点南壁土層断面**（北から）




１．造成土
２．青灰色粘質土(細礫多)
3a. 黄灰褐色砂質土(Fe多)
3b. 淡灰褐色土(Fe・Mn)
４．灰色粘土(Mn多)
５．黄灰褐色砂質土
(Fe多,灰褐色砂質土混)
６．淡灰褐色砂(Mn少)
７．黄褐色砂(Mn少)
８．茶白色砂(Fe)

**図２　A地点**
**土層断面図**
**(縮尺1/40)**

b層はやや粘性を強める。a層上面は2.5m前後に位置する。近世の堆積土である。

4層：上面が2.4m前後に位置する灰色粘土層で，マンガンの沈着が特徴である。出土遺物から中世の堆積土と考えられる。

5層：黄灰褐色砂質土で鉄分の沈着が進む。灰褐色砂質土をブロック状に含むなど均質性を欠く。縄文後期の段階が想定される。上面は2.3mを測る。

6～8層：比較的均質な砂層である。6層は淡灰褐色，7層は黄褐色でいずれもでマンガンを含む。8層は茶白色で鉄分が沈着する。6層上面の高さは約2mである。縄文後期の基盤層と考えられる。

以上のように，本地点では中世層直下に縄文時代後期の可能性が想定される土層が接し，さらに，同層以下の土層が非常に砂質の強い状態を示している点などから，縄文後期においては微高地頂部付近に位置すると判断される。

（2）遺構・遺物

検出した主要な遺構は5層上面の大形の土坑1・2である。その性格に関しては，調査面積の狭小さから断定は避けたいが，住居址状遺構の可能性も考え得る。

土坑1（図3，写真3）：調査区の西壁面に明瞭に確認されたが，調査区内には広がらない。側溝内を北壁部分から直線的に南へ走り西壁へ抜け，調査区の西側に広がる。埋土は暗灰褐色系の粘質土であるが，最下層には砂質土が堆積する。立ち上がりは南側ではやや緩やかな感があるが，北壁では急峻なラインを見せる。また，側溝内では遺構下面に接して焼土塊が認められた。遺構の東壁に接する位置にあたり，住居址の可能性を考えると竈の存在を想定することができるかもしれない。時期は出土した須恵器片から古墳時代後半が有力である。

土坑2（図3，写真2・3）：調査区の北西コーナーに半円状に検出された。土坑1の下部に一部重複する。上面は5層がやや汚れたような土層でその差は曖昧であったが，埋土下半では粘質を強め基盤層とは異なる状況を呈し，断面での立ち上がりも明瞭である。断面観察あるいは平面の状態から少なくとも2回の掘削が想定される。また，最下層にはやや硬く締まった粘質土層が薄く認められ，マンガンの沈着も特徴的である。基盤層自体は軟質の砂層であり，本遺構の床面にあたると考えられよう。出土遺物は小片でごく少量ではあるが，同面近くに集中する。6層以下で本遺構以外では皆無であることを考慮すると注目される点である。上層の床面付近のレベルでは，焼

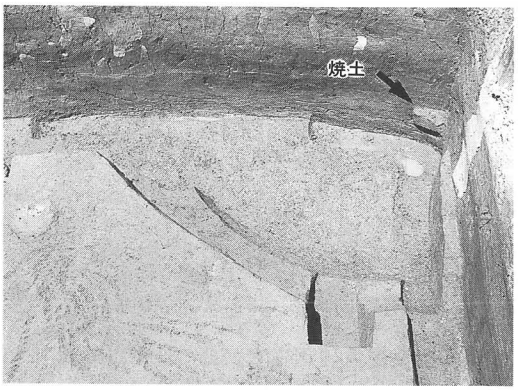



**写真2　土坑2完掘状況**（東から）

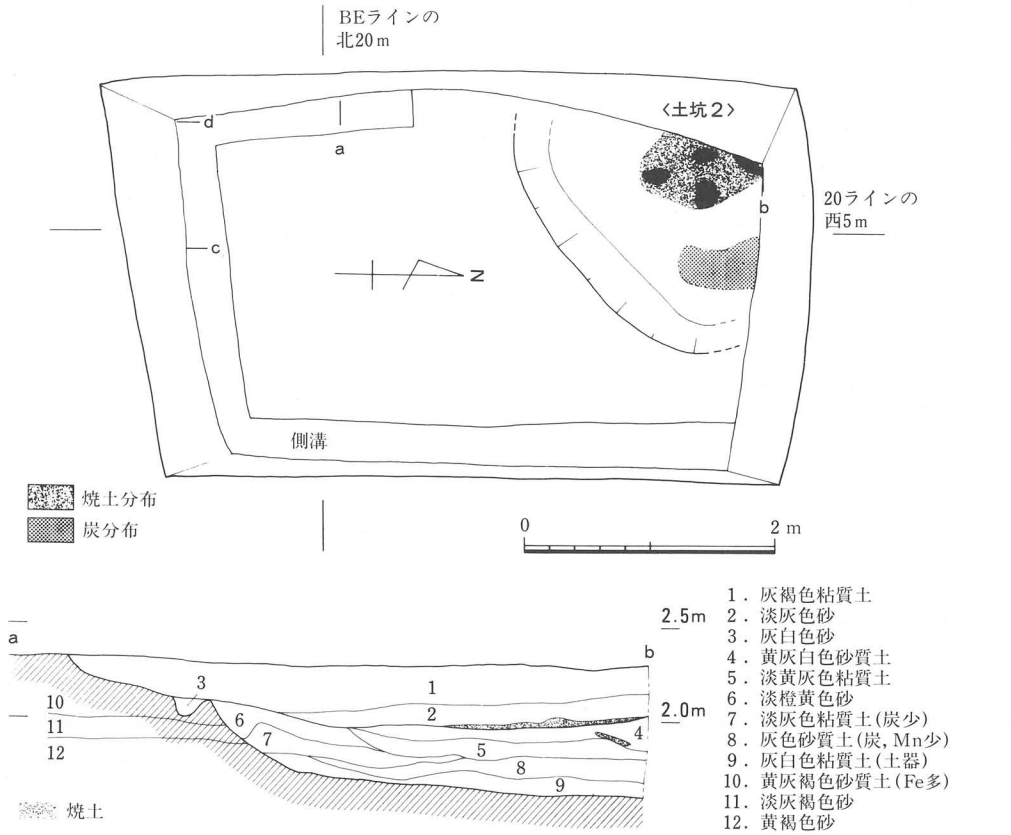



**図3　土坑2平・断面図**（縮尺1/60，1/40）

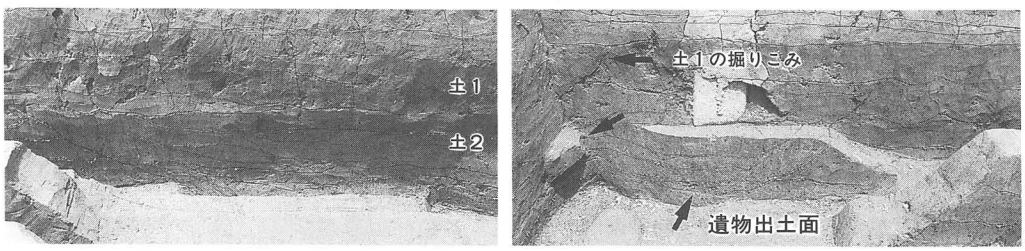



**写真3　土坑1・2土層断面図**（左：東から，右：南から）

土あるいは被熱痕跡の広がりが認められた（写真2矢印）。住居とするとやや中心をはずれる位置であるが，炉の可能性も考えられる。

〈B地点〉

（1）層序と地形

1～4層はA地点と共通することから，ここでは省略する。

5層：明黄褐色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。上面は2.35m前後に位置し，層厚は約5cmを測る。弥生時代（～古墳前半）に属する。

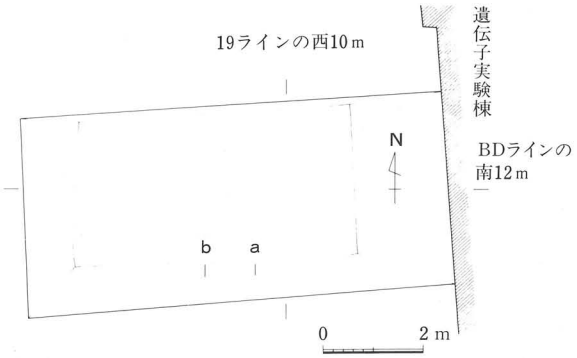
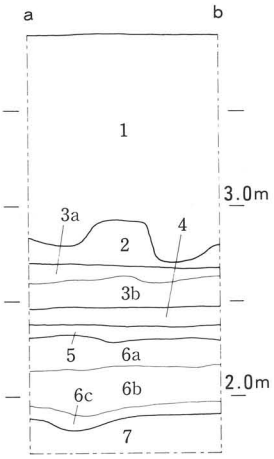



**図４　Ｂ地点調査区平面図**（縮尺1/150）




1．造成土
2．灰色土(細礫多)
3a．黄灰褐色土(Fe多・Mn)
3b．淡灰褐色土(Mn多)
4．灰色粘(質)土(Mn多)
5．明黄褐色砂質土(Fe多)
6a．黒(褐)色(砂質)土(Fe多)
6b．黒色土(Mn多)
6c．黒(褐)色(砂質)土(Mn多，黄褐色土粒少)
7．明黄褐色土～粘質土

**図５　Ｂ地点土層断面図**（縮尺1/40）

**６層**：黒(褐)色土でマンガンの沈着が顕著である。ａ・ｃ層は砂質を帯び色調もやや薄く，ｂ層は粘性を強める。ｃ層には７層が少量含まれる。ａ～ｃ層の差は明確とは言い難く，変化は漸移的な部分も多い。上面は2.3ｍ前後である。弥生前期に対応する。

**７層**：明黄褐色土～粘質土を呈す。炭化物の散布が僅かに認められる。上面は1.9～２ｍ程度を測る。縄文時代後期に対応する。

本地点は中世段階の造成(４層)がＡ地点と同様の高さに達するにも関わらず，６層の「黒色土」が良好に堆積する点と，その下の縄文対応層が粘性を強める点でＡ地点と異なる。こうした状況は８次調査地点の西半～南半部に共通し，縄文～弥生時代には本地点がＡ地点のような微高地頂部ではなくその縁辺部に位置することを示す。

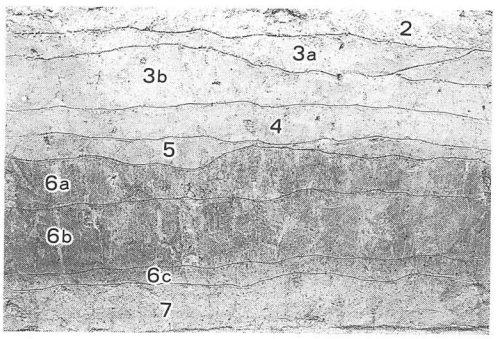



**写真４　Ｂ地点南壁土層断面**（北から）

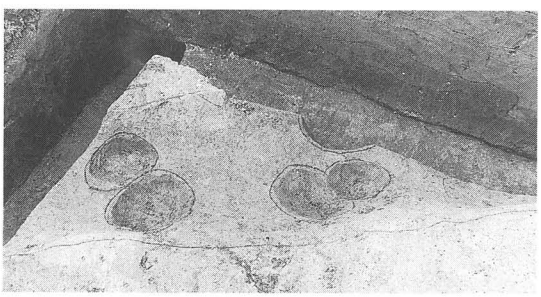


**写真５　溝１完掘状況**（南から）

（２）遺構・遺物

遺構検出面は４層上面・５層上面・６層上面の計３面である。

①　**４層上面**…溝３条

ピットを有す溝１と小規模な溝２・３を検出した。遺物が未出土のため時期の断定は困難であるが，検出面から中世と考えたい。

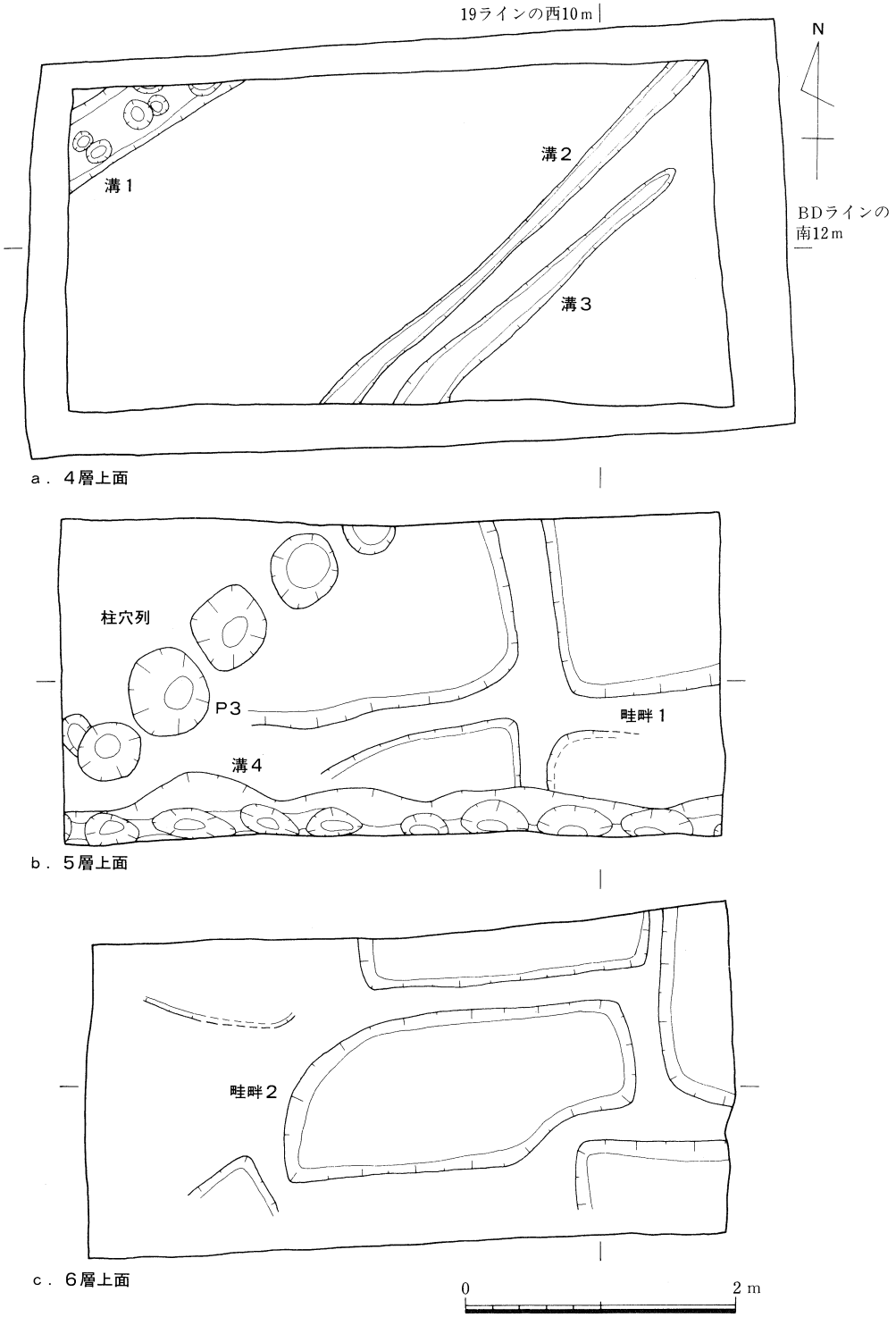



図6　B地点遺構全体図（縮尺1/50）

**溝１**（図６－ａ，写真５）：調査区の北西隅を北東―南西方向に走る。幅50cmで深さ15cmを測る。底面は標高約2.3mに位置し，径15～25cm・深さ約８cmのピット６基が認められた（写真５）。埋土は灰色系の粗砂で，ピット部分は４層に起因する粘土粒が含まれる。８次調査溝68につながる溝である。

**溝２・３**（図６－ａ）：幅20～30cm，深さ３～５cmの非常に小規模なもので，灰色の砂で埋まる。両溝に挟まれる部分は畦畔の可能性もあるが不明瞭である。

②　**５層上面**…柱穴列１列・溝１条・畦畔

柱穴列１列と溝１条，そして水田畦畔を検出した。柱穴列と溝は畦畔よりは時期的に新しい。時期は弥生～古代の範囲で捉えられる。

**柱穴列**（図６－ｂ，写真６）：調査区の北西部，溝１の南側にほぼ平行して東北―南西方向に走る。平面で５基，断面部分を含めると７基の柱穴が65～70cmの間隔で整然と並ぶ。各柱穴の大きさは径50cm，深さ30～35cmを測り，底面は標高２ｍ前後に位置する。中心となる埋土は暗灰褐色土でやや粘質を有し，その上部には灰白色土が落ち込む。両者の境には鉄分が多量に沈着し，差は明瞭である。Ｐ３では柱痕が確認された。

**写真６　５層上面検出状況**（南から）

**溝４**（図６－ｂ，写真７・８）：調査区の南縁を東西方向に走る。側溝で南半部を消失している関係で，幅は不明である。深さは10cm前後で，底面は標高2.2ｍ付近にあたる。底面にはピットが50～60cm間隔で整然と密に並ぶ。ピットの形態は長径50cm・短径30cm程度で東西に細長い楕円形を呈する。底面は長径で５～10cm程度に過ぎない。断面はすり鉢状であるが，南面

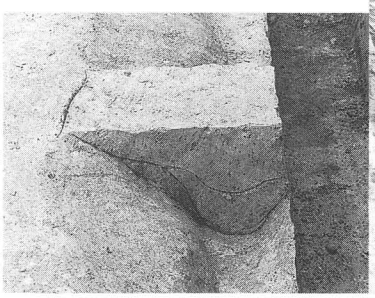


**写真７　溝４内ピット断面**（西から）

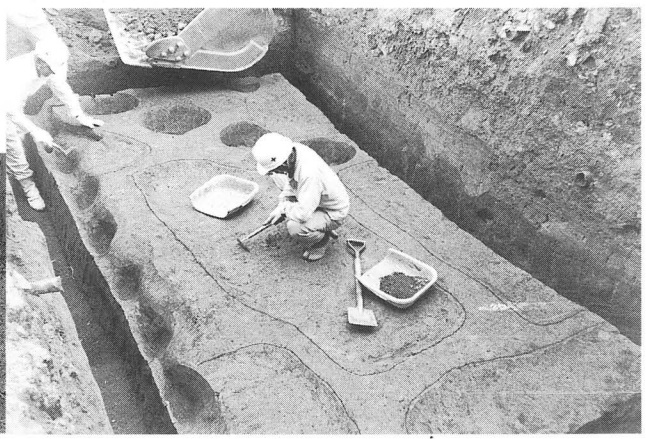


**写真８　５層上面遺構**（南東から）

の立ち上がりが急峻で垂直に近い角度を示す点に特徴がある（写真７）。ピットの底面は標高2.0～2.1mにある。津島岡大遺第８次調査で報告された溝62につながる。

畦畔１（図６－ｂ）：幅25～30cm，高さ１～３cmの６層の高まりが確認されたが，やや不明瞭である。

③　６層上面

畦畔２（図６－ｃ）：幅20～30cm，高さ１～３cmの６層の高まりが確認された。面積が狭いためやや不明確な点も否めないが，小区画の水田の存在が想定される。

ｄ．まとめ

本調査は津島岡大遺跡の西端付近の調査であったが，第８次調査地点から以西に向けて地形が下降するという従来の考えを一部修正する結果を得た。周辺の地形をこれまでの調査成果を東側から西に向かってまとめてみよう。

東側から，第８次調査地点，本調査Ｂ地点，1988年度試掘調査Ｔ－２地点，同試掘Ｔ－１地点，本調査Ａ地点と並び，その間東西約90ｍの範囲である。８次調査地点からＢ地点へは当然共通した状況を示すが，両地点の各層上面の高さを比較すると，Ｂ地点の側で20cm近く下がっており，従来通り西への下降傾向が確認された。ところが，約20ｍ西のＴ－２地点では，調査ピットの東面には「黒色土」の厚い堆積が認められるが，西に向かって急速に薄くなる。これは下層の縄文層が上昇していることを示す。さらに，その西方約25ｍに位置するＴ－１地点では，「黒色土」はやや不明瞭で，基盤層も黄褐色の砂となり，10数ｍ西に位置するＡ地点に非常に近い様相を見せる。Ａ地点近辺では1994年度試掘調査成果も注目される。その際「黒色土」と報告された土層は，その性状のほかに上面の高さや出土遺物の点から縄文時代後期層，つまりＡ地点の５層に一致すると考えられる上，基盤層も黄褐色系の砂で共通しており，Ａ地点周辺が微高地頂部を形成していた可能性を補強する。こうした状況から，本地点周辺は全体としては微高地の高い位置にあたっていることが予想され，頂部は第８次調査地点の東北部と本調査Ａ地点付近に広がり，その間のＢ地点などはその中のたわみ状となっていたことが推定できる。本遺跡第14次調査地点でも確認される地形である。従来西に向けて遺跡の希薄さを想定していたが，津島岡大遺跡の西端をより西に考え直す必要があろう。　　（山本）

参考文献

津島岡大遺跡第８次調査：「津島岡大遺跡５」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第８冊　1995　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

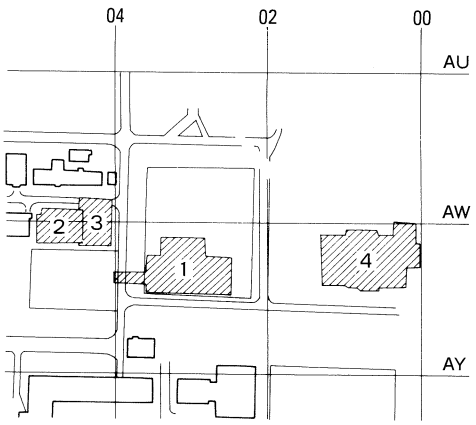
1988年度試掘調査（Ｔ－１・２）：「岡山大学構内遺跡調査研究年報」６　1989　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

1994年度試掘調査：「岡山大学構内遺跡調査研究年報」12　1995　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 2　津島岡大遺跡第17次調査（環境理工学部校舎新営予定地，津島北AW02～04区）

### a．調査の経過

1995年度に環境理工学部が新設され，馬術部の馬場として使用されていた場所に校舎が新営されることになった。これに伴って調査計画が具体化し，同年11月に試掘調査を実施した。この結果を受けて，1996年度に発掘調査を行うことになった。当初，馬術部が馬場を使用する都合から，予定域を一括して調査することができなかった。調査の進行過程で非常に不都合はあったが，調査区の南側２/３から調査に着手し，残り１/３を馬場があき次第，早急に調査にとりかかり，なるべく早期に分割調査を解消することとした。調査途中の６月には校舎建物の設計変更があり，調査区が東側へ拡張することが決まった。また，環境理工学部予定地から延びる共同溝が計画され，この部分についても調査を行うことになった。この部分は調査区が道路を横断するということもあり周辺利用者の利便性を考え，調査期間の終盤約一ヶ月ほどで調査することになった。調査は1996年５月21日に開始した。調査区が予定域全域に拡張され，調査を開始したのは1996年７月24日であり，共同溝部分の調査にとりかかったのは12月２日である。1997年１月９日をもって調査を終了した。調査員は３名，調査面積は1451㎡である。




1．本調査地点　　3．生体機能応用工学科棟
2．生物応用工学科棟　　4．サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー

**図７　調査地点位置図**（縮尺1/5,000）

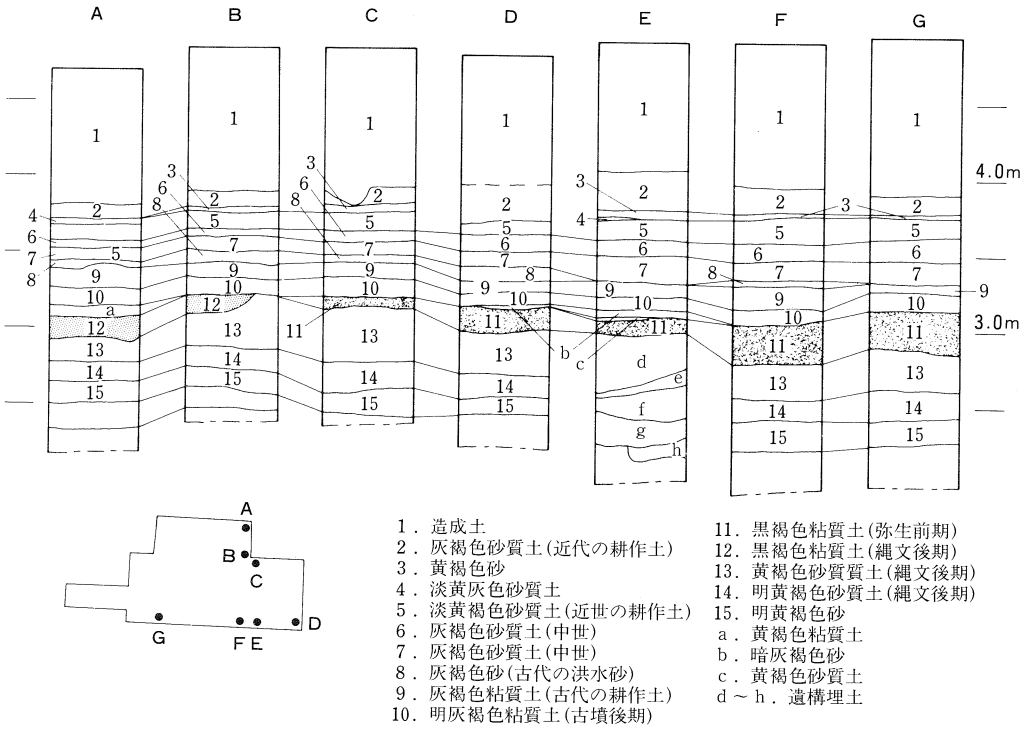
### b．地形と層序

本調査区周辺では，これまで第３次[1]，６次[2]，９次[3]，15[4]次調査を行っている。そのため，津島地区の中でも，古地形の状況が比較的よく分かっている地域である。周辺の調査成果から，縄文時代後期の段階には，調査区の北側と南側に河道がはしっていると推定されている。本調査区は，大きくみて，河道と河道に挟まれた微高地上に位置していたものと考えられる。

**層　序**（図８）

現地表は，標高4.8m前後である。１層は，1907～1908年にかけて行われた旧陸軍屯営地建設に伴う造成土である。

２，３，４層は近代の耕作土と考えられる層である。２層は灰褐色の砂質土で５㎜前後の小礫を多く含む。３層は存在が不安定で，均質に認められない。黄褐色砂層で，鉄分の沈着が顕著である。４層は淡黄灰色の砂質土で，３層よりしまりがない。下面に鉄分が沈着している。５層は近世の耕作土と考えられ，上面で耕作痕を確認した。淡黄褐色砂質土層である。５層中







1．造成土
2．灰褐色砂質土(近代の耕作土)
3．黄褐色砂
4．淡黄灰色砂質土
5．淡黄褐色砂質土(近世の耕作土)
6．灰褐色砂質土(中世)
7．灰褐色砂質土(中世)
8．灰褐色砂(古代の洪水砂)
9．灰褐色粘質土(古代の耕作土)
10．明灰褐色粘質土(古墳後期)
11．黒褐色粘質土(弥生前期)
12．黒褐色粘質土(縄文後期)
13．黄褐色砂質質土(縄文後期)
14．明黄褐色砂質土(縄文後期)
15．明黄褐色砂
a．黄褐色粘質土
b．暗灰褐色砂
c．黄褐色砂質土
d～h．遺構埋土

**図8　土層断面図**（縮尺1/50）

には，いくつか鉄分が沈着する面が認められ，細かくみれば三層程度に分層可能である。個々の層のあり方が不安定であったため，厳密な細分を行わなかった。

6層は灰褐色砂質土である。やや粘性があり，上面で鉄分の沈着が顕著に認められた。上面では耕作痕を検出した。7層も灰褐色砂質土で6層に似るが，白色の砂を多く含む。鉄分の沈着が認められる。6，7層は中世後半期の耕作土と考えられる。

8層は灰褐色の砂であるが，鉄分の沈着が著しく橙灰色にみえる部分もある。調査区の北部から南東部に堆積している。調査区南西部分では存在が不安定であった。古代の洪水砂と考えられる。9層は灰褐色粘質土である。1㎜前後の砂粒を多く含む。古代の水田層である。10層は明灰褐色の粘質土で，9層に似るが，かなり粘性が強い。須恵器が多数出土しており，古墳時代後期頃に属する。

11層は暗黒褐色の粘質土で，津島地区一帯にみられるいわゆる「黒色土」である。弥生時代前期に相当する層である。後の時期の削平のため，上面にはクレイ・ボールなどがみられる。本層の上に直接古墳時代後期の層が堆積することも，削平の事実をものがたるものであろう。しかし，調査区南東部分では，11層上に暗灰褐色の粗砂が堆積する部分があり，ここでは本層上面で水田畦畔を検出している。11層は調査区中央付近から南東部にかけて，堆積状況がやや不安定である。この部分では砂質が強くなる。また，調査区北半部では本層に対応する層は認

められなかった。

12層は黒褐色粘質土層である。11層に似るがやや粘質が強い。調査区北半部のみに認められる。当初は11層と認識して調査を行っていた。ところが，12層では弥生時代前期の土器が見あたらず，縄文後期の土器が多量に出土した。この点を考慮して，本層を縄文時代後期の包含層と判断し，11層とは区別して掘り下げた。調査区南半部で本層と対応する層としては，11層の下半部が考えられる。11層下半に関しては，12層とよく似ており，調査時には識別が困難であったが，遺物の状況や土壌の粒体分析によって識別できる可能性がある。また，地形の高い部分では13層上半部が12層に対応する可能性が高い。

13層上半部（13ａ層）は，黄褐色砂質土に黒褐色粘質土をブロック状に含むものである。本来は12層が存在していたが地形が高いために削平され，痕跡として残っているようである。13層は黄褐色砂質土層である。調査区東部の地形の高い部分では，マンガン粒を多く含む。地点によって若干異なるが，色調で２層あるいは３層に細分可能である。また，調査区北辺部では粘性がかなり増し，グライ化している。縄文時代後期の包含層である。

14層は13層に似るが，砂質が増しており，しまりが悪い。13層同様に調査区北辺部分では，粘質が強くなる。縄文後期の包含層である。

15層は縄文時代後期の基盤層である。

**地　形**

〈縄文時代後期以前〉

古地形を確認する目的で，数ヶ所に深掘りトレンチを設定した。その土層観察の所見から，縄文後期以前の段階で，多量の土砂が堆積する状況を確認できた。この段階で，これ以降の地形が規定されたものと考えられる。

〈縄文時代後期～弥生時代前期〉

周辺での発掘調査や立会調の成果から，縄文後期段階には，調査区北側と南側に河道の存在したものと考えられる。調査区中央付近が微高地のほぼ頂部付近にあたり，そこから河道側に向かって地形が下がっていくようである。

〈古墳時代後期以降〉

古墳時代後期以降は，その前段階までの地形の起伏が解消されていく。古墳時代後期と古代，および中世の後半に人為的な地形改変が行われたようである。

**ｃ．遺構と遺物**

**縄文時代後期**（図９）

住居址１棟，焼土集中部７ヶ所，土坑７基，900基あまりのピットおよび溝５条（SD８～12）などを検出した。

図９　縄文時代後期の遺構（縮尺1/400）

住居址は13層上面で検出した。平面形は長楕円形であり，規模は長径６ｍ，短径4.5ｍ，深さ0.5ｍである。柱穴を７ヶ所で検出したが，本来は８ヶ所あったと考えられる。住居址内で焼土集中部を２ヶ所確認したが，そのうち１ヶ所が炉址と思われ，深鉢形土器が炉址から倒れこむような状況で出土した。ピットは13，14層で900基あまりを検出した。土器を多数含むものが多くみられた。溝５条は13層上面で検出した。SD８・９は北西―南東の方位をとる。SD10・11がほぼ北東―南西方向の流路を示し，SD12は北西―南東方向の流路を示す。溝の時期は，遺物や埋土の状況から検討する必要がある。

弥生時代（図10）

水田畦畔と溝４条（SD４～７）を確認した。水田畦畔は，弥生前期段階のものである。黒色土上面（11層）に暗灰褐色の洪水砂が残存していた調査区南東付近でのみ検出できた。洪水砂にパックされており，残存状況は比較的良好であった。溝は11層上面とａ層から掘りこまれているものがあるが，時期的に大きな差はないと考えられる。いずれにしても所属時期の検討を要する。

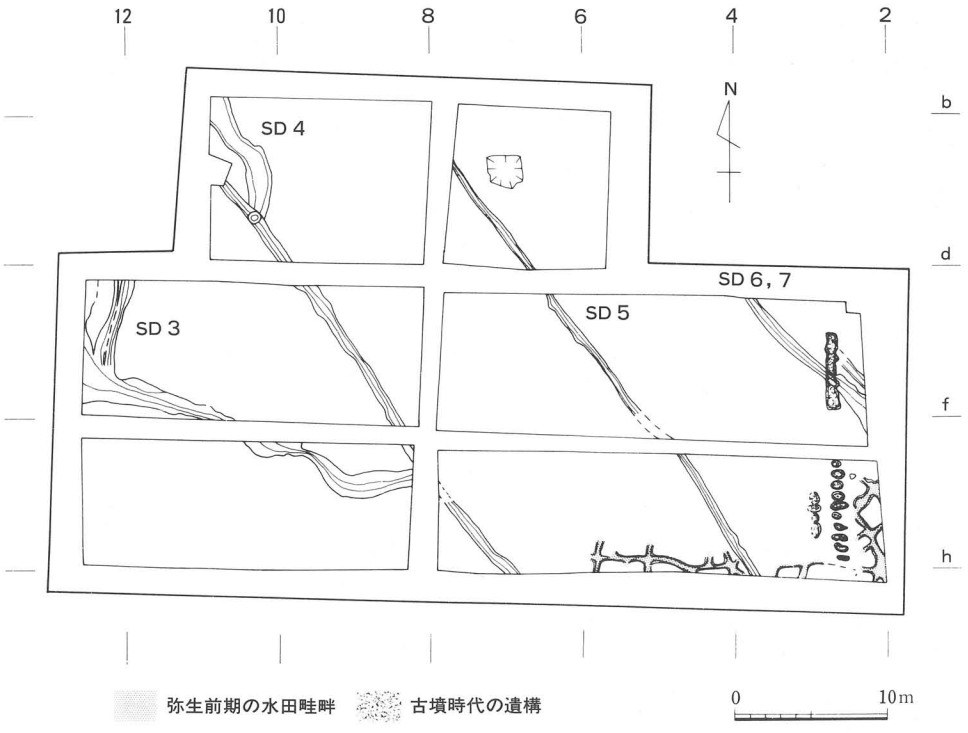



**図10　弥生前期～古墳時代の遺構**（縮尺1/500）

古墳時代（図10）

古墳時代前期の遺構と考えられる溝を１条（SD３）検出している。調査区南側では南東―北西方向の流路をとるが，調査区西辺部分では南―北の流路をとる。基底面が北から南に向かうにつれて浅くなり，調査区南東側では検出できなかった。古墳時代前期の遺物を多く含んでいた。

古墳時代後期に属すると考えられるのは，２列の柱穴列である。埋土は灰褐色粘質土で，10層に似る。

古　代

洪水砂と考えられる８層を除去していくと，９層上面で水田畦畔を検出した。調査区中央付近や西半では洪水砂のありかたが不安定であった。そのためか，必ずしも畦畔の残存状況は良好なものとは言えなっかた。また，調査区内にはかかっていなかったが，北壁で当該期の溝を確認した。これはその方向からみて，第９次調査などで検出されている古代の大溝と一連のものである可能性が高い。

中世以降

耕作面を中世で２面，近世で１面，近代で１面確認している。

ｄ．調査のまとめと課題

今回の調査地点は，河道と河道に挟まれた微高地にあたる。微高地上における縄文時代後期の居住域を確認することができた。良好な状況で住居址を検出しているし，また土器が数多く入ったピットや土壙も確認している。第15次調査でも，本調査地点と一連の微高地上で住居址やピット群を検出した。今回，縄文時代後期の居住域が，南西に広がることがおさえられたことで，当該期の土地利用状況を考えるうえで重要な資料となるであろう。

縄文時代後期の遺構からは，一括性の高い土器がまとまって出土した。また，包含層からも多量の土器が出土している。第３次，９次，15次調査地点の土器とあわせて，縄文時代後期前半の土器の変遷を追える良好な資料となるだろう。

なお，本調査の資料は現在整理途上にあり，本報告の内容は暫定的なものである。（横田）

註

（１）『津島岡大遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊　1992　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（２）『津島岡大遺跡６』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第９冊　1995　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（３）『岡山大学構内遺跡調査研究年報』10　1993　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（４）『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13　1996　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 第３節　立会調査

### （１）津島地区（図11—12，表１）

津島地区の立会調査は事業別にみると11件，計36箇所で行った。大半の調査は掘削深度が浅く造成土内で終了した。掘削深度が深かった調査では④⑫⑬⑲がある。以下に詳細を記す。

調査④は農・薬学部動物実験施設新営に伴う旧棟の便所漕抜き取りに際し，掘削部分の土層確認を行った。深さ2.2mまで掘削し，厚さ1.9mの造成土以下，７枚の層を確認した。

調査⑨⑫⑬はいずれもサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営に伴うものである（図11）。⑨は電気設備工事のための掘削に伴うものである。調査⑫では外灯埋設のため６箇所で1.4mまで掘削し，断面の確認をおこなった。G地点では明治期の耕作土と考えられる青灰色粘土層と，通常認められる造成土との間に黄褐色土の堆積が見られ，この層中には黒色土～明治層の混入が認められた。このことから明治期以降に，陸軍の造成工事に伴うか確定できないが，周辺を掘削した造成工事が行われたと考えられる。この地点では山土と考えられる尺が，明治尺，直下の標高3.5m付近まで上がってきている。G地点付近では，地形が高かったようである。周辺をみてみると朝寝鼻貝塚の存在が注目される。朝寝鼻貝塚は北側の丘陵部裾付近に存在していたが，現在は民家・用水路のために削平されている(1)。今回の調査から本来，この丘陵が大学敷地内にまで延びており，明治以降に掘削されたと推定される。

調査⑬では排水管・給水管埋設のため，南北45m，幅0.8mにわたり，深さ1.6～2.0mまで掘削を行った。既設工事との関連で予定よりも深度が深くなり，掘削が始まった直後に多くの遺物が認められたため，掘削部分について全面で土層断面の記録と遺構検出を実施した（図11—A～D）。その結果狭い範囲ではあるが，溝状遺構を少なくとも５条確認した。出土遺物も範囲に比して多かった（図12）。旧地形をみると調査部分の南北では様相が異なり，南半部分では弥生～古墳時代にかけて，南北方向の溝状遺構が重複している。一方北半部分では標高3.4mとかなり高い地点で黒色土の存在が認められ，周辺に微高地が形成されていたと考えられる。北半部では南半部とは別個の弥生時代の遺構が認められた。以上の調査で得られた知見は周辺での発掘調査(2)の成果と併せて津島岡大遺跡の北東部一帯の状況を考える有益な資料である。

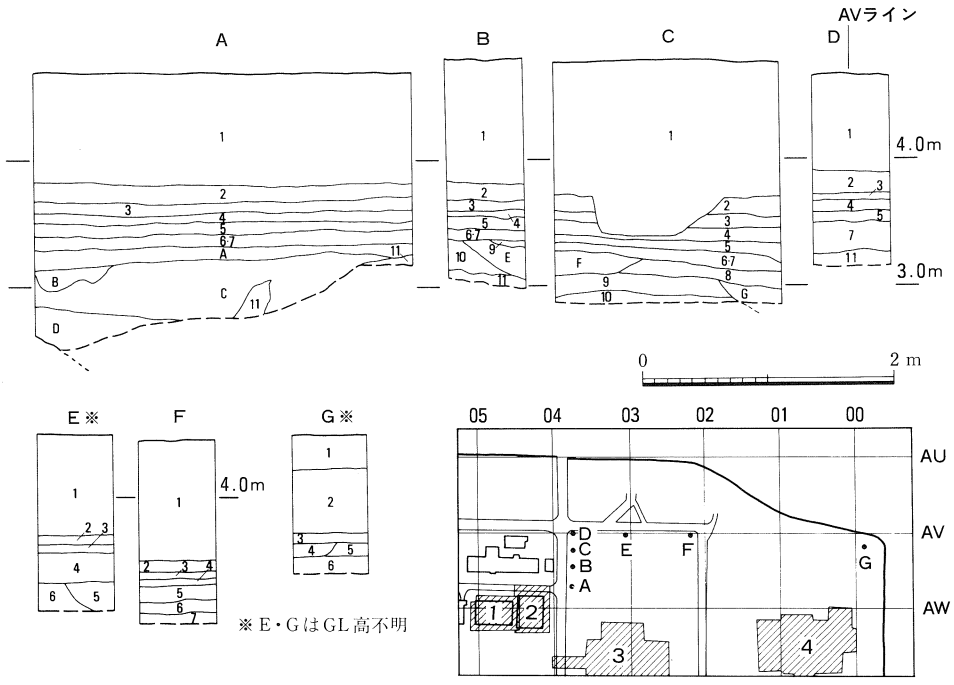
調査⑲は市道の拡幅工事に伴うものである（図13）。この工事は岡山市が原因者であるが，関連工事が大学敷地内にかかるため，工事地内の埋蔵文化財については関係者の事前協議の結果，岡山市文化課による調査に大学側が立ち会うこととなった(3)。このうち道路掘削部分の試掘調査について以下に述べる。工事部分は津島キャンパスの北西端にあたり，グラウンドを一部周辺道路面まで掘削した。掘削部分は南北約100m，幅３mにわたるため，事前に３箇所にトレンチを設定し，土層の確認を実施した（図13）。また調査⑲—ｃは，東隣で機械により防球ネットポール13箇所の掘削が行われ，両方の成果からキャンパス北西部は低湿地状を呈してお

り，構内座標AWラインより南では弥生前期相当の黒色土が認められた。南半の状況は津島岡大第12次調査の層準にほぼ対応する。

（２）鹿田地区（表１）

鹿田地区では事業別にみると１件，２箇所で立会調査を行ったが，いずれも造成土内で終了した。

（岩崎）




調査地点位置図（縮尺1/5,000）
1．第６次調査地点
2．第９次調査地点
3．第17次調査地点
4．第３・15次調査地点

調査⑬Ａ～Ｄ断面
1．造成土
2．青灰色粘質土(明治)
3．淡黄褐色砂質土(近世)
4．淡褐色砂質土(近世)
5．暗灰色粘質土(中世)
6．灰褐色砂質土(古代？)
7．灰色砂質土(古代？)
8．灰褐色粘質土(古墳？)
9．淡褐色砂質土(弥生)
10．暗茶褐色砂質土(弥生)
11．淡茶褐色砂質土

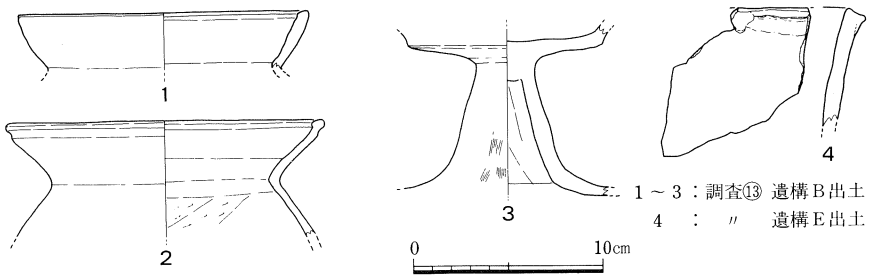
遺構埋土
A．灰色粘質土……古代　溝
B．暗灰色粘質土…古墳時代前半？　溝
C．淡茶褐色砂……　〃
D．淡灰色細砂……　〃
E．暗褐色砂質土…弥生時代　遺構
F．灰褐色砂質土…古墳時代前半？　溝
G．茶灰色砂質土…弥生時代？　溝

調査⑫
Ｅ断面
1．造成土
2．青灰色粘土
3．淡黄灰色砂質土
4．黄灰色砂
5．灰褐色砂(遺構か？)
6．灰褐色粘土

Ｆ断面
1．造成土
2．青灰色土
3．淡青灰色粘質土
4．淡(黄)灰色粘質土
5．淡(黄)灰色砂質土
6．暗(黄)灰色粘質土
7．明茶灰色粘質土

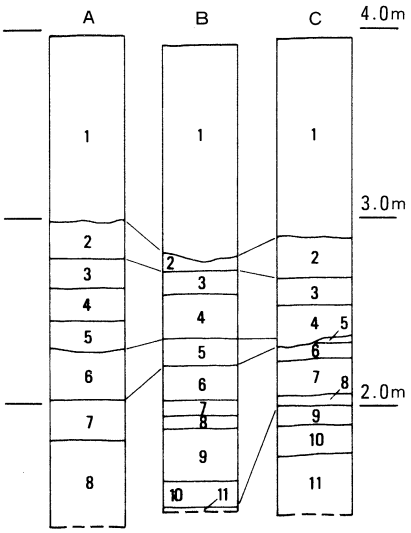
Ｇ断面
1．造成土(角礫・レンガ含)
2．造成土
(明治～黒色土の再堆積)
3．淡灰色土(明治耕作土)
4．淡灰色土(細礫過多・硬質)
5．黄灰色土(　〃　・　〃　)
6．暗茶灰色土(　〃　・　〃　)
＊４～６は地山の可能性強い

**図11　調査⑫⑬土層断面図**（縮尺1/60）




| 番号 | 器種 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 形態・手法の特徴ほか | 色調（内面・外面） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | (15.2) | — | — | ヨコナデ | 淡黄褐色 | 微砂 |
| 2 | 甕 | (14.2) | — | — | ヨコナデ，体部内面：ヘラケズリ | 淡黄褐色・暗黄褐色 | 微砂 |
| 3 | 高杯 | — | — | — | 杯部：ナデ，脚部外：タテハケ・ナデ，内：ケズリ・ナデ | 淡橙褐色 | 微砂 |
| 4 | 深鉢 | — | — | — | 内外面・口唇部ともにナデ | 淡褐色・淡暗褐色 | 細砂 |

**図12　調査⑬遺物実測図**（縮尺1/40）




A地点
1．造成土
2．旧耕土
3．灰(青)色粘質微砂
4．灰黄褐色粘質微砂
5．灰色粘質微砂
6．灰色組砂
7．灰褐色微砂
8．灰色粘質シルト

B地点
1．造成土
2．旧耕土
3．灰青色粘質微砂
4．灰(青)粘質細砂
5．灰色粗砂
6．灰(黄)色粘質微砂
7．灰色粘質微砂
8．淡灰色粘質微砂
9．灰色粘質微砂
10．灰(褐)色粘質微砂
11．黒褐色粘質微砂

C地点
1．造成土
2．旧耕土
3．灰青色粘質細砂(Fe含)
4．灰青色粘質細砂
5．灰色粗砂
6．淡灰色粘質微砂
7．黄灰色粘質微砂
8．灰黄褐色粘質細砂
9．黒褐色微砂
10．黒灰褐色粘質微砂
11．淡黄褐色微砂

**図13　調査⑲土層柱状図**（縮尺1/40）

註

（1）岡山理科大学によって調査が行われている。

（2）『津島岡大遺跡3』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊）1992
松木武彦「津島岡大遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』10　1993
山本悦世「津島岡大遺跡第15次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13　1995
横田美香「津島岡大遺跡第17次調査」本号9～14頁
以上いずれも岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

（3）図は岡山市文化課より提供を受けた資料を浄写したものである。掲載にあたっては同市文化課の許可を得ている。

## 表1　1996年度調査一覧

| 番号 | 種類 | 調査地区 | 所属 | 調査名称 | 調査期間 | 掘削深度（m） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 発掘 | 津島北 AW00·01 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営 | 1.16～4.24 | 2.8 | 調査面積660㎡。（縄文時代については1600㎡）弥生時代の水田·溝，弥生早期貯蔵穴，縄文後期貯蔵穴·竪穴住居·炉·ピット群·土坑〈津島岡大第15次調査〉 |
| ② | 発掘 | 津島南 BD19～20 | 農·薬 | 動物実験棟新営 | 5.7～15 | 2.2 | 調査面積30.3㎡。A地点：縄文時代と古墳時代の土坑。B地点：中世の溝，古代の柱穴列，弥生時代の水田<br>〈津島岡大第16次調査〉 |
| ③ | 発掘 | 津島北 AW02～04 | 環 | 環境理工学部新営 | 5.21～1.9 | 2.7 | 調査面積1451㎡。古代の水田，弥生時代の溝·水田，縄文時代後期の住居址·ピット群·土坑<br>〈津島岡大第17次調査〉 |
| ④ | 立会 | 津島南 BC18 | 農·薬 | 動物実験棟新営に伴う造成土取り | 4.8·9 | 0.86 | 黒色土層付近まで掘削 |
| ⑤ | 立会 | 津島南 BD16～19 | 農·薬 | 動物実験棟新営に伴うハンドホール設置工事 | 5.23,6.7 | 1.3 | 造成土以下5層確認 |
| ⑥ | 立会 | 津島北 AX03～AY03 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営ガス管設置工事 | 7.1·2 | 1.0 | 明治層·近世層確認 |
| ⑦ | 立会 | 津島南 BC18～20 | 農·薬 | 動物実験棟新営に伴う排水桝設置工事 | 7.29,8.1,8.2<br>8.5,9.18 | 1.2 | 明治～近世層まで掘削 |
| ⑧ | 立会 | 津島南 BD18 | 農·薬 | 動物実験施設新営に伴う給水管設置工事 | 8.20 | 1.2 | 造成土内 |
| ⑨ | 立会 | 津島北<br>AU06,AV06,AU00<br>AU01,AU02 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営ハンドホール設置工事 | 8.21,8.26 | 1.0 | 明治層まで掘削 |
| ⑩ | 立会 | 津島北 AX12 | 事 | 福利厚生施設北棟スロープ設置工事 | 8.26 | 0.7 | 造成土内 |
| ⑪ | 立会 | 津島北<br>AU11,AV12,AW12 | 事 | 福利厚生施設北棟仮設電柱設置工事 | 8.28 | 1.3 | 大半が造成土内までの掘削，一部明治層を掘削 |
| ⑫ | 立会 | 津島北<br>AV02,AV03,AV04,<br>AV99,AW02,AW04 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営外灯設置工事 | 8.30,9.6<br>9.12 | 1.0～1.5 | 明治層2面，近世層2面，中世層？1面，弥生層？1面確認 |
| ⑬ | 立会 | 津島北 AV03～AW03 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営排·配管設置工事 | 9.27～10.21 | 2.0 | 弥生層まで掘削。古墳時代前期の遺構·遺物確認 |
| ⑭ | 立会 | 津島南 BD19 | 農·薬 | 動物実験棟新営外灯設置工事 | 10.3 | 1.2 | 明治層上面まで掘削 |
| ⑮ | 立会 | 津島南 BD19 | 農·薬 | 動物実験棟新営ガス工事 | 10.4 | 0.9 | 明治層まで掘削 |
| ⑯ | 立会 | 津島北 AW·AX11 | 事 | 福利厚生施設北棟新営樹木移植 | 10.8 | 0.7 | 造成土内 |
| ⑰ | 立会 | 津島北 AX14,AY13 | 図 | 附属図書館新営電気設備工事 | 10.25 | 1.4 | 造成土内 |
| ⑱ | 立会 | 津島北 AW03 | 環 | 環境理工学部新営予定地電柱移設工事 | 11.11 | 2.0 | 黒色土まで掘削 |
| ⑲ | 立会 | 津島北 AU～AW17 | 文法 | 市道津島中1号線道路改良工事 | | | |
| a | | | | 樹木移植 | 11.15 | 0.9 | 造成土内（岡山市文化課立会調査を見学） |
| b | | | | 試掘調査 | 11.2 | 2.65 | 3ヶ所試掘（岡山市文化課による試掘を見学） |
| c | | | | 防球ネットポール移設工事 | 1.1 | 3.0 | 径40㎝のオーガーで13ヶ所掘削 |
| ⑳ | 立会 | 津島北 AX～AY14 | 図 | 附属図書館新営ガス管設置工事 | 11.18 | 1.1 | 明治層上面まで掘削 |
| ㉑ | 立会 | 津島北 AV13 | 図 | 附属図書館新営電気設備工事 | 11.2 | 1.3 | 明治層を若干掘削 |
| ㉒ | 立会 | 津島北 AW11,AX11 | 事 | 福利厚生施設北棟電気·水銀灯埋設工事 | 11.22,2.28 | 1.2 | 造成土，盛土内 |
| ㉓ | 立会 | 津島南 BC18·19 | 農·薬 | 動物実験棟新営に伴う建物取り壊し工事 | 11.25,11.29 | 0.5 | 造成土，既設工事内 |
| ㉔ | 立会 | 津島北<br>AW14,AY13,AY14<br>AV13,AU08 | 図 | 附属図書館新営電気設備工事·外灯 | 11.25,12.3<br>12.4,12.6<br>12.12 | 1.4 | 明治層上面まで掘削 |
| ㉕ | 立会 | 津島北 AV13 | 図 | 附属図書館新営雨水桝·外構工事 | 12.19 | 1.3 | 造成土以下,青灰色粘質土,黄褐色粘質土，灰褐色粘質土を確認 |
| ㉖ | 立会 | 津島北 AW02 | 環 | 環境理工学部給水管修繕工事 | 1.16 | 1.0 | 造成土内 |

| 番号 | 種類 | 調査地区 | 所属 | 調査名称 | 調査期間 | 掘削深度(m) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ㉗ | 立会 | 津島北 AW･AX11 | 事 | 福利厚生施設北棟新営自転車駐輪場設置工事 | 1.20 | 0.8 | 造成土内 |
| ㉘ | 立会 | 津島北 AX12 | 図 | 附属図書館新営ガス管工事 | 1.27 | 1.0 | 造成土内 |
| ㉙ | 立会 | 津島北 AW･AX11･12 | 事 | 福利厚生施設北棟新営外構工事 | 2.24,3.4 | 1.4 | 近世層まで掘削 |
| ㉚ | 立会 | 鹿田 | 医 | グラウンド遊歩道設置関連工事 | 2.21,2.24 | 0.8 | 造成土内 |
| ㉛ | 立会 | 津島北 | 事 | 福利厚生施設北棟ガス管埋設工事 | 3.4～3.7 | 1.72 | 近世層まで掘削 |
| ㉜ | 立会 | 津島北 AW14･15 | 文法経 | 自転車駐輪場設置工事 | 3.7 | 1.1 | 造成土内 |
| ㉝ | 立会 | 津島北 AZ11･12 | 理 | 自転車駐輪場設置工事 | 3.14 | 1.0 | 造成土内 |
| ㉞ | 立会 | 津島北 AW10 | 工 | 自転車駐輪場設置工事 | 3.17 | 1.0 | 造成土内 |
| ㉟ | 立会 | 津島南 BE16,BE20,BE22,BE18 BG16 | 農 | 農学部防犯外灯設置工事 | 3.19 | 0.7 | 造成土内 |
| ㊱ | 立会 | 土生 | 事 | 土生宿舎駐輪場設置工事 | 3.19 | 0.7 | 近世の水田を確認 |
| ㊲ | 立会 | 津島北 | 工 | 工学部アース板設置工事 | 3.21 | 1.7 | 既設工事内 |

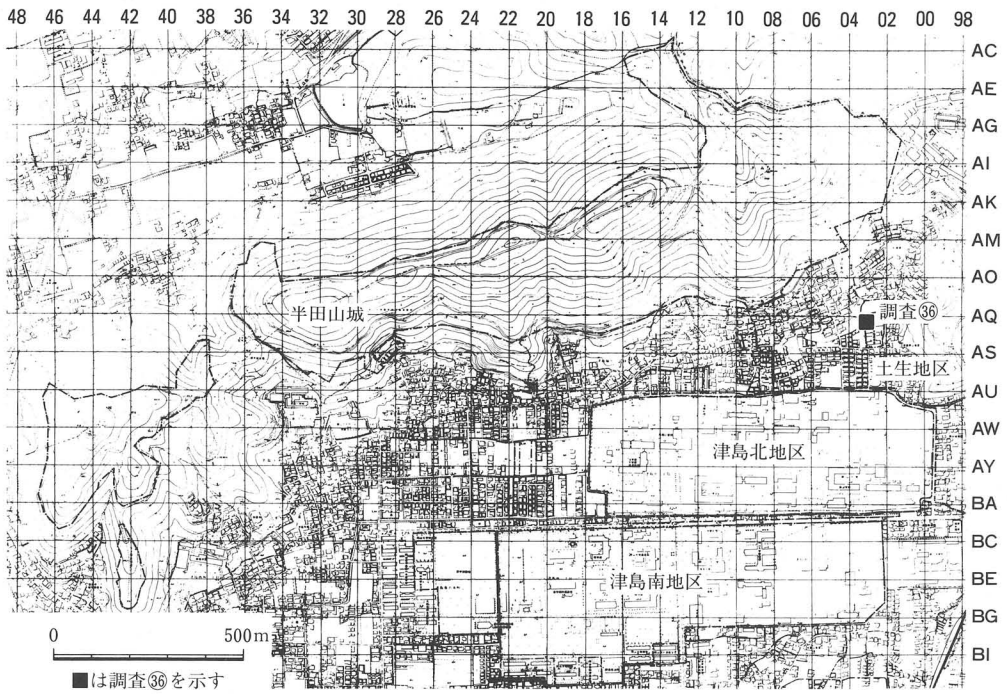



**図14　津島地区全体図**（縮尺1/20,000）

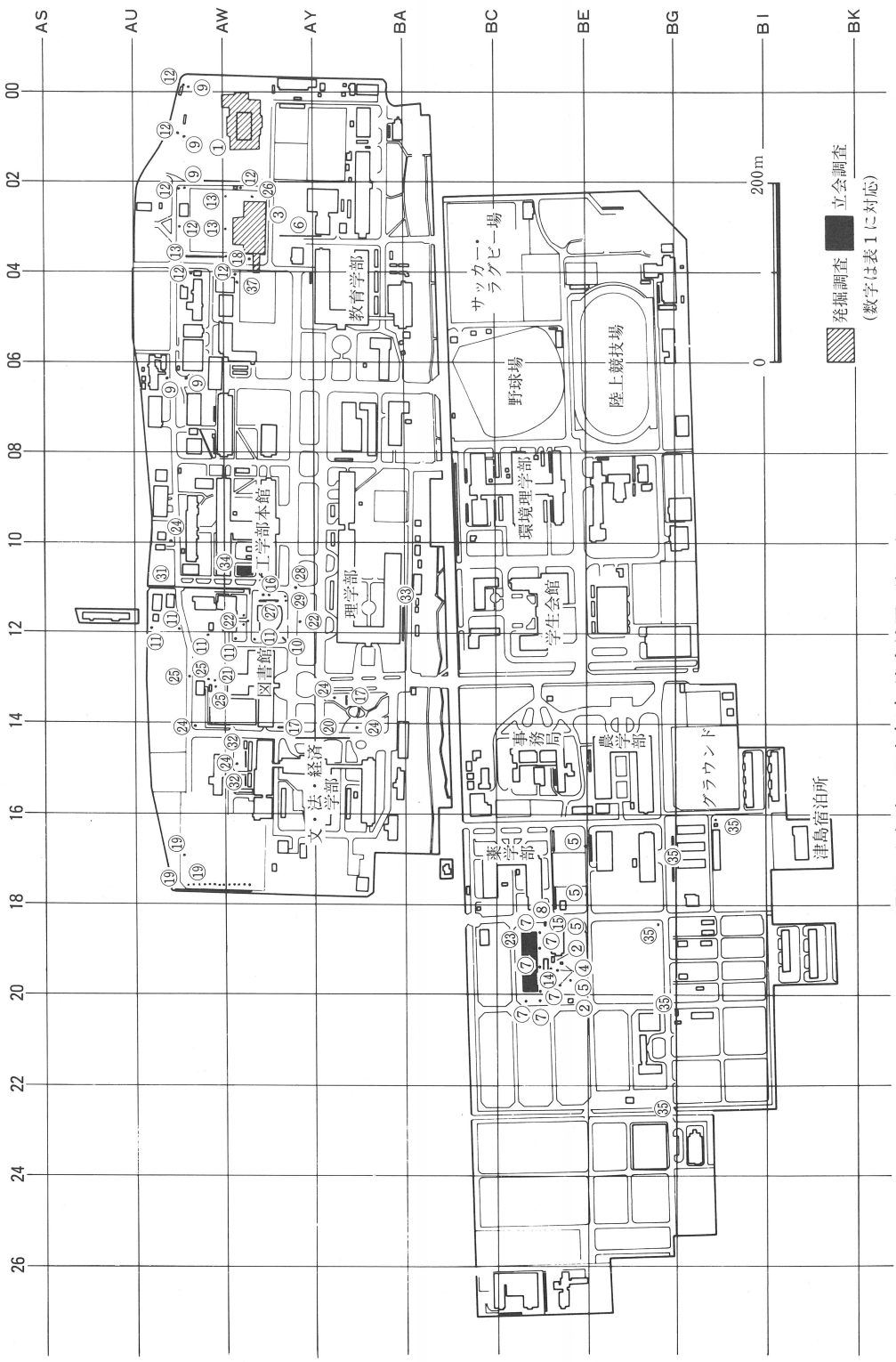



図15　今年度の調査(1)　津島地区 (縮尺1/7,500)

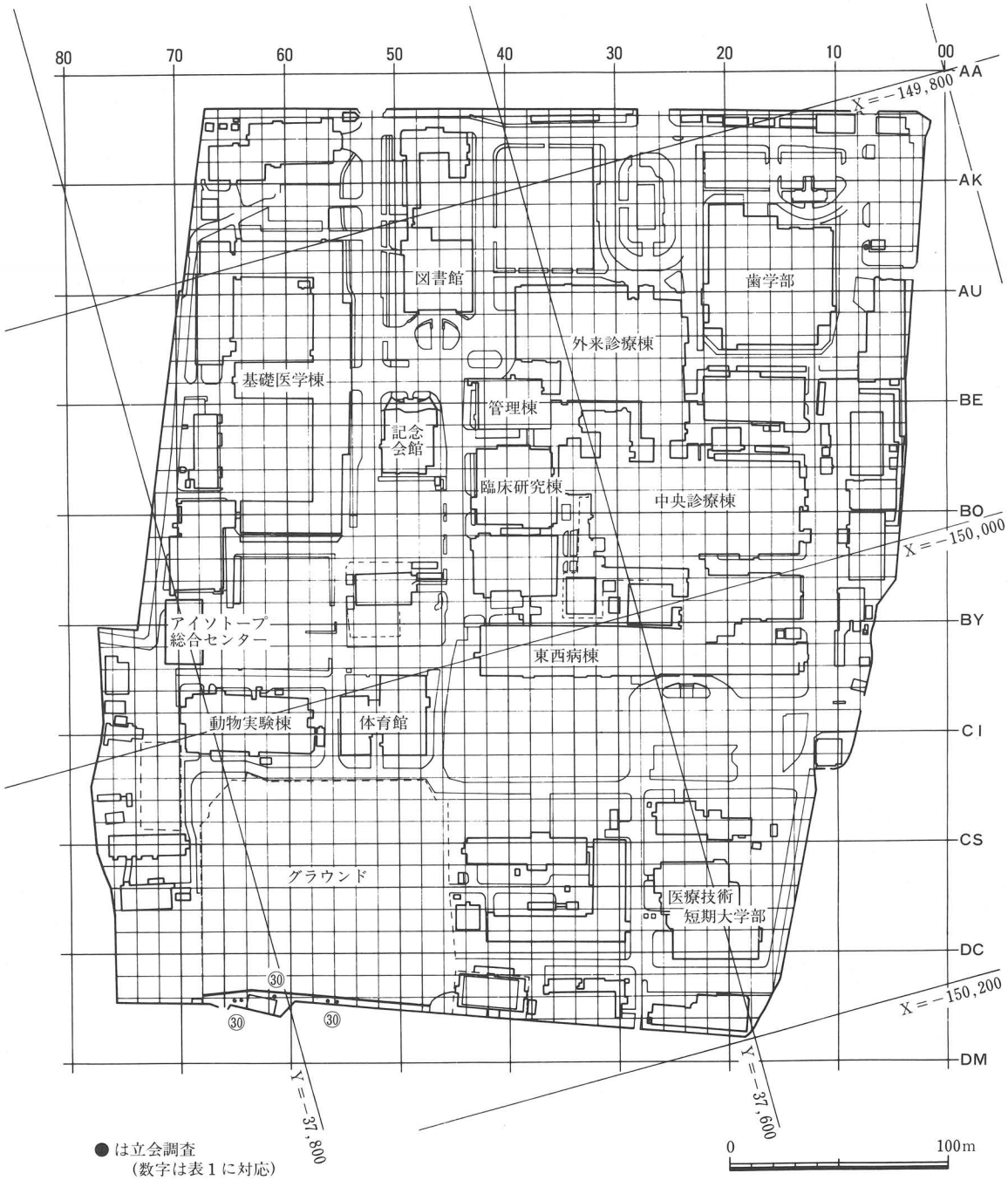



**図16　今年度の調査（２）鹿田地区**（縮尺1/3,000）

# 第2章　1996年度普及・研究・資料整理活動

## 1　資料整理

本年度は次の3件の発掘調査の資料整理を行った。

① 鹿田遺跡第6次調査（アイソトープ総合センター）：報告書刊行

② 津島岡大遺跡第13次調査（福利厚生施設北棟）：報告書刊行

③ 津島岡大遺跡第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟）：遺物の実測

## 2　分析依頼

① 津島岡大遺跡第9次調査出土杭の樹種同定…農林水産省森林総合研究所　能城修一

② 津島岡大遺跡第9次調査出土種子の分析…岡山大学環境理工学部　沖　陽子

## 3　刊行物

| | | |
|---|---|---|
| ① | 岡山大学構内遺跡調査研究年報　第13号 | 1996年10月　刊行 |
| ② | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号 | 1996年10月　刊行 |
| ③ | 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊 | 1997年3月　刊行 |
| ④ | 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第12冊 | 1997年3月　刊行 |
| ⑤ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号 | 1997年3月　刊行 |

## 4　調査員の活動

(1)　資料収集活動

岩崎志保

輸入陶磁器資料の実査：大阪市立東洋陶磁美術館

中国戦国～漢代の遺物の実査

小林青樹

縄文晩期・弥生早前期土器資料の調査：大阪府埋蔵文化財センターほか

弥生時代繊維遺物資料の調査：新宿区立歴史民俗博物館ほか

データーベース関連の調査：京都市埋蔵文化財研究所・京都大学・奈良国立文化財研究所

奈良県立橿原考古学研究所ほか

野崎貴博

大和の埴輪資料の実査：奈良国立文化財研究所

前期古墳の踏査：石川県・京都府・奈良県

山本悦世

中世土器の資料調査：瀬戸市埋蔵文化財センター

⑵　学会・研究会参加等

岩崎志保

考古学研究会総会（４月），土器持寄会（８月），埋蔵文化財研究集会（３月）

小林青樹

考古学研究会総会（４月），日本考古学協会総会（５月），中四国縄文研究会（６月）

野崎貴博

考古学研究会総会（４月），日本考古学協会総会（５月），文化財保存全国協議会神戸大会（７月），埋蔵文化財研究集会（８月，３月）

山本悦世

考古学研究会総会（４月），日本考古学協会総会（５月），古代の土器研究会（10月），日本考古学協会三重大会（11月）中世土器研究集会（12月），第７回土器持寄会（２月）

横田美香

考古学研究会総会（４月）

⑶　研究発表他

小林青樹

「農耕社会成立期の社会動態―突帯文土器の絵画・記号をてがかりに―」考古学研究会例会（12月）

山本悦世

講演：㈶広島県埋蔵文化財調査センター専門研修「縄文時代の低湿地型貯蔵穴―その使用方法と意義―」

横田美香

「古墳の終焉から火葬墓の出現」埋蔵文化財研究集会（３月）

⑷　論文・資料報告

岩崎志保

「輸入陶磁器からみた鹿田遺跡」『鹿田遺跡』４岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊

小学館『日本歴史辞典』（分担執筆）

小林青樹

「伊豆諸島三宅島における初期農耕の成立と環境適応」『環境制御』９

「東京都下戸塚遺跡出土絹製品の材質と技法に関わる研究」『文化財科学会　平成９年度大会要旨集』

山本悦世

「岡山県南部における土師質鍋の変遷」『鹿田遺跡』４　岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊

横田美香

「吉備地域の家形陶棺の編年と系列」『古代吉備』第18集

## 5　日誌抄

1996年

4月1日　小林青樹，野崎貴博助手着任
第1回月例会議
・平成8年度事業計画・予算案
4月4日　センター歓迎会
4月5日　木器処理，PEG 濃度を95％に上げる
4月18日　臨時会議
・「ユニバーシティーミュージアム構想」について
5月1日　運営委員会開催
・平成7年度決算報告
・平成8年度予算案
・平成8年度事業計画
5月2日　猪原千恵技術補佐員着任
第2回月例会議
5月7日　津島岡大遺跡第16次調査開始
5月15日　津島岡大遺跡第16次調査終了
5月21日　津島岡大遺跡第17次調査開始
5月22日　管理委員会開催
・平成7年度決算報告
・平成8年度予算案
・平成8年度事業計画
5月23日　臨時会議
・運営委員会，管理委員会報告
6月3日　第3回月例会議
・報告書作成進行状況
・調査報告
6月20日　木器処理，PEG 濃度を98％に上げる
6月26日　第4回月例会議
7月26日　第5回月例会議
8月1日　吉田生物研究所にアンペラ保存処理依頼
8月22日　博物館実習開始　受講生33名（～30日）
8月30日　木器処理　第2期分保存処理終了
8月31日　光石鳴巳助手退職
9月2日　第5回月例会議
10月1日　第6回月例会議
10月21日　センター報16号納品
10月24日　年報13号納品，年報13号，センター報16号発送
11月1日　第7回月例会議
11月12日　自己評価委員会
11月14日　第3回展示会「津島と鹿田の4000年」開催（～16日）
11月16日　津島岡大遺跡第17次調査現地説明会開催
11月26日　運営委員会開催
12月2日　第8回月例会議
12月10日　センター建物内ワックスがけ
12月18日　木器処理第3期分保存処理開始
12月26日　大掃除
12月27日　御用納め

1997年

1月6日　御用始め
1月9日　津島岡大遺跡第17次調査終了
1月10日　第9回月例会議
1月20日　運営委員会開
1月29日　管理委員会開催
2月3日　第10回月例会議
3月3日　第11回月例会議
3月25日　『鹿田遺跡4』『津島岡大遺跡8』納品
3月27日　『鹿田遺跡4』『津島岡大遺跡8』発送
3月30日　宇藤桜子技術補佐員退職

## 6　1996年度までの遺物保管状況

1997年３月31日における本センターの遺物収蔵量は表２に掲げるとおりで，約30リットル収納のコンテナに換算すると2213箱である。昨年度に比較すると61箱の増加となった。発掘調査では津島岡大遺跡第16・17次調査を行っており，50箱分の遺物が出土した。とくに縄文時代後期の遺物が大多数を占めた。遺物の他に土壌サンプルなどを10箱分採集した。一方試掘・立会調査での出土遺物は少なく，昨年度までの収蔵量と大差ない。

## 7　遺物の保存処理

本センターでは1992年度から構内遺跡から出土した木製品について，PEG（ポリエチレングリコール）含浸による保存を行っている。第１期保存処理は1992年７月から1993年11月まで行った。第２期保存処理は1994年６月から開始し，1994年度末までに PEG 濃度を65％まで上昇させた。1995年度の濃度上昇工程は以下のとおりである。

1995年５月10日　65％→70％　　６月30日　70％→75％　　８月31日　75％→80％
11月６日　80％→85％　　1996年１月５日　85％→90％　　４月８日　90％→95％
６月20日　95％→98％　　８月30日　木器処理完了

第２期分が終了したことをうけ，第３期保存分を1996年12月から開始した。今年度は，濃度を25％まで上昇させた。

表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

| 所属 | 種類 | 地区<br>調査名称 | 箱数（１箱：約30ℓ） | | | | | | 備考<br>主要時期・特殊遺物 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 総数 | 土器 | 石器 | 木器 | その他 | サンプル | | |
| 医病 | 発掘 | 鹿田第１次調査（外来診療棟） | 608 | 491 | 6 | 60 | 1<br>ガラス<br>鉄器<br>銅鏃<br>他 | 50 | 弥生中期～中・近世<br>短甲状・櫂状木器等 | ⑦ |
| 〃 | 〃 | 鹿田第２次調査（NMR-CT室） | 116 | 90 | 3 | 20 | | 3 | 弥生後期～中世，田舟・木簡等 | 〃 |
| 医短 | 〃 | 鹿田第３次調査（校舎） | 131 | 36 | | 90 | | 5 | 古代～中世 | ⑩ |
| 〃 | 〃 | 鹿田第４次調査（配管） | 3 | 2 | | | | 1 | 古代，鹿角製品 | 〃 |
| 医病 | 〃 | 鹿田第５次調査（管理棟） | 119 | 79 | 1 | 20 | | 19 | 弥生後期～中・近世 | ㉔ |
| ア | 〃 | 鹿田第６次調査<br>（アイソトープ総合センター） | 30 | 29.5 | 0.5 | | | | 中世，青銅製鋺 | ㊵ |
| 全 | 〃 | 津島岡大第１次調査（NP-1） | 4 | | | 4 | | | 弥生中期～古代 | ③ |
| 農 | 〃 | 津島岡大第２次調査<br>合併処理槽<br>排水管 | 18 | 7<br>6 | 1 | | | 4 | 弥生早期～弥生前期 | ④ |
| 学生 | 〃 | 津島岡大第３次調査 | 71 | 49 | 10 | 2 | | 10 | 縄文後期～弥生，古代～近世<br>石製指輪，蛇頭状土器片 | ⑲ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第４次調査 | 1 | 1 | | | | | 弥生早期～弥生前期<br>〈試掘調査遺物を含む〉 | ⑥ |
| 大自 | 〃 | 津島岡大第５次調査<br>（大学院自然科学研究科棟） | 89 | 55 | 2 | | | 32 | 縄文後期～弥生，古代～近世<br>耳栓・木製櫛（縄文） | ㉗ |
| 工 | 〃 | 津島岡大第６次調査<br>（生物応用工学科棟） | 63 | 30 | 1 | 22 | | 10 | 縄文後期～近世<br>人形木器，アンペラ | ㉟ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第７次調査<br>（情報工学科棟） | 13 | 7 | 1 | | | 5 | 縄文後期～近世 | 〃 |

| 所属 | 種類 | 地区<br>調査名称 | 箱数（1箱：約30ℓ）<br>総数 | 土器 | 石器 | 木器 | その他 | サンプル | 備考<br>主要時期・特殊遺物 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全 | 発掘 | 津島岡大第8次調査<br>（遺伝子実験施設） | 14 | 12.9 | 0.1 | | | 1 | 縄文後期～近世 | ㉜ |
| 工 | 〃 | 津島岡大第9次調査<br>（生体機能応用工学科棟） | 258 | 35 | | 3 | | 220 | 縄文後期～近世 | ㉕ |
| 全 | 〃 | 津島岡大第10次調査<br>（保健管理センター） | 55 | 40 | | 5 | | 10 | 弥生前期～近世 | ㉚ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第11次調査<br>（総合情報処理センター） | 4 | 2 | | | | 2 | 縄文後期～近世 | ㉖ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第12次調査<br>（図書館） | 71 | 40 | 1 | 20 | | 10 | 縄文後期～近世 | ㉝ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第13次調査<br>（福利厚生施設　北） | 17 | 17 | | | | | 縄文後期・古墳前期・中世 | ㊶ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第14次調査<br>（福利厚生施設　南） | 16 | 15 | | | | 1 | 弥生～古墳 | ㊳ |
| 〃 | 〃 | 津島岡大第15次調査<br>（サテライトベンチャービジネスラボラトリー） | 355 | 25 | 10 | 20 | | 300 | 縄文後期・弥生早期～中世アンペラ | 〃 |
| 農薬 | 〃 | 津島岡大第16次調査<br>（動物実験棟） | 0.3 | 0.3 | | | | | 縄文後期・弥生～中世 | ㊸ |
| 環 | 〃 | 津島岡大第17次調査<br>（環境理工学部） | 60 | 50 | 1 | 1 | | 8 | 縄文後期～近世 | 〃 |
| 医病 | 試掘 | 鹿田　駐車場 | 1 | 1 | | | | | 弥生～中世 | ⑤ |
| 学生教育 | 〃 | 津島北　男子学生寮<br>〃　研究棟 | 1 | 0.7 | 0.3 | | | | 縄文後期～弥生前期 | 〃 |
| 大自 | 〃 | 〃　自然科学研究科棟 | 1 | 1 | | | | | 縄文後期～弥生前期 | ⑥ |
| 事 | 〃 | 津　島　外国人宿舎（土生） | 1 | 1 | | | | | 縄文～中世 | ⑧ |
| 理 | 〃 | 津島北　身障者用エレベーター | 0.3 | 0.3 | | | | | 中・近世 | 〃 |
| 教養 | 〃 | 津島南　〃 | 0.7 | 0.7 | | | | | 縄文・中世 | 〃 |
| 工 | 〃 | 津島北　校舎 | 1 | 1 | | | | | 縄文～近世 | ⑪ |
| 農薬 | 〃 | 津島南　動物・遺伝子実験施設 | 0.7 | 0.7 | | | | | 縄文～弥生，中・近世 | 〃 |
| 事 | 〃 | 津島南　国際交流会館 | 0.3 | 0.3 | | | | | 中世 | 〃 |
| 大自 | 〃 | 津島北　合併処理槽 | 0.2 | 0.2 | | | | | 中・近世 | ⑭ |
| 学生 | 〃 | 津島南　学生合宿所 | 0.4 | 0.2 | | | | 0.2 | 中世 | 〃 |
| 教育 | 〃 | 津島北　身障者用エレベーター | 0.3 | | | | | 0.3 | 縄文 | 〃 |
| 図 | 〃 | 津島北　図書館 | 0.8 | 0.8 | | | | | 古墳～中世 | 〃 |
| 学生 | 〃 | 津島南　学生合宿所ポンプ槽 | 0.4 | 0.4 | | | | | 縄文～中世 | ⑱ |
| 資生 | 〃 | 倉　敷　資源生物科学研究所 | 0.1 | 0.1 | | | | | 近世 | 〃 |
| ア | 〃 | 鹿　田<br>アイソトープ総合センター | 1 | 1 | | | | | 中世～近世 | 〃 |
| 事 | 〃 | 津島北　福利厚生施設 | 0.5 | 0.5 | | | | | 弥生？～中世 | 〃 |
| 農 | 〃 | 津島南　動物実施設 | 0.1 | 0.1 | | | | | 縄文？～近世 | ㉝ |
| 全 | 立会 | '83年度 | 2 | 2 | | | | | 分銅形土製品 | ① |
| 〃 | 〃 | '84年度 | 1 | 1 | | | | | | ② |
| 〃 | 〃 | '85年度 | 1 | 1 | | | | | | ⑤ |
| 〃 | 〃 | '86年度 | 0.5 | 0.5 | | | | | | ⑥ |
| 〃 | 〃 | '87年度 | 0.5 | 0.5 | | | | | | ⑧ |
| | 分布 | '89年度　三朝・本島 | 0.3 | 0.3 | | | | | | ⑭ |
| 全 | 立会 | '91年度　'92年度 | 0.3 | 0.3 | | | | | | ㉑<br>㉕ |
| 〃 | 〃 | '93年度　'94年度　'95年度<br>'96年度 | 0.6 | 0.6 | | | | | | ㉚<br>㉝<br>㊳<br>㊸ |
| 総箱数 | | | 2133.3 | 1136.2 | 37.9 | 267 | | 691.2 | | |

※文献番号は附表３・４に対応する。文献㊸は本年報を指す。

## 8　展示会

当センターは1987年11月に発足した。今年度は発足10年目にあたり，これまでのセンターの業務についてとりまとめ，その成果を広く学内外に紹介することを目的に，展示会を企画，実施した。これは1989年度の津島地区，1990年度の鹿田地区での展示会に続き，第３回のキャンパス発掘成果展である。

「津島と鹿田の4000年」と題し，年度当初から徐々に具体的に計画を練って行った。学内外でのポスター・看板掲示，マスコミ関係を通じての宣伝，学内・周辺町内会へのビラ配布に加えて，今回はセンター報16号を通常の３倍，12ページに増やし，展示会内容を紹介して入場者にも配布した。宣伝活動が功を奏し，これまで以上に多くの方に入場して頂いた。様々な準備は津島岡大遺跡第17次調査と並行していたため，人員的な余裕はなかったが，展示会最終日には発掘調査現地説明会を同時に開催したことから，結果的には予想以上に多くの人の参加を得ることができた。３日間の総入場者数は363名である。展示会の内容についてはセンター報16号，結果は同17号で報告済みであり，以下では会場で回収したアンケート結果を中心に記す。

「第３回岡山大学キャンパス発掘成果展・津島と鹿田の4000年」

1996年11月14～16日 9：00～16：00

岡山大学津島地区学生会館２Ｆ

（音楽鑑賞室・北集会室）

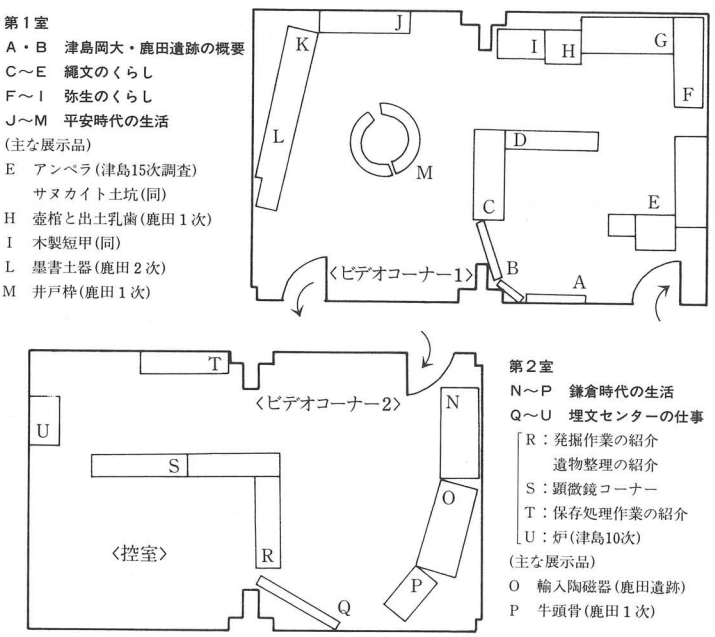



図17　展示会会場見取り図

写真９　展示会看板

## アンケート集計結果

展示会場で下記の項目についてアンケートを実施した。

a年代，b性別，c所属，d展示会を知ったきっかけ，e感想，f最も印象に残った展示品，g意見，以上7項目である。回収数は153，回収率は42%である。1～5の詳細はグラフとして掲げた。

### f印象に残った展示品

複数回答可で5名以上の回答を多い順に挙げている。

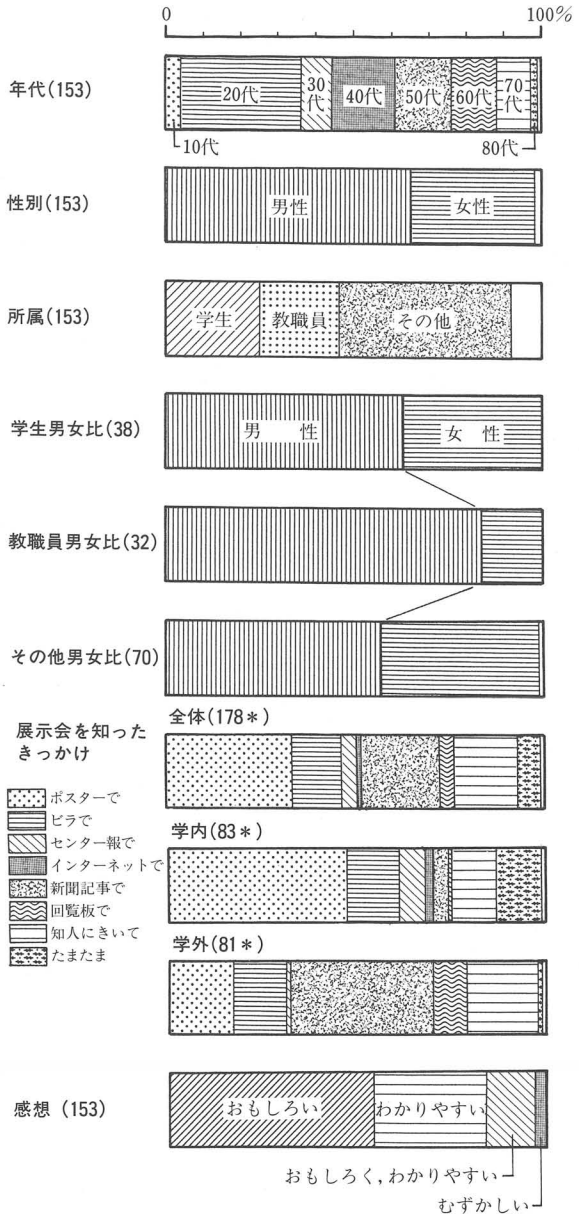
| | |
|---|---|
| 井戸枠（平安時代） | 52名 |
| 土器棺・乳歯（弥生時代） | 11名 |
| すべて | 7名 |
| プラントオパール | 6名 |
| 牛馬の骨 | 6名 |
| 土層断面（剝ぎ取り） | 5名 |
| ガラス | 5名 |

### g意見

3名以上が挙げた意見を多い順に列挙している。

① また開催してほしい
② これからも頑張って下さい
③ 解説が丁寧でわかりやすい
④ 会場が狭い
⑤ 岡大に遺跡があるとは知らなかった。
⑥ 説明文を増やしてほしい
⑦ 発掘調査に参加してみたい

展示会の開催にあたっては学内・学外の多くの方から様々な形で，御援助・御教示頂いた。個別に掲げてはいないが，ここで改めて感謝申し上げる。今後は会場で頂いた貴重な御意見も参考にして普及活動にも一層力を入れていきたい。（岩崎）




( )内の数字は回答数，＊印は複数回答可の設問
最右端の空白欄は，不明または無回答

**図18　アンケート集計結果**

# 第３章　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

## 第１節　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

### １　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

（設　置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

（目　的）

第２条　センターは，本学の敷地内の埋蔵文化財について，次の各号に掲げる業務を行い，もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（自己評価）

第２条の２　センターは，岡山大学学則（昭和26年岡山大学規程第32号）第１条の２の定めるところにより，センターの係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行うものとする。

２　前項の自己評価を行うため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。

３　自己評価委員会に関する規程は，別に定める。

附　則

この規程は，平成５年２月25日から施行する。

○岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価を行うこととするため。

（センター長）

第３条　センターにはセンター長を置く。

２　センター長は，専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。

３　センター長は，センターに関する業務を掌理する。

４　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（調査研究室）

第４条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長，調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は，専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。

４　室長は，センター長の命を受け，センターの業務を処理する。

５　室長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は，上司の命を受け，センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第５条　センターに，センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため，調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は，本学の教官の内から学長が命ずる。

3　専門委員の任期は，2年とし，再任を妨げない。

（管理委員会）

第6条　本学に，センターの管理運営の基本方針を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2　管理委員会に関する規程は，別に定める。

（運営委員会）

第7条　センターに，センターの運営に関する具体的な事項を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2　運営委員会に関する規程は，別に定める。

（事　務）

第8条　センターの事務は，施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第9条　この規程に定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，学長が別に定める。

附　則

1　この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

2　この規程施行後最初に任命されるセンター長，室長及び専門委員の任期は，第3条第4項，第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず，昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い，もって埋蔵文化財の保護を図るため，学内施設として，新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

## 2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

（趣　旨）

第1条　この規程は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条第2項の規定に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第2条　管理委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

（組　織）

第3条　管理委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　学長
二　各学部長
三　文化科学研究科長
四　自然科学研究科長
五　資源生物研究所長
六　附属図書館長
七　各附属病院長
八　固体地球研究センター長
九　学生部長

十　医療技術短期大学部長
十一　事務局長
十二　埋蔵文化財調査研究センター長

**（委員長）**

第４条　管理委員会に委員長を置き，学長をもって充てる。
２　委員長は，管理委員会を召集し，その議長となる。
３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

**（委員以外の者の出席）**

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

**（幹　事）**

第６条　管理委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長及び施設部長をもって充てる。

**（庶　務）**

第７条　管理委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

**附　則**

この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し，必要な事項を定めるため。

## ３　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

**（趣　旨）**

第１条　この規程は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第７条第２項に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

**（審議事項）**

第２条　運営委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

**（組　織）**

第３条　運営委員会は，次の号に掲げる委員で組織する。
一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
二　本学の教授のうちから学長が命じた者若干名
三　センターの調査研究専門委員から学長が命じた者１人
四　センターの調査研究室長
五　施設部長
２　前項第２号の任期は，１年とし，再任を妨げない。

**（委員長）**

第４条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。
２　委員長は，運営委員会を召集し，その議長となる。
３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

**（委員以外の者の出席）**

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（庶　務）

第６条　運営委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

１　この規程は，昭和62年11月26日から施行する。

２　この規程施行後最初に任命される第３条第１項第２号の委員の任期は，同条第２項の規定にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し，必要な事項を定めるため。

## ４　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

（趣　旨）

第１条　この規程は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第２条の２第３項の規定に基づき，岡山埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施に関し，必要な事項を審議する。

（組　織）

第３条　委員会は次の各号に掲げる者で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長

三　センターに勤務する教官のうちから若干名

四　埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名

五　施設部長

２　前項に定める委員のほか，センター長が必要と認めた者を加えることができる。

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

（会　議）

第５条　委員長は委員会を招集し，その議長となる。

２　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

（庶　務）

第６条　委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第７条　この規程に定めるもののほか，委員会に関し必要な事項は，別に定める。

附　則

この規程は，平成５年２月25日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価の実施に関する必要な事項を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会について，必要な事項を定めるため。

## 第2節　1996年度埋蔵文化財調査研究センター組織

### 1　センター組織一覧

〈学　長〉小坂　二度見

管理委員会

〈埋蔵文化財調査研究センター長〉……（併・文学部教授）稲田　孝司

運営委員会

〈調査研究専門委員〉
千葉　喬三（農学部教授）

〈調査研究室長〉……（併・文学部助教授）新納　泉

〈調 査 研 究 員〉……（専・文学部助手）　岩崎　志保
小林　青樹
野崎　貴博
光石　鳴巳（～8/31まで）
山本　悦世
横田　美香

〈室 内 作 業 員〉……（技 術 補 佐 員）　猪原　千恵（5/2～）
吉田　桜子

（臨 時 用 務 員）　片山　純子，萩野　早苗，
黒藪美代子(4/1～8/4,9/2～)
井口三智子(8/5～8/30)

### 2　管理委員会

委　員

| | | | |
|---|---|---|---|
| 学　長 | 小坂二度見 | 文化科学研究科長 | 岩間　一雄 |
| 文学部長 | 成田　常雄 | 自然科学研究科長 | 岩見　基弘 |
| 教育学部長 | 松畑　熙一 | 資源生物科学研究所長 | 青山　勲 |
| 法学部長 | 植松　秀雄 | 附属図書館長 | 神立　春樹 |
| 経済学部長 | 坂本　忠次 | 医学部附属病院長 | 大森　弘之 |
| 理学部長 | 佐藤　公行 | 歯学部附属病院長 | 村山　洋二 |
| 医学部長 | 産賀　敏彦 | 固体地球研究センター長 | 久城　育夫 |
| 歯学部長 | 松村　智弘 | 医療技術短期大学部長 | 遠藤　浩 |
| 薬学部長 | 篠田　純男 | 学生部長 | 伊澤　秀而 |
| 工学部長 | 中島　利勝 | 事務局長 | 新井　輝隆 |
| 環境理工学部長 | 河野伊一郎 | 埋蔵文化財調査研究センター長 | 稲田　孝司 |
| 農学部長 | 内田　仙二 | | |

幹　事

| | | | |
|---|---|---|---|
| 庶務部長 | 厚谷　彰雄 | 経理部長 | 黄揚川英了 |
| 施設部長 | 井内　敏雄 | | |

**審議事項**

1996年５月22日　平成７年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成８年度埋蔵文化財調査研究センター予算案について
平成８年度埋蔵文化財調査研究センターの事業計画について
津島岡大遺跡第15次発掘調査成果について
埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて

1997年１月29日　埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想と自己評価委員会報告に関する検討結果について
※将来構想と自己評価委員会報告に関する記録は，本年報の「35～47ページに掲載している

### 3　運営委員会

委　員

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| センター長 | 稲田 | 孝司 | 医学部教授 | 村上 | 宅郎 |
| 文学部教授 | 狩野 | 久 | 農学部教授 | 千葉 | 喬三（調査研究専門委員） |
| 理学部教授 | 柴田 | 次夫 | 事務局 | 井内 | 敏雄（施設部長） |
| 経済学部教授 | 建部 | 和弘 | 埋蔵文化財調査研究センター | 新納 | 泉（調査研究室長） |

**審議事項**

1996年５月１日　平成７年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成８年度埋蔵文化財調査研究センター予算案について
平成８年度埋蔵文化財調査研究センターの事業計画について
津島岡大遺跡第15次発掘調査成果について
埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて

1996年５月　持ち回り委員会
平成８年度予算案の追加修正

1996年11月26日　岡山大学構内遺跡調査研究業務の点検
学術標本アンケートの承認

1997年１月20日　埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について
津島岡大遺跡第17次発掘調査成果について

### 4　自己評価委員会

委　員

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| センター長 | 稲田 | 孝司 | 農学部教授 | 千葉 | 喬三（調査研究専門委員） |
| 文学部教授 | 狩野 | 久 | 事務局 | 井内 | 敏雄（施設部長） |
| 理学部教授 | 柴田 | 次夫 | 埋蔵文化財調査研究センター | 山本 | 悦世 |
| 経済学部教授 | 建部 | 和弘 | 埋蔵文化財調査研究センター | 岩崎 | 志保 |
| 医学部教授 | 村上 | 宅郎 | | | |

**審議事項**

1996年11月12日　埋蔵文化財調査研究センターの研究活動，管理運営，自己点検・評価の組織体制，理念目的に関する点検と評価

# 第３節　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター関係委員会報告

## １　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会報告
## （大学基準協会の相互評価にかかわる点検・評価）

以下に掲げるのは，1996年10月４日と同年11月12日に開催した自己評価委員会で報告・承認された埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会の記録である。

### （１）岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動に関する点検・評価

#### ａ．検証システムの適切性

［現状の説明］センターの研究活動については，発掘調査・出土遺物の整理等に関する作業経過を年１～３回程度当センター管理委員会および運営委員会に報告し，その進捗状況と成果の点検を行っている。センター内においては，月１回のセンター会議で，より詳細な報告と検討を実施している。また，各年度の調査研究成果を翌年度に岡山大学構内遺跡調査研究年報として印刷し，学内各部局と他大学・地方公共団体の発掘調査関係機関等に公表している。

［点検・評価］管理委員会・運営委員会では全学的な立場からの適切な評価があり，センター内の定例会議による恒常的点検も有効に機能している。さらに，年報による１年間の活動内容の総括や岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報による成果の速報等は，センターの調査・研究活動の自己評価と外部からの評価を進めるための条件を整えるという面で，積極的な意義を有するといえよう。

［長所と問題点］管理委員会・運営委員会による点検評価は，主要な業務である構内遺跡の発掘調査や出土遺物整理の作業等の進行に効果を発揮している。反面，調査研究の内容あるいは質的側面に関する点検・評価については，運営委員による発掘調査現場の視察等を随時行っているとはいえ，必ずしも十分とはいえない面を残している。

［将来の改善・改革へ向けた方策］センターにおける調査研究の成果を質的側面から検証するためには，学内の考古学・歴史学および自然科学諸分野等を含む学内関連部局との日常的な連携を基礎に，それらの研究者の集団的な討議による成果の検証システムを考えていく必要があろう。

#### ｂ．活性化状況

［現状の説明］センターの研究活動は，構内遺跡の発掘調査・出土遺物整理・報告書刊行等を主体とする総合研究と，総合研究を充実・発展させるのに必要なセンター専任職員の基礎研究からなっている。総合研究については，センター発足後の1988年度から1996年度までに計14件（11,361㎡，年平均1,262㎡）を実施し，調査報告書を９冊，年報を９冊，センター報17冊を刊行してきた。基礎研究では，1990年度から1996年度までの間に計43本の論文・報告等の公表が

あったほか，計６件の文部省科学研究費補助金が交付されている。

［点検・評価］総合研究に関しては，発掘調査から報告書作成にいたる期間を確保できる状況にあることから，着実な成果をあげてきたといえる。その結果，調査対象としている津島岡大遺跡と鹿田遺跡が岡山平野の歴史を解明するには欠かせない重要な遺跡であることが明らかになり，全国的にも注目を集めている。一方，基礎研究については，発掘調査に直接かかわる遺構・遺物のテーマの場合は，比較的研究を進めやすい。しかし，例えば山地・海浜地域の生産遺跡と平野部の集落遺跡との関係の追究といったより幅広い分野を含む研究，生産・流通・集落・祭祀と政治・国家体制との関係の追究といったより高い見地からの研究の推進については，なお今後の課題といえよう。

［長所と問題点］センターが総合研究において調査対象としている津島岡大遺跡と鹿田遺跡は，それぞれが特有の歴史的個性を示す。津島岡大遺跡は縄文時代の集落と弥生時代以降の水田開発の歴史の解明に主な意義を有し，鹿田遺跡は弥生時代以降の集落の変遷，とりわけ古代・中世の遺跡構造を知るうえで重要性をもつ。そうした遺跡を長期間にわたって継続的に調査・研究することは，岡山平野という一つの舞台を背景に展開される歴史をより具体的に解明するという意味で，非常に有効な方法といえる。問題点としては，総合研究の推進において学内の他の部局・研究者との連携による成果が，例えば石器石材の研究や出土植物種子の研究など個別的なケースにとどまっていること，発掘調査の成果を畿内・九州・大陸等のより広い地域，旧石器時代から歴史時代までのより幅広い時代の研究成果とも関連づけて，その歴史的意義を把握していく方向がなお十分に明確にされていないことがあげられる。

［将来の改善・改革へ向けた方策］学内研究者との連携を推進するため，センターに設置されている調査研究専門委員を拡充し，全学的かつ多角的な共同研究体制を整備していくことが重要である。また資料のデータベース化をはかって関係機関との情報交換を推進し，よりグローバルな視点から発掘成果を比較検討する必要がある。基礎研究についても，少なくとも科学研究費等の裏付けのある課題に関しては研究条件を整えていかなければならない。

**ｃ．活性化促進の条件整備状況とその有効性**

［現状の説明］総合研究にかかわる経費は文部省および学内予算によっている。研究と資料保管のための施設が建設されており，研究資料の整理に必要な補佐員・補助員も確保されている。専任職員の研究費・出張旅費等はほぼ学内の平均水準にある。科学研究費については，法・文・経済学部事務部を通じて申請を行っている。内地留学・海外留学・長期の海外研修の実績はない。

［点検・評価］本センターが省令設置でないという条件のもとでは，現在の研究経費や施設のあり方は，本学各部局からの相応の協力・支援の結果として十分に評価されるが，国立大学の

附属施設として本来あるべき状態を想定するならば，現在のプレハブ建物では，出土遺物・研究資料の恒久的かつ安全な保管に重大な危惧があり，建物規模も今後の資料増加を考えれば十分なものとはいい難い。文化財の自然科学的手法による研究が進展する中で，分析機器や施設の整備も今後に残された大きな課題であろう。

［**長所と問題点**］学則設置の機関として独立の施設が確保されていることは，現在までの研究実績を支えてきた研究条件面での基礎として，重要な意義をもっている。しかし本センターが国民共有の財産である文化財を研究対象としているという特殊な性格を考慮すれば，研究と資料保管のための施設・機器の整備は急務といえる。また，職員の長期の留学・研修等が実質的に困難となっている実状は，長期的な人材育成という観点から改善を検討していく必要があろう。外部からの留学・研修の受け入れについても，検討課題となろう。

［**将来の改善・改革へ向けた方策**］研究の内容にふさわしい恒久的な建物建設と人材育成をおこなうには，本センターの省令設置施設としての再編を検討するなかで，建物の資格面積を確保しあるいは研究条件の改善をはかっていくことが不可欠であろう。

再編の具体的な方向としては，1996年１月に学術審議会学術資料部会が報告したユニバーシテイミュージアムを検討していくことが重要である。この博物館は文化財に限らず広く大学での研究にかかわる学術標本を収集・整理・保存・活用していくための機関であり，専任職員の配置と施設建設の必要がうたわれている。共同利用施設として本学にユニバーシテイミュージアムを設立するならば，文化財を含む学術資料の恒久的な保存がはかられるとともに，学術資料を基礎として本学内外の学際研究の活性化にも貢献するであろう。

**（２）岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営に関する点検・評価**

［**現状の説明**］本センターの管理運営については，岡山大学学則により，学長を委員長とする管理委員会とセンター長を委員長とする運営委員会が基本的な方針を決定している。それをもとにセンター長を中心とするセンター会議において業務のより具体的な実施計画をたて，進行状況を点検している。センター内での日常的な業務の統括は専任助手が持ち回りで担当する。センター長・センター室長・運営委員会委員の一部は学長による任命である。センターの業務のうち，事務処理は施設部企画課があたっている。職員のうち，助手は文学部に所属し補佐員・補助員は企画課に属している。

［**点検・評価**］管理委員会・運営委員会は，年に１～３回程度開催される。各部局長等によって構成される管理委員会では全学的意見が反映され，全学共同利用施設としての点検が行われている。少人数の運営委員会では一歩踏み込んだ率直な討議が行われ，実質的運営に有効性を発揮している。センター内では定例センター会議を月１回開いており，職員全体の討議によって業務の進行状況や問題点などを明らかにし，相互の意志疎通をはかっている。

［長所と問題点］本学構内遺跡の調査方式としては，これまで文学部考古学研究室が本務外の仕事として行った調査，施設設定委員会のもとにおかれた岡山大学埋蔵文化財調査室が行った調査があったが，それらに比較すれば，現在のセンターは年間予算を年度当初にたて一定数の助手ポストを確保しうる等，より改善された条件にあるといえる。現在の管理運営は，全学の意志をもっともよく生かすことのできる形態である。しかしながら他方では，学問研究の進歩には当該組織および職員の自発的・内在的な意欲の発揮が不可欠であることはいうまでもない。センターは学則設置機関であるという制約上，文部省に対して概算要求を行う根拠がなく，その意味では財政的・組織的な固有の基盤が欠いているともいえよう。センターの組織と職員個々の自主性をいっそう発揮させるためには，自立した組織としての制度を確立していく方向が考慮されなければならない。

［将来の改善・改革へ向けた方策］センターを省令設置のユニバーシテイミュージアムとして再編していくならば，教授・助教授ポストを配置し，専任職員による日常業務の管理・指導体制が確立するほか，助手・補佐員等の職員が他部局の所属であるという不正常な事態は解消し，調査研究事業と事務業務との一体的な管理運営が実現するであろう。

**（3）岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの自己点検・評価の組織体制に関する点検・評価**

**a．自己点検・評価の恒常的システムとその活動の有効性**

［現状の説明］センターでは1993年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会を設置した。自己評価委員会は，現在センター長・センター室長・センター助手２名・センター運営委員６名・施設部長の計11名で構成している。

［点検・評価］自己評価委員会の開催は1996年10月から始まった。それまでセンター内で点検評価のための基礎資料を作成してきた。一定の準備作業を進めてきたとはいえるが，委員会自体の本格的な活動が遅れたことは重大な反省点である。

［長所と問題点］自己評価委員はセンターの職員あるいは運営委員としてセンターの理念・目的をふまえ，日常の業務にも多少なりとも接する機会を有するメンバーであり，率直な意見交換により具体的かつ将来展望をふまえた点検・評価が可能であろう。

［将来の改善・改革へ向けた方策］本センター自己評価委員会規定は，上記委員の他に必要な者を加えることができる余地を残している。構内遺跡あるいは広く文化財に関心をもつ本学教官を加え，日常的な運営から一歩離れた立場からの意見を得ることも有効であろう。

**b．自己点検・評価を基礎に将来の発展に向けた改善・改革を行うためのシステムに関する点検・評価**

［現状の説明］センターにおいては，自己点検・評価の結果を将来の改善・改革へ結びつけるための独自の組織を設置していない。今回の評価・点検については，その結果を十分ふまえ，

さしあたり運営委員会・管理委員会において今後の方策を検討していくことになろう。

［**点検・評価**］具体的な作業が進んでいないため，現状の点検・評価を行うことは今後の課題である。

［**長所と問題点**］本センターは1987年に設置されたが，設置を承認した同年11月25日の評議会では，設置期間について「時限を10年とし，在り方の見直しを行うこととしたい」と決定している。このことに関し，1996年５月の管理委員会では，運営委員会で今後の在り方を検討し，結果を本年度内に管理委員会に報告することとなった。本センターはいずれにしても将来の在り方を抜本的に見直す必要に迫られており，自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくシステムづくりは，それだけ重要な意義をもつことになる。

［**将来の改善・改革へ向けた方策**］自己点検・評価の結果を将来の発展に向けた改善・改革に生かしていくシステムのありかたについては，今後自己評価委員会・運営委員会・管理委員会等において改善・改革をもっとも実現しやすい機動的で強力な組織を検討していくべきであろう。

**（４）岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの理念・目的に関する点検・評価**

［**現状の説明**］埋蔵文化財は，地中に埋もれた住居跡や貝塚などの遺構・遺跡と土器・石器などの遺物からなり，文献史料とならんで過去の歴史を物語る資料として重要な意義をもつ。文化財保護法は，文化財をわが国の歴史・文化等の正しい理解のために欠くことのできないものであり，貴重な国民的財産として保護する必要を述べている。しかし，これらの文化財は都市開発や産業の発展のもとでともすれば忘れられ，破壊の危機に陥る場合も少なくない。とりわけ埋蔵文化財については，近年の大規模な土木工事が増加する状況のもとで，その系統的な調査研究と保護対策の必要が強調されてきた。遺跡に埋もれた文化財の調査成果の一端は佐賀県吉野ケ里遺跡や青森県三内丸山遺跡の例に示されており，豊かな内容を持ったわが国の歴史を復元するためには，今後さらに埋蔵文化財の調査研究の重要性が増すものと思われる。

岡山県南部には，原始・古代の遺跡がきわめて多い。備讃瀬戸地域のサヌカイトを用いた旧石器文化，彦崎貝塚・津雲貝塚等の縄文時代遺跡，造山古墳・作山古墳をはじめとする古代吉備勢力の面影をとどめた遺跡など，その内容も変化にとんでいる。とりわけ旭川の沖積作用で肥沃な土地が形成された岡山平野は，水稲農耕の開始と発展の先進地域の一つとみなされている。たとえば1968年に岡山県総合グラウンド内の武道館建設予定地で発掘の行われた津島遺跡では，弥生時代初頭の水田遺構の実体がはじめて明らかにされ，きわめて重要な遺跡として国史跡に指定されている。また近年発掘された津島江道遺跡（岡北中学校）においては，畦畔をもつ水田遺構が従来縄文時代晩期に属するとされていた土器とともに発見され，それまで弥生時代前期に始まると考えられてきた水稲農耕がさらに古くさかのぼることを明らかにした。

岡山大学はこうした原始・古代遺跡の集中地域にあり，施設建設等に際しては事前の試掘調査等により遺跡の保護に努めてきたところであるが，1982年，津島キャンパスにおいて多量の遺物を含む弥生時代遺跡を確認し，本格的な発掘調査を行った。これが津島岡大遺跡の最初の本格的な発掘であった。つづいて1983年には鹿田キャンパス附属病院外来診療棟建設地で2,000平方メートルをこえる発掘があり，以後，両キャンパスにおいては系統的に調査が進められることとなった。

津島岡大遺跡の最初の発掘は文学部考古学研究室が主体となって実施したが，日常の研究教育に支障が生じ，長期にわたる調査は不可能となった。キャンパスでのあいつぐ遺跡の発見と発掘に対応するため，1983年，本学では施設設定委員会のもとに岡山大学埋蔵文化財調査室を設置し，専任の助手１名を配置した。さらに1987年には学則により岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設立し，助手６名をもって本学構内における埋蔵文化財の調査・研究・保護に万全を期すこととなった。

本学にかかわる以上の歴史環境と本センター設立の経緯がものがたるように，本センターは，岡山平野及び広く西日本における関連遺跡を念頭におきつつ，本学構内の遺跡・遺物の調査研究を通じて原始から現在に至るまでの歴史展開の究明に寄与するとともに，調査研究を本学内外に公表し，あわせて遺跡・遺物の保護をはかることを目的としている。

［**点検・評価**］津島岡大遺跡は縄文時代・弥生時代・古代の遺跡を主とし，鹿田遺跡は古代から中世にかけて栄えた遺跡である。また津島岡大遺跡の弥生時代以後の遺構が水田を主としているのに対し，鹿田遺跡は集落遺構が中心をなしている。本学構内でのこれまでの発掘で明らかとなった多くの時代にわたる遺構，多彩な生活内容を示す痕跡は，本センターが目的とする系統的な歴史展開の究明が適切であったことを裏付けている。

本センターは，発掘調査報告書・年報・センター報などの刊行を通じて調査成果をくわしく公表してきたが，発掘調査現場ごとの現地説明会や数年おきに開催している発掘調査成果の展示会には多数の一般市民の参加もあり，成果の公表・公開が今後とも強く望まれている。

本センターは，本学構内での建設工事等の計画がある場合には，立合い調査・試掘調査等により地下遺構への影響をできるだけ少なくするように努め，大規模な工事の場合は発掘調査を実施してきた。遺跡・遺物保護の目的は，文化財保護法の精神を本学において具体化するものであり，学術研究を支える諸施設の建設の推進とともに，いっそう発展させるべき理念であろう。

［**長所と問題点**］本センターの理念・目的の最大の特徴は，多面的な内容を持つ遺跡の発掘を基礎にして当地域の歴史の解明に寄与すると同時に，かけがえのない文化遺産の価値を広く知らせ，その保護をはかるという，学術研究機能と社会的機能の両面を掲げるところにあるとい

えよう。しかし現状においては，こうした優れた特色や実績を教育活動に活かしていく道がまだ準備されていない。大学の共同利用施設として，教育活動と人材養成にかかわる理念・目的を明確にしていく必要が痛感される。

［将来の改善・改革へ向けた方策］本センターの将来あるべき理念としては，①遺跡・遺物にもとづく地域史の研究　②文化財の調査と保護　③調査成果と文化財の保管・公開・活用　④調査成果と文化財の教育への活用及び人材育成，という4点をあげることができよう。こうした理念を実現するためには，たとえば調査・研究・教育・人材育成については専任の教授・助教授を含む人員配置が必要であり，また文化財の保管・公開・活用については恒久的な研究・収蔵・展示施設が不可欠となろう。しかし現在の岡山大学学則の設置による施設ではこうした条件を満たすことが極めて困難であり，本センターのあるべき理念を達成するには省令設置による大学博物館等として再編整備していくことが要請される。

## 2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの現状と将来構想について

（1997年１月29日岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会で承認）

1987年11月26月に発足した埋蔵文化財調査研究センターは，設置を承認した同年11月25日の評議会において「時限を10年とし，在り方の見直しを行うこと」と決定された。そこで，1996年５月２日の管理委員会での承認にもとづき，運営委員会では，1996年11月に満10年を迎えるセンターの将来構想について検討を行ってきた。

以下の内容は，1997年１月20日の運営委員会と同年１月29日の管理委員会で報告・承認されたものである。

### （１）センターの現状と問題点

#### ａ．調査研究業務の現状と問題

［発掘調査］本学構内遺跡の調査については，昭和63（1988）年度から平成７（1995）年度までの８年間に12件の発掘調査，16件の試掘調査を実施した。発掘調査の総面積は約１万平方メートルで，年間の平均発掘調査面積は約1250平方メートルであった。センターの前身である岡山大学埋蔵文化財調査室の時期［昭和58（1983）年度～昭和62（1987）年度］を含めると，発掘調査は総計20件，約１万8200平方メートルの面積に達する。この結果，津島岡大遺跡は縄文時代の集落と弥生時代以降の水田開発の歴史の解明に主な意義を有し，鹿田遺跡は弥生時代以降の集落の変遷とりわけ古代・中世の遺跡構造を知るうえで重要性をもつことが判明した。岡山平野という１つの舞台を背景にしながら，互いに異なった性格をもつ二つの遺跡を系統的に調査してきたことにより，岡山平野における原始・古代を中心とする歴史と文化の多様性を明らかにする成果を得つつある。

こうした成果は，それを畿内地域や九州あるいは大陸を含む周辺地域との文化的脈絡の中に位置づけることによって，いっそう幅広い視点から深い意義が見出されるはずであるが，この点については特にセンター専任助手の個別研究の成果も期待される。

［刊行物］センターでは３種の印刷物を刊行してきた。『発掘調査報告書』は発掘調査の成果をまとめた学術報告で，８年間に７冊を刊行した。『岡山大学構内遺跡調査研究年報』は発掘・室内作業等の経過を年度別にまとめたもので，５号から12号までの８冊を定期刊行した。『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』は構内遺跡の調査成果をテーマ別にとりあげ一般向けに解説したもので，平成７（1995）年度までに15号を刊行した。センター組織になってようやく印刷物の作成が正常化したが，発掘調査報告書についてはなお遅れ気味で，翌年度刊行を目標とすべきであろう。

［遺物の保管・保存処理・展示］平成７年度までの構内遺跡の発掘調査等で出土した遺物の総量は，2203箱（１箱約30リットル），点数にして約90万点である。土器・石器が過半を占める

が，津島・鹿田とも木製品および古環境資料の割合が高い。収蔵施設の床面積は333平方メートルである。現在の速さで発掘が進むならば，早晩新たな収蔵施設が必要となろう。木製品の保存処理施設は平成４（1992）年度から稼動させており，恒久保存に効果を発揮している。今後，鉄製品処理施設の導入についても検討すべきであろう。

現在のセンター施設はプレハブによる仮設建物であり，調査データや出土遺物保管の保管のためには，自然災害や人為的な危険に対して安全な恒久施設が不可欠である。調査成果の展示公開や新しい分析器機・情報機器等の導入のためにも，スペースの確保が必要となろう。

**ｂ．管理運営の現状と問題**

［**管理運営**］センターの運営については，学長を委員長とする管理委員会において年間の事業計画と予算を決定し，センター長を委員長とする運営委員会において事業の具体化をはかっている。センター内においては，月１回の定例センター会議での打ち合わせのほか，センター長・センター室長の随時の指導により，専任助手が主体となって日常業務にあたっている。予算の執行・文書処理等は事務局施設部企画課が行っている。

センターは，ほぼ年間を通じて数十人の作業員が働く発掘調査・室内整理の現業をかかえている。事故の危険も大きいこうした日常業務を執行するセンターに専任の教授ないし助教授のポストがないことは，管理運営上きわめて問題が多い。専任の事務組織の確立も課題であろう。

［**職員の構成と処遇**］センター発足時に助手７・技術補佐２・補助員４のポストが確保され，発掘と報告書作成を軸にした業務を行うことが可能となった。しかし助手の在籍は常時４～６人である。これはセンター内では昇任の機会がなく，人材を得にくい事情による。力量のある研究者を育成するためにも，教授・助教授ポストの確保は不可欠である。助手は現在文学部助手となっており，発令・出張欠勤手続き・科学研究費申請等を文学部および文・法・経事務部に依存している。

**ｃ．その他の問題点**

［**教育との結びつき**］センターは大学にありながら，教育活動とはかかわりをもっていない。人文・自然科学の過去に関する膨大な資料の蓄積と研究の実績を教育に活用するならば，学生が過去の遺産に直接触れることによって新鮮な学問的刺激を受ける機会となるであろうし，センター専任教官が教育に関する経験をつむ機会も与えるであろう。

［**文化財とのかかわり**］センターが調査研究の対象としている資料は，学問的には広い意味で考古資料が主体をなしているが，これらは同時に文化財保護法に規定する埋蔵文化財にあたっている。出土した資料は，報告書を作成した後も文化財として恒久的に保存していく義務が課せられている。それだけに安定した組織が，安全な施設で保存管理を行っていくことが重要で

ある。

［本学内外への公開］文化財は国民共有の財産であり，大学内はもちろん，大学外の市民にも広く公開する努力が要請されている。センターでは，これまでに発掘調査ごとに調査成果の現地説明会を開催しており，センター施設内と事務局会議室においてささやかながら常設展示を行い，津島・鹿田地区で計３回の特別展示会を開催してきた。しかし所蔵資料の質と量から見れば，公開のための施設・人員・予算ははなはだ不十分である。埋蔵文化財の公開活用は，開かれた大学を実現していく上できわめて重要な意義をもつであろう。

ｄ．センターの現状の問題点と今後の方向

これまで述べてきた現状の問題点を整理すれば次のようになる。

- 発掘調査の成果を，周辺地域との関連でより幅広い視点から意義づけていくことも必要である。
- 発掘調査報告のできるだけ早い刊行を目指す必要がある。
- センター施設は仮設建物であり，文化財の恒久的な保存にふさわしい施設がない。
- 専任の教授・助教授ポストがなく，現業をかかえる機関の管理運営体制として問題が大きい。
- 管理職・専任助手・事務がすべて刷機関の所属で，機関の一体性・独立性にかける。
- 内部では助手の昇任の機会がなく，人材の育成・確保に支障がある。
- センターが蓄積してきた資料と研究実績を教育に生かす機会がない。
- センターの調査研究資料は同時に文化財であり，調査成果や出土資料を文化財にふさわしい扱いで保存管理し，大学内外へ公開していく必要がある。

センターは，前身の調査室時代に比べると人員・予算・施設のいずれの面でも改善された面をもち，それにふさわしい事業の推進を行ってきた。しかしこの８年間を振り返り，10周年以降における新たな事業の推進を期するとき，上記の問題点について抜本的な解決を図ることが望ましい。

センターは学則設置であるという性格上，文部省に対する概算要求を行う根拠をもたず，その意味では組織的・財政的な固有の基盤を欠いている。したがって職員構成・予算・施設等に関する諸問題の根本的な解決には，センターの省令設置化を基本において考えるべきである。

（２）センターの将来構想

ａ．今後の施設整備計画と発掘調査

［施設整備計画］施設設定委員会によって決定されている第１ステージ（今後５年間）の津島団地計画施設は計22施設で，その建坪総計は１万6520平方メートルである。鹿田団地の長期計画については現在検討を継続しているところであるが，いずれ相当数の計画施設が確定される

ものと予想される。

［**遺跡の現状**］昭和58（1983）年以来の本学構内における発掘調査・試掘調査の結果等によれば，津島・鹿田の両キャンパスとも，ほぼ全域が遺跡である可能性が高い。遺跡の密度を推定してみると，津島同大遺跡はキャンパス北東角の馬場周辺と事務局を結んだ北東―南西ラインがもっとも高密度で，文化層（遺構・遺物を含む時代ごとの地層）の重複も多い。このラインより南東側は普通程度，北東側は希薄な密度となる（図19―①）。

鹿田遺跡の場合は，津島岡大遺跡に比較すれば文化層の重複はやや少ないが，集落遺跡であるという性格上，各文化層の遺構・遺物の密度が極めて高い。キャンパスの90パーセントほどが高密度になると予想される（図19―②，なおキャンパス北端の希薄部分は埋没旧河道）。

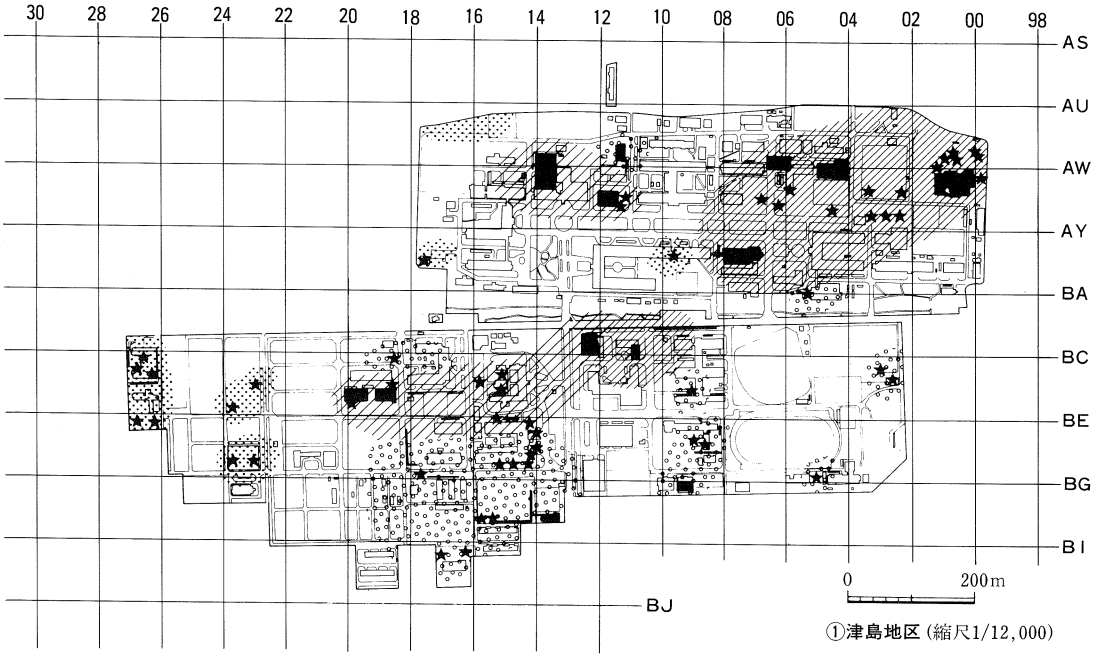
［**今後の発掘調査計画**］以上の施設整備計画と遺跡の現状を踏まえて今後必要となる発掘調査を試算してみると，津島キャンパスについては今後５年間の発掘予定総面積が１万7000平方メートル，年平均発掘予定面積が3400平方メートルとなる。これらの発掘を実施するためには，調査員が常時５人ないし６人在籍している必要がある。この年平均発掘面積はこれまでの実績の約2.5倍であり，整理・報告書作成作業に必要な人員を考慮すれば，少なくとも調査員10人前後の体制が必要となろう。これに更に鹿田キャンパスの発掘調査が加わるとすれば，第１ステージの施設整備計画の実現のためには，現在のセンターの規模を２倍ないしそれ以上に拡大することが必要となろう。

しかし実際には，施設予算の規模によって，必要な発掘調査面積は左右される。少なくとも従来程度の速度で施設整備が進むとすれば，現在のセンターの規模は維持しなければならない。

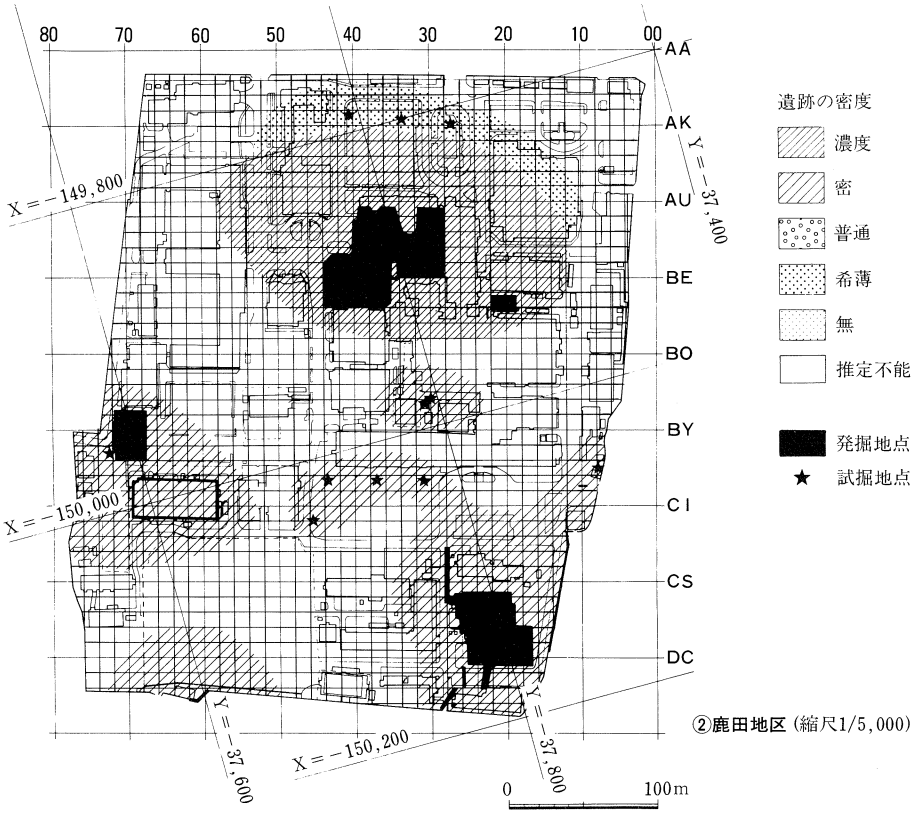
**ｂ．センターの将来構想と岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム**

［**センターの省令設置化**］センターの発掘調査を中心とした事業を今後とも円滑に推進し，先にあげた現状の諸問題を解決していくためには，センターを省令設置による共同利用施設に改変していく必要がある。埋蔵文化財調査研究センターという独立機関として省令化を進めることが一つの方向であろう。しかし，本学全体のより幅広い研究・教育の実績を踏まえ，関係諸学部・諸機関との密接な連携をはかって名実ともに共同利用施設として機能しうる機関を構想するなかで，センターの位置づけを考えていくことも重要な方向であろう。

［**文部省のユニバーシティ・ミュージアム整備事業**］平成８（1996）年１月，学術審議会学術資料部会は『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』を文部大臣に答申した。ユニバーシティ・ミュージアムは，学術研究の目的で収集あるいは生成した学術標本の・収集・整理・保存，・データベース化による情報提供，・公開と展示，・研究・教育への活用（博物館学芸員養成課程の充実を含む）を促進することを目的としたもので，その実現のために・独立性のある学内共同利用施設の設置，・専任研究者の配置，・収蔵・展示・研究施設の整備をは




①津島地区（縮尺1/12,000）




②鹿田地区（縮尺1/5,000）

図19　構内の遺跡密度概略図

かることが必要としている。文部省は答申にもとづいて平成8（1996）年度からこの事業を実施し，東京大学総合研究博物館がまず誕生し，平成9年度以降についても順次施設を設置していく方針とされる。

［本学におけるユニバーシティ・ミュージアムの可能性］本学平成9年度概算要求には「岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム」の項目が掲げられた。平成8年12月に全学教官を対象として実施された「学術標本に関するアンケート」には，文学部・教育学部・理学部・医学部・工学部・農学部の6学部，保健管理センター・資源生物研究所・埋蔵文化財調査研究センターの3施設から関係資料保有の可能性がある回答が寄せられた。資料の内容についてはさらに詳しく検討する必要はあるが，単純集計での資料総数は330件・約138万点にのぼる。本学における学術標本の質的な多様性と量的な豊かさを物語るものであり，本学におけるユニバーシティ・ミュージアム設置の基礎的な条件は十分ととのっているものと思われ，またその実現の必要性が高いと考えられる。

［岡山大学ユニバーシティ・ミュージアムの構想とセンター事業］岡山大学ユニバーシティ・ミュージアムの全体の構想については，今後関係学部・機関等の間で協議していくべき課題であろうが，センターとしては従来からの事業の継続と今後の充実・発展を期して，少なくとも次のような内容が含まれることを希望したい。

- 本学構内における発掘調査・出土遺物整理・報告書刊行等の事業を継続し，現在以上の規模の発掘調査にも対応できる体制をつくること。
- 専任の教授ないし助教授の配置によって管理運営体制を確立し，助手・事務職の同一機関への帰属をはかること。
- 発掘調査資料（図面・写真等）と出土文化財を保存・整理・公開しうる恒久建物を新設すること。

**c．省令化実現までの経過措置**

岡山大学ユニバーシティ・ミュージアム等によるセンターの省令施設への改編の実現までには一定の期間を要すると思われるので，省令化が実現するまでの期間，次のような経過措置をとることが必要である。

- センターの省令施設への改編を実現するため，文部省への概算要求を毎年継続して行う。概算要求の内容については，ユニバーシティ・ミュージアム等として関係諸学部・機関と連携して行う方向を基本とし，連携のための協議の進展の度合いにあわせ，センター単独の機関として概算要求を行う場合もありうる。
- 平成9（1997）年11月以降，省令施設への改編が実現するまで，現在の学則設置による岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを存続させる。省令化が実現しない場合は，10年後にセンターのあり方を再度見直す。

# 第4章　1996年度活動のまとめ

本年度は稲田孝司センター長以下，助手6名，技術補佐員2名の業務体制で，構内遺跡の発掘調査及び整理分析作業を行った。今年度の発掘調査としては，農・薬学部動物実験施設に伴う津島岡大遺跡第16次調査と環境理工学部校舎新営に伴う津島岡大遺跡第17次調査の計2件を実施した。第16次調査では，調査範囲が狭かったにもかかわらず，中世の溝や古墳時代の土坑，弥生時代前期の水田畦畔，縄文時代の住居址の可能性も考えられる土坑などを検出した。第16次調査地点付近は，第8次調査地点での成果から，地形が西に向かって下がっていき遺跡の密度が希薄になると考えられていた。この調査で，第8次調査地点以西にも微高地が確認され，津島岡大遺跡の範囲が西に拡大することが明らかになった。第17次調査では，古代の水田畦畔，古墳時代前半期の溝，弥生時代前期の水田畦畔を検出した。特に縄文時代後期頃の遺構密度が非常に高く，微高地上で住居址1棟，溝などを検出したほか，土器を多量に含む土坑が多数存在した。第17次調査地点周辺では，第3次，第7次，第9次，第15次調査を行っており，津島岡大遺跡北東部での資料の蓄積が進んだ。中でも，縄文時代後期における地形復元や景観復元が可能となった。また，出土した土器も一括性が高く，今後の土器編年に有効なデータを提供するであろう。そのほか随時立会調査を実施した。施設の新築が相次いだため，立会調査の件数が例年よりも増加した。

室内の整理作業としては，『鹿田遺跡4』と『津島岡大遺跡8』の2冊の報告書の刊行が挙げられる。1990年から1991年にかけて実施したアイソトープ総合センターの調査と1994年と1995年に行った福利厚生施設北棟の発掘調査成果をまとめたものである。定期刊行物としては，構内遺跡調査研究年報13，センター報16・17号を予定通りに刊行した。年報13号には沖陽子氏による構内遺跡（津島第6次調査）から出土した種子の分析成果を附編として掲載した。保存処理作業は，木器処理の第2期分を終了し，12月から第3期の PEG の含浸処理を開始した。

こうした一連の活動のほかに，センターの業務内容や発掘調査成果を大学内外に方々に広く理解を深めてもらうために展示会を開催した。300人以上の見学者を得て盛況であり，また開催してほしいという声も多くあった。また，自己評価委員会を開催し，センターの業務内容の点検や評価を行ったほか，今後の当センターのありかたを将来構想として模索した。

97年度はセンター設置10周年の節目を迎えるわけであるが，今後は一連の業務のほかに，センターの将来をどうしていくのかも考えていく必要があろう。

# 附　表

## 附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

| 年度 | 遺跡名<br>調査地区名 | 種類 | 所属 | 調　査　名　称 | 調査組織 | 調査面積(㎡) | 文献 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1980 | 鹿田 | 立会 | 歯 | 同附属病院棟新営 | 岡山市教育委員会 | 8 | | |
| 1981 | 津島南 BD26 | 〃 | 農 | 寄宿舎新営 | 〃 | | | |
| | 津島北 | 〃 | 法文 | 合併処理槽埋設 | 〃 | | | |
| | 津島北 | 〃 | 文法経 | 合併処理槽埋設 | 〃 | | | |
| | 津島南 BD09<br>BC09～11 | 〃 | | 基幹整備（共同溝取付） | 〃 | | | |
| | 津島南<br>BD～BE04～07 | 〃 | | 陸上競技場改修<br>（配水管埋設） | 〃 | | | |
| | 鹿田 | 〃 | 医病 | 高気圧治療室新営 | 〃 | | | |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 動物実験施設新営 | 〃<br>岡山県教育委員会 | | | 試掘調査をせず破壊残存壁面等の調査 |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 病理解剖体臓器処理保管庫新営 | 岡山市教育委員会 | | | |
| | 〃 | 〃 | 医 | 運動場改修 | 〃 | | | |
| 1982 | 津島 AV06･10<br>AW05･14<br>AX08,BD07<br>BE10 | 試掘 | | 排水基幹整備 | 〃 | | | 津島AW14区で弥生時代包含層確認，協議 |
| | 小橋法目黒<br>津島北 AW14 | 発掘 | 法文 | 配水管集中槽(NP-1)埋設 | 岡山大学 | 24.0 | ③ | 〈津島岡大遺跡第１次調査〉 |
| | 津島南 | 試掘 | 学生 | 武道館新営 | 岡山市教育委員会 | 2.3 | | |
| | 津島北 AY15･16 | 〃 | 法経 | 校舎新営 | 〃 | 7.0 | | |
| | 鹿田 | 〃 | 医 | 標本保存庫新営 | 岡山県教育委員会 | 8.0 | | |
| | 〃 | 〃 | 医病 | 外来診療棟新営 | 〃<br>岡山市教育委員会 | | 2 | |
| | 〃 | 立会 | 医 | 動物実験施設関連排水管・ガス管埋設 | 岡山県教育委員会 | | 1 | |
| | 鹿田 AE～AN22<br>AE22～26 | 〃 | 歯 | 電話ケーブル埋設 | 〃<br>岡山市教育委員会<br>岡山大学埋蔵文化財調査室 | | | |

※文献１　光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会

２　河本　清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会

③　番号は附表３の番号に対応する。

## 附表２　1995年度以前の構内主要調査（1983～1995年度）

### 附表２－（１）発掘調査

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 調査期間 | 面積 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 1983 | 9 | 鹿　田 | AU～BD28～40 | 医病 | 外来診療棟新営<br>〈鹿田第１次調査〉 | 7.27～11.22<br>'84.1.9～3.31 | 2188 | 弥生時代中期後半～中・近世集落址 | ⑦ |
| 3 | 1983 | 10 | 鹿　田 | BG～BI18～21 | 医病 | NMR-CT室新営<br>〈鹿田第２次調査〉 | 8.11～12.30 | 176 | 弥生時代後期～中世集落址 | ⑦ |
| 10 | 1983 | 11 | 津島南 | BE14･18<br>BF17･18 BG14<br>BH14･15 | 農 | 排水管施設<br>〈津島岡大第２次調査〉 | 94.1.9～3.5 | 265 | 弥生早期～前期集落址 | ④ |
| 10 | 1983 | 12 | 津島南 | BH13 | 農 | 合併処理槽埋設<br>〈津島岡大第２次調査〉 | 11.14～11.22<br>'84.1.9～3.5 | 276 | 弥生早期～前期集落址 | ④ |
| 2 | 1984 | 3 | 鹿　田 | AU～BD28～40 | 医病 | 外来診療棟新営<br>〈鹿田第１次調査〉 | 4.1～8.31 | 2188 | 弥生時代中期後半～中・近世集落址 | ⑦ |
| 31 | 1986 | 1 | 鹿　田 | CN～CU27･28<br>CT～CY19～27<br>CX～DD16～25<br>DD～DG22･23 | 医短 | 校舎新営<br>〈鹿田第３次調査〉 | 6.2～11.29 | 2390 | 古代～中世の集落址 | ⑩ |
| 36 | 1986 | 2 | 津島北 | AV00 AW00･01 | 学生 | 男子学生寮新営<br>〈津島岡大第３次調査〉 | 12.1～'87.3.31 | 1550 | 古代～近世の水田址 | ⑲ |
| 38 | 1986 | 3 | 津島南 | BF･BG09 | 学生 | 屋内運動場新営<br>〈津島岡大第４次調査〉 | '87.1.19～1.22 | 70 | 弥生時代前期の溝，中世の河道 | ⑥ |
| 36 | 1987 | 1 | 津島北 | AV00 AW00･01 | 学生 | 男子学生寮新営<br>〈津島岡大第３次調査〉 | 4.1～6.18 | 1550 | 弥生の集落址 | ⑲ |
| 36 | 1987 | 1 | 津島北 | AV00 AW00･01 | 学生 | 男子学生寮新営<br>〈津島岡大第３次調査〉 | 8.24～9.5 | 1550 | 縄文後期～弥生早期の河道 | ⑲ |
| 52 | 1987 | 2 | 鹿　田 | BB～BH35～42 | 医病 | 管理棟新営<br>〈鹿田第５次調査〉 | 10.6～'88.3.2<br>'88.3.23～3.31 | 1192 | 弥生中期後半～中・近世の集落址 | ㉔ |
| 54 | 1987 | 3 | 鹿　田 | DD～DF25<br>DG～DI27･28 | 医短 | 校舎周辺の配管<br>〈鹿田第４次調査〉 | 11.2～11.21 | 30 | 古代の河道 | ⑩ |
| 65 | 1988 | 1 | 津島北 | AY06～08<br>AZ06･07 | 大自 | 自然科学研究科棟<br>〈津島岡大第５次調査〉 | 6.27～'89.3.19 | 1537 | 縄文後期・弥生早期の貯蔵穴と河道　弥生～近世の水田址 | ㉗ |
| 67 | 1988 | 2 | 津島北 | AV･AW04･05 | 工 | 生物応用工学科棟<br>〈津島岡大第６次調査〉 | 9.20～'89.3.31 | 600 | 縄文後期・弥生早期の貯蔵穴と河道　弥生～近世の溝と水田址 | ⑪ |
| 70 | 1989 | 3 | 津島北 | AV･AW05･06 | 工 | 情報工学科校舎<br>〈津島岡大第７次調査〉 | 10.12～'89.3.31 | 800 | 縄文後期・弥生早期の集落址弥生～近世の水田址 | ⑪ |
| 67 | 1988 | 2 | 津島北 | AV･AW04･05 | 工 | 生物応用工学科棟<br>〈津島岡大第６次調査〉 | 4.1～5.31 | 600 | 縄文後期・弥生早期の貯蔵穴と河道　弥生～近世の溝と水田址 | ⑭ |
| 65 | 1990 | 1 | 津島北 | AY･AZ08 | 大自 | 自然科学研究科棟<br>〈津島岡大第５次調査〉 | 4.3～4.21 | 90 | 古墳時代後期の溝 | ⑱ |

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 調査期間 | 面積 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 92 | 1990 | 2 | 鹿　田 | BW～CC67～71 | ア | アイソトープ総合センター〈鹿田第６次調査〉 | 11.20～'91.3.31 | 690 | 鎌倉時代の溝・井戸・建物群 | ⑱ |
| 92 | 1991 | 1 | 鹿　田 | BW～CC67～71 | ア | アイソトープ総合センター〈鹿田第６次調査〉 | 4.1～6.30 | 690 | 鎌倉時代の溝･建物群；土器ほか　弥生～古墳時代の溝・土壙；土器 | ⑱ |
| 96 | 1991 | 2 | 津島南 | BD18･19 | 農 | 遺伝子実験施設〈津島岡大第８次調査Ａ地点〉 | 7.23～12.25 | 650 | 弥生時代～近世の溝等　縄文時代土坑　土器・石器 | ㉜ |
| 96 | 1991 | 3 | 津島南 | BH13 | 農 | 合併処理槽〈津島岡大第８次調査Ｂ地点〉 | 7.23～12.2 | 140 | 古代～近世の水田址　弥生土器・石器ほか | ㉜ |
| 104 | 1992 | 1 | 津島北 | AU～AW04 | 工 | 生体機能応用工学科棟〈津島岡大第９次調査〉 | 7.1～'93.1.29 | 650 | 縄文後期・弥生早期の貯蔵穴と河道ほか　弥生～近世の溝と水田址 | ㉕ |
| 108 | 1992 | 2 | 津島南 | BB～BC10～11 | 保 | 保健管理センター〈津島岡大第10次調査〉 | '93.2.1～3.31 | 400 | 近世耕地・野壺ほか | ㉕ |
| 108 | 1993 | 1 | 津島南 | BB～BC10～11 | 保 | 保健管理センター〈津島岡大第10次調査〉 | 4.17～7.31 | 400 | 弥生時代後期の土坑等　弥生～古墳時代井戸・土坑　古墳時代住居址ほか | ㉚ |
| 115 | 1993 | 2 | 津島北 | AV～AW11･12 | 情 | 総合情報処理センター〈津島岡大第11次調査〉 | 9.14～'94.1.11 | 640 | 縄文後期～弥生前期竪穴状遺構　弥生中期水田址　古墳時代水田址ほか | ㉚ |
| 127 | 1993<br>1994 | 2<br>1 | 津島北 | AV～AW11～14 | 図 | 図書館〈津島岡大第12次調査〉 | '94,2,9～3.31<br>4.1～11.30 | 1472 | 縄文時代土坑　弥生～古墳時代の溝・水田畦畔　古代溝・畦畔　中世溝ほか | ㉝ |
| 134 | 1994 | 2 | 津島北 | AW～AX11～12 | 事 | 福利厚生施設北棟〈津島岡大第13次調査〉 | 10.6～11.30 | 816 | 近世の耕地 | ㉝ |
| 134 | 1995 | 1 | 津島北 | AW～AX11～12 | 事 | 福利厚生施設北棟〈津島岡大第13次調査〉 | 7.10～10.4 | 816 | 縄文後期のピット　弥生時代の水田址　弥生～古墳の溝 | ㊳ |
| 144 | 1995 | 2 | 津島南 | BB～BC12～13 | 事 | 福利厚生施設南棟〈津島岡大第14次調査〉 | 10.25～2.14 | 856 | 弥生時代の水田　弥生～古墳時代の溝・土坑 | ㊳ |
| 147 | 1995<br>1996 | 3<br>4 | 津島北 | AW00･01 | サ | サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営〈津島岡大第15次調査〉 | '96.1.16～4.25 | 1600 | 縄文後期の貯蔵穴・竪穴住居・炉・ピット・土坑・河道　弥生早期の貯蔵穴・河道　弥生時代の水田・溝 | ㊳ |

## 附表２－（２）試掘調査など

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 1983 | 1 | 津島南 | BH13 | 農 | 合併処理槽予定地 | 2.5 | | 弥生・前期土器片〈83年度発掘調査〉 | ① |
| 5 | 1983 | 2 | 津島南 | BF17 | 農 | 排水管中間ポンプ槽予定地 | 3.5 | | | ① |
| 8 | 1983 | 3 | 津島南 | BE～BG14 BE･BH15 BE18 BF16～18 | 農 | 排水管埋設予定地 | 2.0 | | 弥生・前期土器片〈83年度発掘調査〉 | ① |
| 11 | 1983 | 8 | 津島北 | AW05 | 工 | 校舎新営予定地 | 3.0 | 1.0 | 土器片出土 | ① |
| 12 | 1983 | 5 | 津島南 | BC･BD15 | 事 | 大学事務局新営予定地 | 2.0～3.0 | 0.9 | 土器片出土 | ① |
| 13 | 1983 | 6 | 津島南 | BB10 | 保 | 保健管理センター新営予定地 | 2.0～3.0 | 0.8 | 溝検出 | ① |
| 14 | 1983 | 4 | 津島南 | BF22･23 | 農 | 農場畜舎新営予定地 | 2.0～3.0 | 0.6 | 土器片出土〈1987年度工事立会〉 | ① |
| 15 | 1983 | 7 | 津島南 | BI16 | 事 | 津島宿舎新営予定地 | 2.0 | 0.9 | 土器片出土〈1987年度工事立会〉 | ① |
| 21 | 1984 | 1 | 鹿　田 | BU30･31 | 医短 | 西病棟北側受水槽 | 1.4 | 0.5～0.7 | 中世土器・包含層確認〈盛土保存〉 | ② |
| 22 | 1984 | 2 | 鹿　田 | CT･CU25 CZ19･20･23･24 | 医短 | 医療短期大学部校舎新営予定地 | 2.7 | 0.8～1.0 | 中世・古代の遺物出土 | ② |
| 23 | 1985 | 3 | 津島北 | AV･AW99～01 | 学生 | 男子学生寮新営予定地 | 2.0～3.0 | 1.0 | 縄文～中世の遺構・遺物〈1986年度発掘調査〉 | ⑤ |
| 24 | 1985 | 2 | 津島北 | AX02 | 教育 | 研究棟予定地 | 2.6～3.4 | 1.2 | 縄文～弥生時代の土器出土 | ⑤ |
| 25 | 1985 | 1 | 津島南 | BE08 | 教養 | 講義棟予定地 | 3.5 | 1.2 | 遺構・遺物未確認〈1986年度工事立会〉 | ⑤ |
| 29 | 1985 | 4 | 鹿　田 | AJ33 AI40 AJ･AK26 | 医病 | 外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査 | 2.2～3.0 | 0.9～1.4 | 弥生～中世の遺物 | ⑤ |
| 35 | 1986 | 3 | 津島南 | BF･BG09 | 学生 | 屋内運動場新営予定地 | 2.4 1.2～1.7 | 1.1 | 弥生前期の溝・中世河道検出〈1986年度発掘調査〉 | ⑥ |
| 37 | 1986 | 4 | 津島北 | AY･AZ07 | 大自 | 自然科学研究科棟新営予定地 | 1.6～3.2 | 0.6～0.8 | 縄文中期末～後期の遺構・遺物〈1988年度発掘調査〉 | ⑥ |
| 45 | 1987 | 4 | 土　生 | AP02 | 事 | 外国人宿舎建設予定地 | 2.2～2.8 | | 近世・弥生・縄文の遺構面確認 | ⑧ |
| 46 | 1987 | 5 | 津島北 | AV11 | 情 | 総合情報処理センター新営予定地 | 2.0～3.0 | 2.0 | 黒色土を標高2.2ｍ前後で確認〈1993年度発掘調査〉 | ⑧ |
| 48 | 1987 | 6 | 津島北 | AY09 | 理 | 身体障害者用エレベーター建設予定地 | 3.0～3.5 | 約１ | 近世･中世の遺物　中世･古代の水田址〈継続して発掘調査に及ぶ〉 | ⑧ |

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 49 | 1987 | 7 | 津島南 | BD09 | 教養 | 身体障害者用エレベーター建設予定地 | 2.5 | 0.7 | 縄文時代土坑群を確認縄文・中世・近世の土器出土〈継続して発掘調査に及ぶ〉 | ⑧ |
| 61 | 1988 | 17 | 津島北 | AX04･06 AW04 | 工 | 校舎建設予定地 | 2.0～3.5 | | 黒色土を標高３ｍ弱で確認　溝状遺構・水田址検出　縄文～近世の土器出土〈1988年度〉 | ⑪ |
| 62 | 1988 | 19 | 津島南 | BD18･19 | 農薬 | 動物実験飼育施設及び遺伝子実験施設 | 2.3 | 1.1～1.2 | 黒色土を標高約2.3ｍで確認　溝状遺構・縄文～中世の遺物検出 | ⑪ |
| 63 | 1988 | 20 | 津島南 | BC29 | 事 | 国際交流会館 | 2.5 | 1.2 | 近世・中世の遺物出土〈1988年度工事立会〉 | ⑪ |
| 77 | 1989 | 3 | 津島北 | AZ17 | 大自 | 合併処理槽設置予定地 | 4 | 1.6～2.0 | 中世～明治の水田畦畔・溝〈1989年度工事立会〉 | ⑭ |
| 78 | 1989 | 4 | 津島南 | BD02 | 学生 | 学生合宿所予定地 | 2.0～3.2 | 1.0 | 弥生早期～前期の畦畔〈1989年度工事立会〉 | ⑭ |
| 79 | 1989 | 2 | 津島北 | AZ･BA05 | 教育 | 身体障害者用エレベーター | 2.5 | 0.8 | 縄文時代後～弥生早期の落込み　縄文時代後期～中世の土器片〈小規模発掘，面積38.5㎡〉 | ⑭ |
| 83 | 1989 | 5 | 津島北 | AV･AW13 | 図 | 図書館新営予定地 | 3 | 1.4～1.6 | 古代水田　弥生～古代の溝〈1993～94年度発掘調査〉 | ⑭ |
| 87 | 1990 | 3 | 津島南 | BC02 | 学生 | 学生合宿所ポンプ槽予定地 | 2.5 | 1.1 | 弥生時代前期の畦畔　中世の土器片 | ⑱ |
| 89 | 1990 | 4 | 倉敷地区 | | 資生 | 資源生物科学研究所遺跡確認調査 | 2.5 | 0.7 | 中世後半以降の土器片 | ⑱ |
| 90 | 1990 | 5 | 鹿　田 | BY･BZ68 | ア | アイソトープ総合センター，予定地 | 2.3 | 1.2～1.3 | 中世土師質土器など〈1990・91年度発掘調査〉 | ⑱ |
| 91 | 1990 | 6 | 津島北 | AW･AX11 | 事 | 福利厚生施設予定地 | 3.9 | 1.4～1.6 | 弥生～古墳時代の溝，中世土器小片 | ⑱ |
| 121 | 1993 | 3 | 津島南 | BE～BF・22～23 | 農 | 農学部汎用耕地実験実習施設 | 1.5 | | 近世～中世の耕土 | ㉚ |
| 136 | 1994 | 3 | 津島南 | BD20 | 農薬 | 動物実験施設 | 2.0 | 0.9 | GL-1.4ｍで黒色土　縄文土器一点出土 | ㉝ |
| 140 | 1995 | 4 | 津島南 | BE26 | 事 | 国際交流会館新営予定地 | 4.1<br>2.4 | 1.6 | 近代の耕地 | ㊳ |
| 146 | 1995 | 5 | 津島北 | AW02･03 | 環 | 環境理工学部棟新営 | 2.4 | 1.2 | 標高3.2m で黒色土を確認　弥生の溝状遺構検出 | ㊳ |
| 150 | 1995 | 6 | 津島南 | BF07 | 学生 | ボクシング部ボックス新設工事 | 2.8 | 1.2 | 標高約2.5ｍで黒色土確認　古代・古墳・弥生の溝を検出 | ㊳ |

## 附表２－（３）立会調査

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1983 | 13 | 東　山 | | 教育 | 附属中学校新営 | 4.0～5.0 | | シルト層中 | ① |
| 6 | 1983 | 23 | 鹿　田 | AO～AW22 | 医病 | 外来診療棟蒸気配管埋設 | 1.3 | | 弥生後期土器（分銅形土製品）貝集積 | ① |
| 7 | 1983 | 24 | 津島南 | BC～BF18 | 薬 | 周辺排水用集中槽埋設 | 2.5 | | | ① |
| 7 | 1983 | 24 | 津島南 | BC～BF18 | 薬 | 水道管埋設 | 1.5 | | | ① |
| 9 | 1983 | 25 | 津島北 | BA13 | 事 | 西門橋梁改修 | 2.6 | | | ① |
| 16 | 1984 | 10 | 津島北 | AW･AX11<br>AZ･BA12･13 | 情 | 総合情報処理センター通信用管路埋設 | 0.7～1.4 | 0.9～1.2 | | ② |
| 17 | 1984 | 15 | 鹿　田 | DB29 | 医病 | 看護婦宿舎前水道管修繕 | 2.0 | 1.15 | 中世包含層確認　中世・弥生土器 | ② |
| 18 | 1984 | 17 | 津島南 | BI16 | 事 | 非常勤講師宿泊施設新営 | 1.6 | 1.0 | | ② |
| 19 | 1984 | 20 | 津島南 | BI15 | 事 | 南宿舎合併処理槽取付 | 2.0 | | | ② |
| 20 | 1984 | 20 | 津島南 | BI15～17 | 事 | 南宿舎合併処理槽関係配水管埋設 | 1.0～2.2 | 1.0 | 溝・土坑検出　須恵器・弥生土器 | ② |
| 26 | 1985 | 6 | 鹿　田 | AW～BH23<br>BH･BI24 | 医病 | 外来診療棟関係屋外排水管埋設 | 1.3～1.7 | 0.7～1.3 | 中世・弥生の遺構・遺物を確認 | ⑤ |
| 27 | 1985 | 13 | 鹿　田 | AK～AM43～46<br>AO～AT42他 | 医病 | 基幹環境整備給排水その他工事 | 1.0 | 0.8 | 近世土器溜り検出 | ⑤ |
| 28 | 1985 | 14 | 津島北 | AV06･07 | 工 | 三次元棟新設及び排水管埋設 | 1.5～1.7 | 1.0～1.5 | 土器細片出土 | ⑤ |
| 30 | 1985 | 12 | 鹿　田 | AG31 AG24<br>AF23 | 医病 | 基幹環境整備緑化工事<br>電気配線ハンドホール掘削 | 1.2～1.7 | 0.9～1.3 | 中世包含層・ピット | ⑤ |
| 32 | 1986 | 9 | 鹿　田 | BI～BN45 | 医 | 排水・汚水管改修 | 0.8～1.3 | 0.8 | | ⑥ |
| 33 | 1986 | 12 | 津島南 | BE08･09 | 教養 | 校舎新営 | 2.3 | 1.3 | 中・近世の溝・土器 | ⑥ |
| 34 | 1986 | 13 | 鹿　田 | CL～CW28 | 医短 | 校舎新営設備 | 0.5～1.2 | 0.8～0.9 | | ⑥ |
| 39 | 1986 | 20 | 津島北 | AV16･17 | 文 | グラウンド改修 | 3.5 | 1.5 | | ⑥ |
| 40 | 1986 | 21 | 津島南 | BG08 | 学生 | ハンドボールコート新設 | 0.2～2.0 | 0.8 | 黒色土確認 | ⑥ |
| 41 | 1986 | 22 | 津島北 | AX16 | 文 | 動物実験室新営 | 0.95 | | 造成土内 | ⑥ |
| 42 | 1986 | 24 | 鹿　田 | CL～CR12<br>CR～CX13<br>CX～DA14 | 医短 | 護岸及び囲障工事 | 2.0 | 0.8～1.0 | 中世包含層 | ⑥ |
| 43 | 1986 | 26 | 津島南 | BF07･08 | 教養 | 校舎新営に伴う電気配管 | 1.8 | 0.9 | 中世包含層 | ⑥ |
| 44 | 1987 | 8 | 鹿　田 | BC37 | 医病 | 管理棟新営に伴う基礎杭確認 | 2.5 | | 弥生時代包含層・遺構確認 | ⑧ |
| 47 | 1987 | 10 | 津島北 | AY09 | 理 | 身体障害者用エレベーター設置に伴う汚水管移設 | 1.2～1.6 | 1.0m前後 | | ⑧ |
| 50 | 1987 | 4 | 土　生 | AQ02･03 | 事 | 土生宿舎屋外排水管改修 | 0.7 | 0.6 | | ⑧ |

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 51 | 1987 | 16 | 津島北 | AW02 | 学生 | 馬場東給水管修理 | 2.0 | 0.96 | 谷部分 | ⑧ |
| 53 | 1987 | 18 | 津島南 | BF22･23 | 農 | 農場施設新営その他工事 | 1.8 | 1.25 | | ⑧ |
| 55 | 1987 | 17 | 鹿　田 | CW14～17 | 医短 | 校舎新営配管 | 1.3 | 1.16 | 中世水田層 | ⑧ |
| 56 | 1987 | 18 | 津島南 | BG22 | 農 | 農場施設新営合併処理槽 | 3.6 | 1.2 | | ⑧ |
| 57 | 1987 | 18 | 津島南 | BF17～21 | 農 | 農場施設新営電気 | 0.7～1.5 | 1.2 | | ⑧ |
| 58 | 1987 | 18 | 津島南 | BF22 | 農 | 農場施設新営給排水 | 3.0 | 1.3 | | ⑧ |
| 59 | 1987 | 23 | 鹿　田 | CH･CI56･57 | 医 | 動物実験施設焼却炉 | 0.3～1.2 | 0.8 | | ⑧ |
| 60 | 1988 | 7 | 津島北 | AY･AZ11 | 情 | 情報処理センター通信線付設 | 1.2 | 0.8～0.85 | | ⑪ |
| 64 | 1988 | 10 | 津島北 | AZ06 | 大自 | 大学院新営に伴う電柱架設 | 2.3 | 0.8 | | ⑪ |
| 66 | 1988 | 17 | 津島南 | BF･BG10･11 | 教養 | テニスコート夜間照明設置 | 2.2<br>1.4～1.5 | 1.5 | 黒色土を表土下約２ｍで確認　西に向かう落ちが推定される | ⑪ |
| 68 | 1988 | 20 | 津島南 | BB25･26 | 事 | 国際交流会館　電柱架設 | 1.7～1.9 | 1 | 以下は灰色粘土 | ⑪ |
| 69 | 1988 | 19 | 津島南 | BC26 | 事 | 国際交流会館　本体部分 | 1.0<br>2.4～2.9 | 1.5 | | ⑪ |
| 71 | 1988 | 23 | 津島南 | BB26 | 事 | 国際交流会館　合併処理槽 | 2.2 | 1.3 | | ⑪ |
| 72 | 1988 | 32 | 津島北 | AU09･10 | 工 | 機械工学科・精密応用科学科　実験棟電気改修 | 1.4～1.6 | 1.4 | | ⑪ |
| 73 | 1989 | 7 | 津島北 | AZ09<br>BA･BB09 | 大自 | 自然科学研究科棟新営電柱架設 | 1.8～2.2 | 1 | | ⑭ |
| 74 | 1989 | 8 | 津島北 | AZ08 | 大自 | 自然科学研究科棟新営工事用道路 | 1.4 | | 弥生後期水田　近世溝検出 | ⑭ |
| 75 | 1989 | 10 | 津島北 | AU04･05 | 工 | 生物応用工学科棟新営電柱架設 | 1.5～1.9 | 0.7～1.2 | | ⑭ |
| 76 | 1989 | 12 | 津島北 | AV06 | 工 | 情報工学科棟地下部分掘削 | 6.0 | | 標高-0.5ｍまで掘削<br>無遺物 | ⑭ |
| 80 | 1989 | 46 | 鹿　田 | CE30･37･44<br>CJ･CK45<br>CL28･29 | 医病 | 旧管理棟跡地環境整備 | 1.2～1.5 | 0.7～1.0 | 中世層確認<br>外灯基礎掘削 | ⑭ |
| 81 | 1989 | 21 | 津島北 | AY07 | 大自 | 合併処理槽　地質調査 | 2.3 | 2 | | ⑭ |
| 82 | 1989 | 18 | 津島南 | BC02 | | 市道拡幅補償工事　学生合宿所新営 | 1.2 | 1.2 | | ⑭ |
| 84 | 1989 | 23 | 津島北 | AY17 | 大自 | 合併処理槽　本体部分掘削 | 3.0 | | 〈1989年度試掘調査済〉 | ⑭ |
| 85 | 1990 | 12<br>13 | 津島北 | AV04～10 | | 岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ　電柱移設 | 0.4～3.0 | 0.6～1.4 | 黒色土層　条里溝？ | ⑱ |

附　表

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 86 | 1990 | 10<br>11 | 津島北 | BD03～04 | 教養 | グラウンドシャワー室新営 | 1.2～1.5 | 0.9～1.2 | 条里名残？ | ⑱ |
| 88 | 1990 | 20 | 津島北 | BC02～04<br>BD03･04 | | 岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ　学生合宿所給排水管設置 | 2.3 | 1.2 | GL-2.3mで黒色土層 | ⑱ |
| 93 | 1990 | 36 | 津島南 | BB14 | 事 | 事務局敷地内排水溝修繕 | 0.3～1.5 | 0.8 | | ⑱ |
| 94 | 1990 | 37 | 津島北 | AV01～03<br>AT03 | | 岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅱ | 0.7～1.5 | 0.7～0.8 | 東端で条里の名残？ | ⑱ |
| 95 | 1991 | 9 | 津島南 | BC18 | 遺 | 防火用水撤去 | 2.0 | 0.8 | 以下基盤層まで遺物出土 | ㉑ |
| 97 | 1991 | 14 | 津島南 | BB18 | 事 | 津島地区基幹整備(電気)配管 | 0.7 | | GL-0.5mで明治層上面 | ㉑ |
| 98 | 1991 | 21 | 鹿　田 | CT44 | 医 | 水道管破裂 | 0.9 | 0.9 | 近世層上面まで | ㉑ |
| 99 | 1991 | 17 | 津島南 | BB16 | 事 | 津島地区基幹整備(電気)ハンドホール・アース板 | 1.7～1.8 | 0.5 | 明治層～淡灰色粘土層 | ㉑ |
| 100 | 1991 | 16 | 津　島 | AV08･09<br>AX12　AW･<br>AY05 BF16 | 事 | 津島地区基幹整備(電気)ハンドホール | 1.1～1.3 | 1.0m前後 | 近世層上面 | ㉑ |
| 101 | 1991 | 19 | 津島北 | BD15 | 事 | 津島地区基幹整備(電気)アース板埋設 | 1.7 | 1.0 | GL-1.5mで黒色土上面 | ㉑ |
| 102 | 1991 | 40 | 津島南 | BC･BE･BF12 | 事 | 南北道路街灯設置 | 1.5 | | GL-1.4mで古代層確認 | ㉑ |
| 103 | 1991 | 35 | 鹿　田 | BK～BX43～54 | 医 | 医学部基幹整備　水銀灯設置 | 1.0～1.5 | | GL-1.0mで近世層上面，-1.3mで中世層 | ㉑ |
| 105 | 1992 | 15 | 津島南 | BD18･19 | 遺 | 遺伝子実験施設ハンドホール設置 | 0.7～1.5 | | GL-0.75m～-1.1mで明治層上面　縄文後期層まで溝2本検出 | ㉕ |
| 106 | 1992 | 25 | 津島南 | BG12 | 事 | 仮設電柱設置 | 1.2 | | GL-1.1mで明治層上面 | ㉕ |
| 107 | 1992 | 28 | 鹿　田 | BU65<br>BU～BC66<br>BC67～72<br>BW･CA71 | ア | アイソトープセンター集水枡・ヒューム管設置 | 1.4～1.5 | | GL-0.9mで明治層上面，中世溝1本 | ㉕ |
| 109 | 1992 | 33 | 津島北 | AV09 | 工 | ボイラー系給水管改修工事 | 1.2 | | GL-1.1mで明治層上面 | ㉕ |
| 110 | 1992 | 34 | 津島北 | AV12 | 事 | 附属図書館北側駐車場整備 | 3.0 | 1.7 | 造成土以下粘土層 | ㉕ |
| 111 | 1992 | 37 | 津島南 | BB･BD･BE12 | 事 | 下水道事業に関する地質調査 | 1.1～1.5 | 1.1～1.4 | 明治層まで | ㉕ |
| 112 | 1992 | 40 | 鹿　田 | CC74～CI72 | 医 | 動物実験施設西側環境整備 | 1.1～1.3 | 1.1 | 近世層？まで | ㉕ |
| 113 | 1992 | 41 | 鹿　田 | CI73 | 医 | テニスコート脇電柱埋設 | 1.2 | 1.0 | 古代土器1点 | ㉕ |
| 114 | 1993 | 6 | 津島北 | AU10 | 埋文 | 沈殿層設置 | 0.85 | 0.85 | 灰褐色粘質土層上面 | ㉚ |
| 116 | 1993 | 13 | 津島北 | AV04 | 工 | 生体機能応用工学科棟外構工事 | 0.5～1.0 | 0.7～0.8 | 明治層・近世層確認 | ㉚ |

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 117 | 1993 | 14 | 津島北 | AZ03 | 教育 | 電柱埋設 | 1.0 | 0.6～1.0 | 明治層まで | ㉚ |
| 118 | 1993 | 17 | 津島南 | BB・BC10～12 | 保 | 保健管理センター新営に伴う外構工事ほか　電気配線 | 1.8 | 0.6～0.7 | 明治層以下保健管理センター本調査と同じ層序，黒褐色土は-1.15～1.7m，その直下に基盤層 | ㉚ |
| 119 | 1993 | 23 | 津島北 | BA07 | 事 | 津島地区基幹整備　ＲＩ共同利用施設排水処理施設他設置 | 3.2 | | 明治～中世層　暗褐色土層確認　古代溝？　縄文晩期？の土器片１ | ㉚ |
| 120 | 1993 | 28 | 津島南 | BD～BE13 | 事 | 津島地区環境整備　南北道路沿水路ボックスカルバート施設 | 1.5 | 1.0 | 明治層，近世～中世層を確認 | ㉚ |
| 122 | 1993 | 39 | 津島南 | BB05～07 BC05 BC41 | 学生 | 野球場バックネット他改修 | 2.0～3.2 | 1.0 | GL-1.2～2.0ｍ付近で黒色土を確認　以下は黄色砂～青灰色粘土 | ㉚ |
| 123 | 1993 | 18 | 津島南 | BC11 | 保 | 保健管理センター新営に伴う外構工事ほか　電柱設置 | 1.2 | 0.8 | 明治層・近世層確認 | ㉚ |
| 124 | 1993 | 18 | 津島南 | BB～BG・12～13 | 事 | 津島地区環境整備　水銀灯設置 | 1.8 | 0.5～1.2 | 明治層　以下近世～中世層一部で暗褐色土層を確認 | ㉚ |
| 125 | 1993 | 19 | 津島南 | BB11 | 保 | 保健管理センター新営に伴う外構工事ほか　旧棟改修 | 1.1 | 0.8 | 明治層確認　弥生土器片 | ㉚ |
| 126 | 1993 | 34 | 津島南 | BD～BE・12～13 | 事 | 津島地区環境整備　信号機設置 | 1.6 | 1.0 | 明治層　以下近世～中世層一部で暗褐色土層 | ㉚ |
| 128 | 1993 | 46 | 鹿　田 | DG68～75 | 医 | テニスコートブロック塀他改修 | 0.9～1.0 | 0.8～0.9 | 明治層確認 | ㉚ |
| 129 | 1994 | 5 | 鹿　田 | DH60～62 | 医 | 護岸改修工事 | 1.5 | 0.8 | 造成土以下明治・近世層？各一層，以下はすべて遺構埋土の可能性あり。溝３条，ピット９確認 | ㉝ |
| 130 | 1994 | 7 | 津島北 | AV11 | 情 | 総合情報処理センター工事用スロープ設置 | 1.2 | 1.2 | 明治層上面まで | ㉝ |
| 131 | 1994 | 9 | 津島南 | BD・BE・BF 04～07 | 事 | 陸上競技場照明灯設置 | 2.0 | 0.96 | 照明ポール（径80cm，深さ10m）オーガー掘削。GL-1.92～2.0ｍで黒色土確認 | ㉝ |
| 132 | 1994 | 12 | 津島北 | AW07 | 工 | 電気電子棟～精密応用化学棟外構（ハンドホール） | 1.45 | 1.2 | 近世層まで | ㉝ |
| 133 | 1994 | 13 | 津島北 | AV10 AW10 AU11 | 情 | 総合情報処理センター新営電気工事 | 2.2 | 1.5 | 明治１面，近世２面，中世（近世か？）１面。近世の溝確認。GL-1.7ｍで黒色土層確認 | ㉝ |

附　表

| 総合番号 | 年度 | 番号 | 遺跡名 | 調査地区 | 所属 | 調　査　名　称 | 掘削深度 | 造成土厚 | 概　　要 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 135 | 1994 | 18 | 津島北 | AZ08 | 理 | 理学部ヘリウム液化装置室改修その他工事 | 1.3 | 1.0 | 造成土以下，黄褐色土，灰褐色粘質土層確認。遺物なし | ㉝ |
| 137 | 1994 | 20 | 津島南 | BD20 | 農 | 焼却場 | 2.2 | 1.5 | GL-1.9mで黒色土確認 | ㉝ |
| 138 | 1994 | 21 | 津島北 | AU05～AV05 | 事 | 地域学習センター改修電気工事（ハンドホール） | 1.1 | 1.1 | 明治層上面まで | ㉝ |
| 139 | 1995 | 9 | 津島南 | BB12 | 事 | 南福利厚生施設予定地樹木移植 | 1.5 | 0.5 | 明治以下5層識別，遺物なし | ㊳ |
| 141 | 1995 | 11 | 鹿　田 | BF17･18 | 医病 | 鹿田地区基幹整備付属病院連絡通路新設 | 1.5 | 1.0 | 造成土以下茶褐色土，青灰色粘質土層確認，遺物なし | ㊳ |
| 142 | 1995 | 12 | 津島北 | AU14 AV13･14 | 図 | 図書館新営に伴う仮設電柱設置 | 1.7 | 1.5 | 明治層まで | ㊳ |
| 143 | 1995 | 13 | 鹿　田 | CB71･72 | ア | 鹿田地区基幹整備　アイソトープ総合センター焼却研究棟配管移設 | 0.8　1.0 | 0.6 | 造成土以下暗褐色砂質土 | ㊳ |
| 145 | 1995 | 14 | 鹿　田 | CD07･08 | 医病 | 鹿田地区基幹整備液酸タンク設置工事 | 2.3 | 1.0 | 中世遺構面2面，溝3条確認。溝内から古代・中世土師器出土 | ㊳ |
| 148 | 1995 | 17 | 鹿　田 | CC・DD08～10 | 医病 | 鹿田地区基幹整備付属病院液酸タンクU字溝埋設工事 | 1.2 | 0.85 | 包含層確認，中世の土器片採集 | ㊳ |
| 149 | 1995 | 23 | 鹿　田 | DF56～67 | 医 | 防球ネット取設工事 | 3.0 | 0.8 | GL-2m以下が旧河道か。土器片，石器採集 | ㊳ |
| 151 | 1995 | 24 | 津島南 | BD19，BB～BD20 | 農薬 | 動物実験棟新営に伴う電柱仮設 | 1.4 | 1.1 | 明治～近世層まで掘削 | ㊳ |

※発掘調査・試掘調査については全てを，立会調査については主要なもののみを対象としている。
　文献番号は附表3・4に対応する

附表３　埋蔵文化財調査室刊行物

| 番号 | 名　　称 | 発行年月日 |
|---|---|---|
| ① | 岡山大学構内遺跡調査研究年報１　1983年度 | 1985年２月28日 |
| ② | 岡山大学構内遺跡調査研究年報２　1984年度 | 1985年３月30日 |
| ③ | 岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第１集 | 1985年５月７日 |
| ④ | 岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ（農学部構内BH13区他）<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第２冊 | 1986年３月31日 |
| ⑤ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報３　1985年度 | 1987年３月31日 |
| ⑥ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報４　1986年度 | 1987年10月31日 |

附表４　埋蔵文化財調査研究センター刊行物

| 番号 | 名　　称 | 発行年月日 |
|---|---|---|
| ⑦ | 鹿田遺跡Ⅰ<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊 | 1988年３月31日 |
| ⑧ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報５　1987年度 | 1988年10月31日 |
| ⑨ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第１号 | 1988年10月 |
| ⑩ | 鹿田遺跡Ⅱ<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第４冊 | 1990年３月31日 |
| ⑪ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報６　1988年度 | 1989年10月14日 |
| ⑫ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号 | 1989年８月 |
| ⑬ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第３号 | 1990年２月 |
| ⑭ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報７　1989年度 | 1990年11月20日 |
| ⑮ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第４号 | 1990年７月 |
| ⑯ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第５号 | 1991年３月 |
| ⑰ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号 | 1991年８月 |
| ⑱ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報８　1990年度 | 1991年12月10日 |
| ⑲ | 津島岡大遺跡３<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊 | 1992年３月31日 |
| ⑳ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号 | 1992年３月 |
| ㉑ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度 | 1992年12月21日 |
| ㉒ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第８号 | 1992年８月 |
| ㉓ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第９号 | 1993年３月 |

附　表

| 番号 | 名　　称 | 発行年月日 |
|---|---|---|
| ㉔ | 鹿田遺跡 3<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 6 冊 | 1993年 3 月31日 |
| ㉕ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報10　1992年度 | 1993年12月20日 |
| ㉖ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第10号 | 1993年11月 |
| ㉗ | 津島岡大遺跡 4<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 7 冊 | 1994年 3 月31日 |
| ㉘ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第11号 | 1994年 3 月 |
| ㉙ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第12号 | 1994年10月 |
| ㉚ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報11　1993年度 | 1995年 2 月28日 |
| ㉛ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第13号 | 1995年 3 月 |
| ㉜ | 津島岡大遺跡 5<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 8 冊 | 1995年 3 月31日 |
| ㉝ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報12　1994年度 | 1995年12月28日 |
| ㉞ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第14号 | 1995年10月 |
| ㉟ | 津島岡大遺跡 6<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 9 冊 | 1995年12月30日 |
| ㊱ | 津島岡大遺跡 7<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第10冊 | 1996年 2 月29日 |
| ㊲ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第15号 | 1996年 3 月 |
| ㊳ | 岡山大学構内遺跡調査研究年報13　1995年度 | 1996年10月22日 |
| ㊴ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第16号 | 1996年10月 |
| ㊵ | 鹿田遺跡 4<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊 | 1997年 3 月31日 |
| ㊶ | 津島岡大遺跡 8<br>岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第12冊 | 1997年 3 月31日 |
| ㊷ | 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第17号 | 1997年 3 月 |

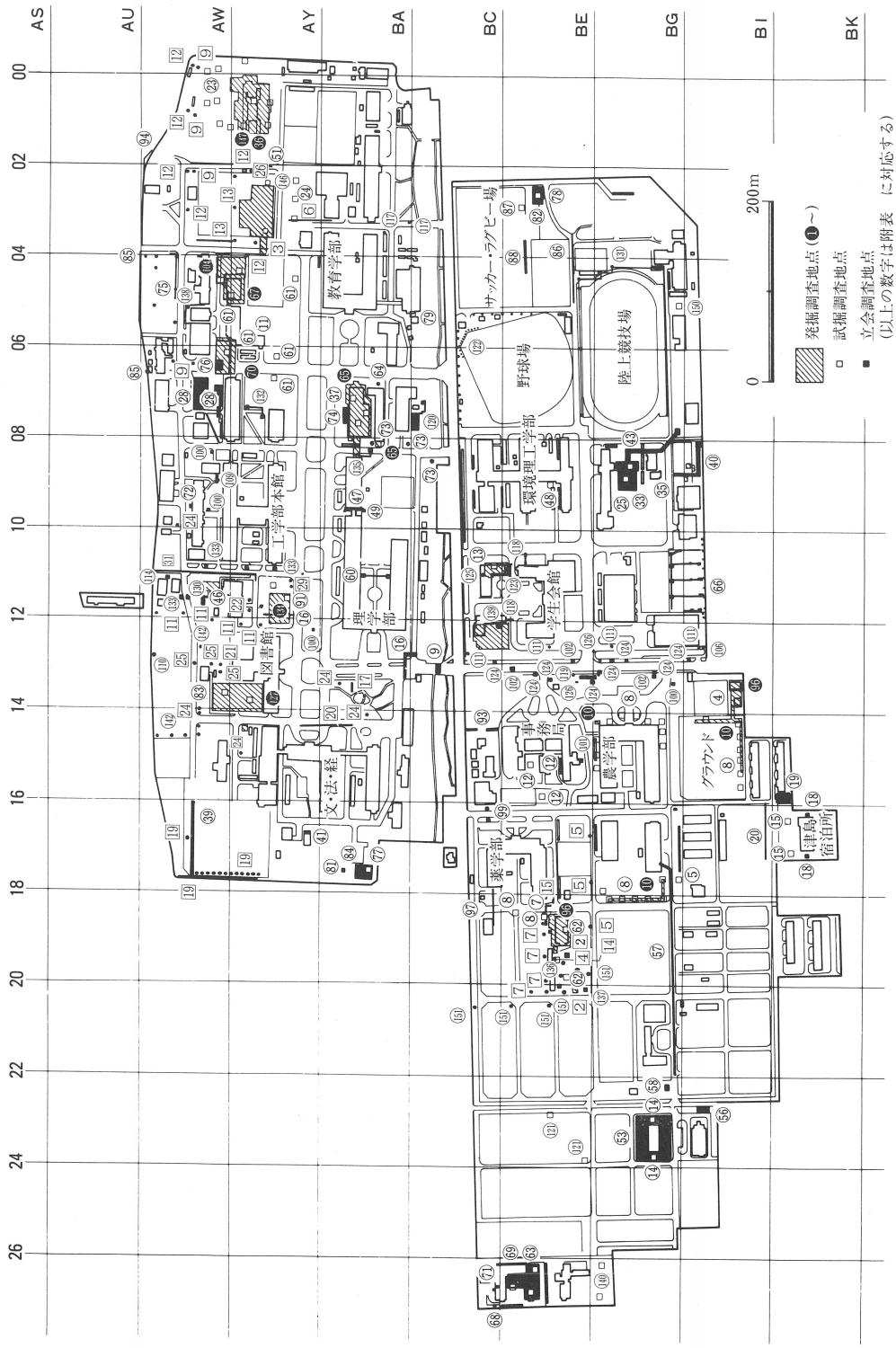



図20　1996年度までの調査地点(1)津島地区 (縮尺1/7,500)

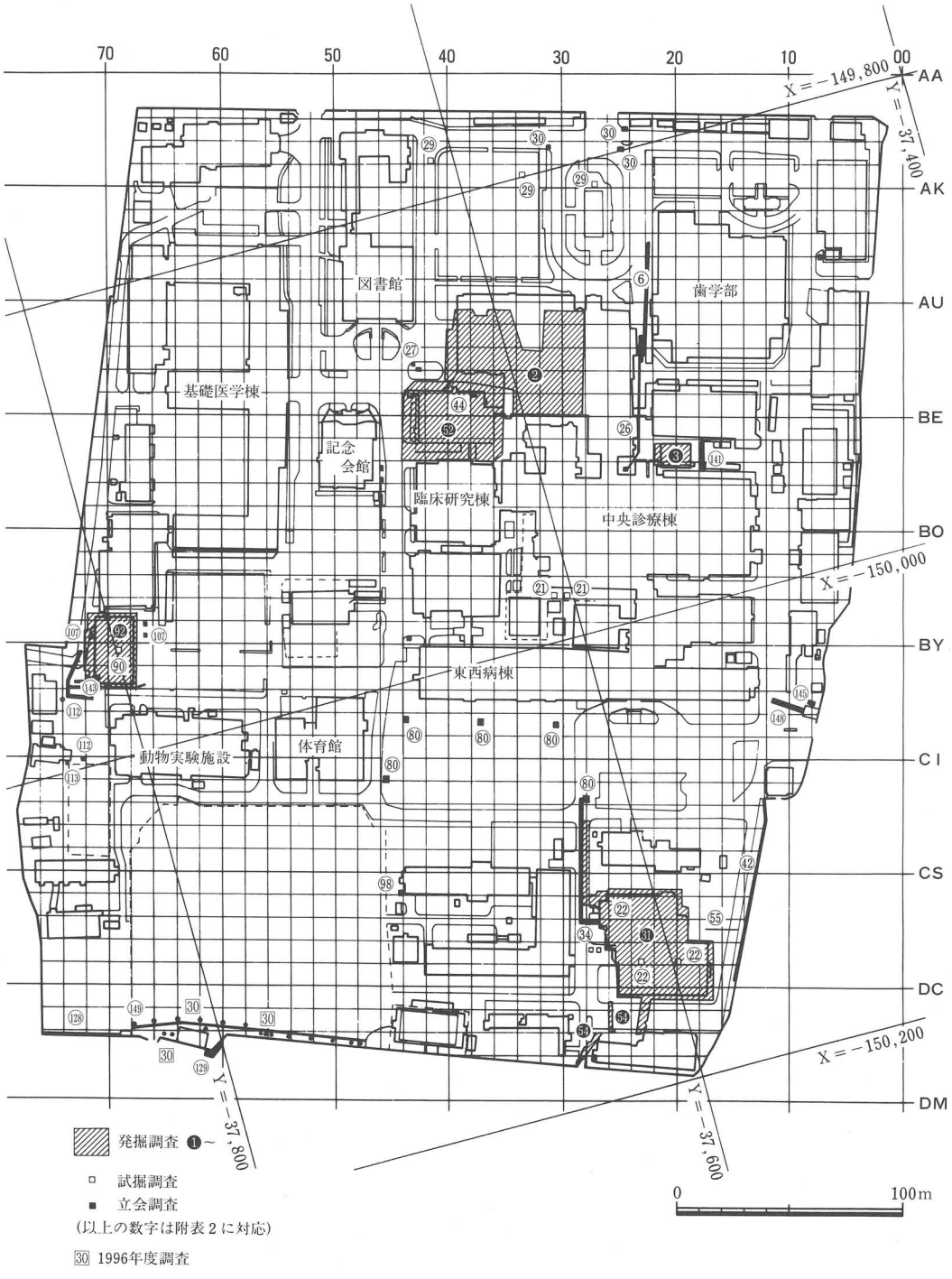



**図21　1996年度までの調査地点（２）鹿田地区**（縮尺1/3,000）

別　編

# 鹿田遺跡第6次調査出土種子の分析

岡山大学環境理工学部助教授　沖　陽子

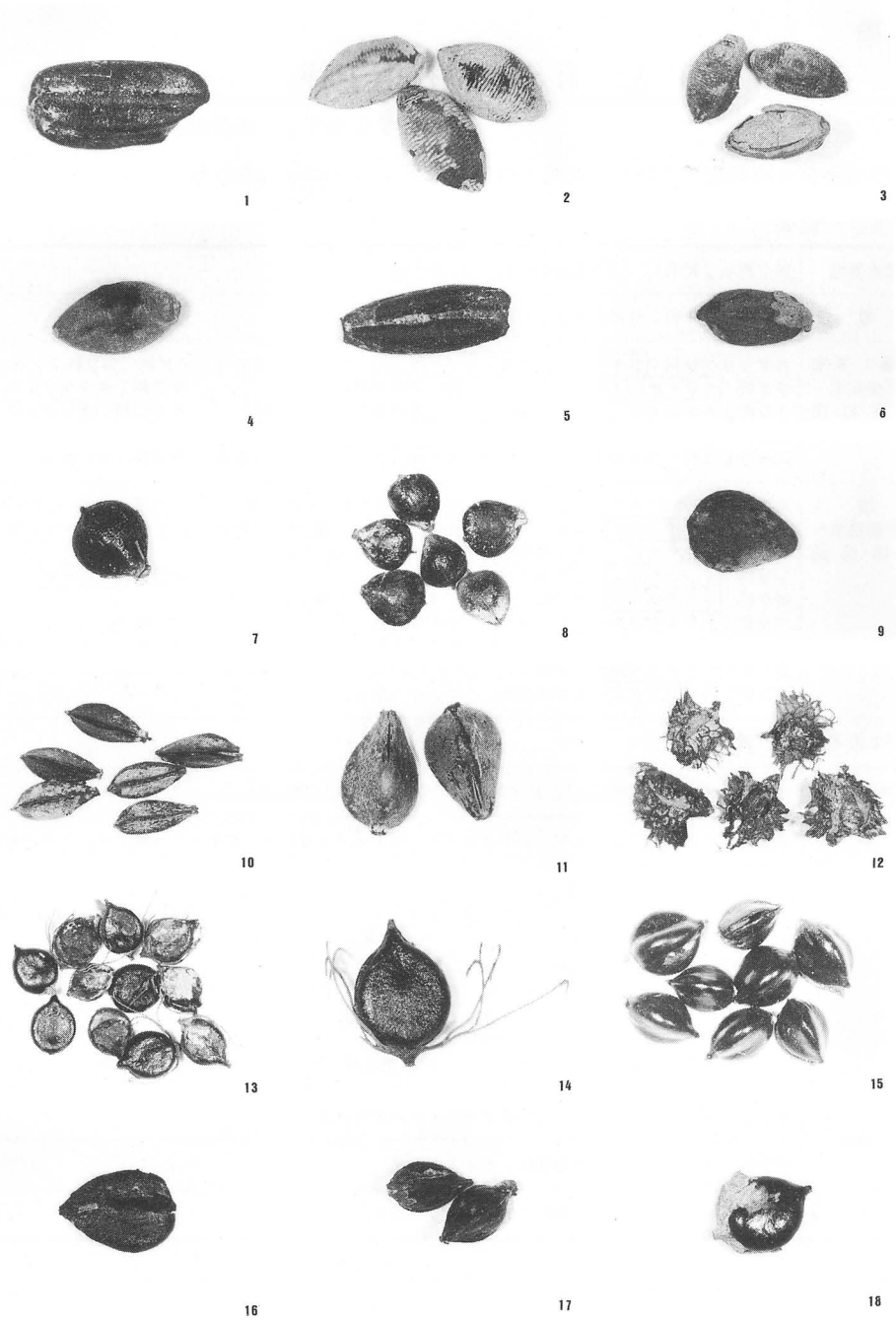
鹿田遺跡第6次調査[1]で出土した種子の分析結果を以下に一覧表の形で掲載する。

出土種子一覧表

| 遺構番号 | 科：種名（属名）　□：多量に出土　⬚：やや多く出土 |
|---|---|
| 土　壙　1 | カヤツリグサ科：ウキヤガラ　ウリ科：ヒョウタン |
| 土壙1下層<br>弥生後期末～<br>古墳初頭 | カヤツリグサ科：ウキヤガラ，カヤツリグサ科 sp.，フトイ，ホタルイ，スゲ属　シソ科：トウバナ<br>タデ科：イヌタデ，オオイヌタデ，タデ属　アカザ科：シロザ　キク科：タカサブロウ<br>クワ科：カナムグラ　バラ科：モモ（栽培種？）　ミカン科：サンショウ<br>カタバミ科：カタバミ　ウリ科：ヒョウタン，メロン（栽培種？）　ナス科：クコ<br>スベリヒユ科：スベリヒユ　ヒノキ科：ヒノキ（種子），ヒノキ（茎葉）　セリ科：セリ科 sp. |
| 土　壙　4<br>弥生後期末～<br>古墳初頭 | イネ科：イネモミ，コツブキンエノコロ　カヤツリグサ科：スゲ属，カヤツリグサ属，カヤツリグサ科 sp.<br>タデ科：オオイヌタデ，イヌタデ，ヒメタデ，ギシギシ属（コギシギシ？），タデ属，ボントクタデ，シロバナサクラタデ　キンポウゲ科：キンポウゲ科 sp.<br>シソ科：ミゾコウジュ，イヌコウジュ，ヒメジソ　アカザ科：シロザ<br>キク科：タカサブロウ　クワ科：カナムグラ，カジノキ属（コウゾ？）<br>バラ科：ナワシロイチゴ，キイチゴ属　ナデシコ科：ミドリハコベ，ナデシコ科 sp.<br>アカネ科：ヤエムグラ，ヤエムグラ属　カタバミ科：カタバミ　ウリ科：メロン（栽培種？）<br>セリ科：チドメグサ属　ナス科：クコ，ヒヨドリジョウゴ，イヌホウズキ　ヒノキ科：ヒノキ（茎葉）<br>センダン科：センダン　トチノキ科：トチノキ（果皮） |
| 井戸1最下面 | ウリ科：ヒョウタン |
| 井戸1下層 | ウリ科：メロン（栽培種？），ウリ科 sp.　バラ科：モモ（栽培種） |
| 井　戸　1<br>中　世 | イネ科：イネ（？），オオムギ，エノコログサ，キンエノコログサ，アキエノコログサ，コツブキンエノコロ，イネ科 sp.<br>カヤツリグサ科：ホタルイ，カヤツリグサ，イヌホタルイ，ホタルイ属<br>タデ科：ヤナギタデ，イヌタデ，タデ属（オオイヌタデ，ハルタデ？サナギタデ？），オオイヌタデ，ギシギシ属，ハルタデ（サナエタデ？），シロバナサクラタデ，タデ科　ヒユ科：イヌビユ<br>キンポウゲ科：ケキツノキンポウゲ　シソ科：ミゾコウジュ，ヒメジソ，イヌコウジュ，（？）<br>アカザ科：シロザ（アカザ？）　キク科：タカサブロウ　クワ科：カナムグラ，カジノキ属（コウゾ？）<br>ナデシコ科：ミドリハコベ，ツメクサ，ナデシコ科 sp.　アカネ科：ヤエムグラ属<br>ブドウ科：エビヅル　ツバキ科：ヒサカキ　カタバミ科：カタバミ<br>ツユクサ科：ツユクサ　ウリ科：メロン（栽培種？），ヒョウタン　セリ科：チドメグサ属<br>ナス科：クコ，イヌホウズキ　スベリヒユ科：スベリヒユ　ザクロソウ科：ザクロソウ<br>センダン科：センダン　モチノキ科：クロガネモチ |
| 溝　12 | タデ科：オオイヌタデ　アカネ科：ヤエムグラ属 |
| 溝　14 | シソ科：ミゾコウジュ　バラ科：アズキナシ（木本） |

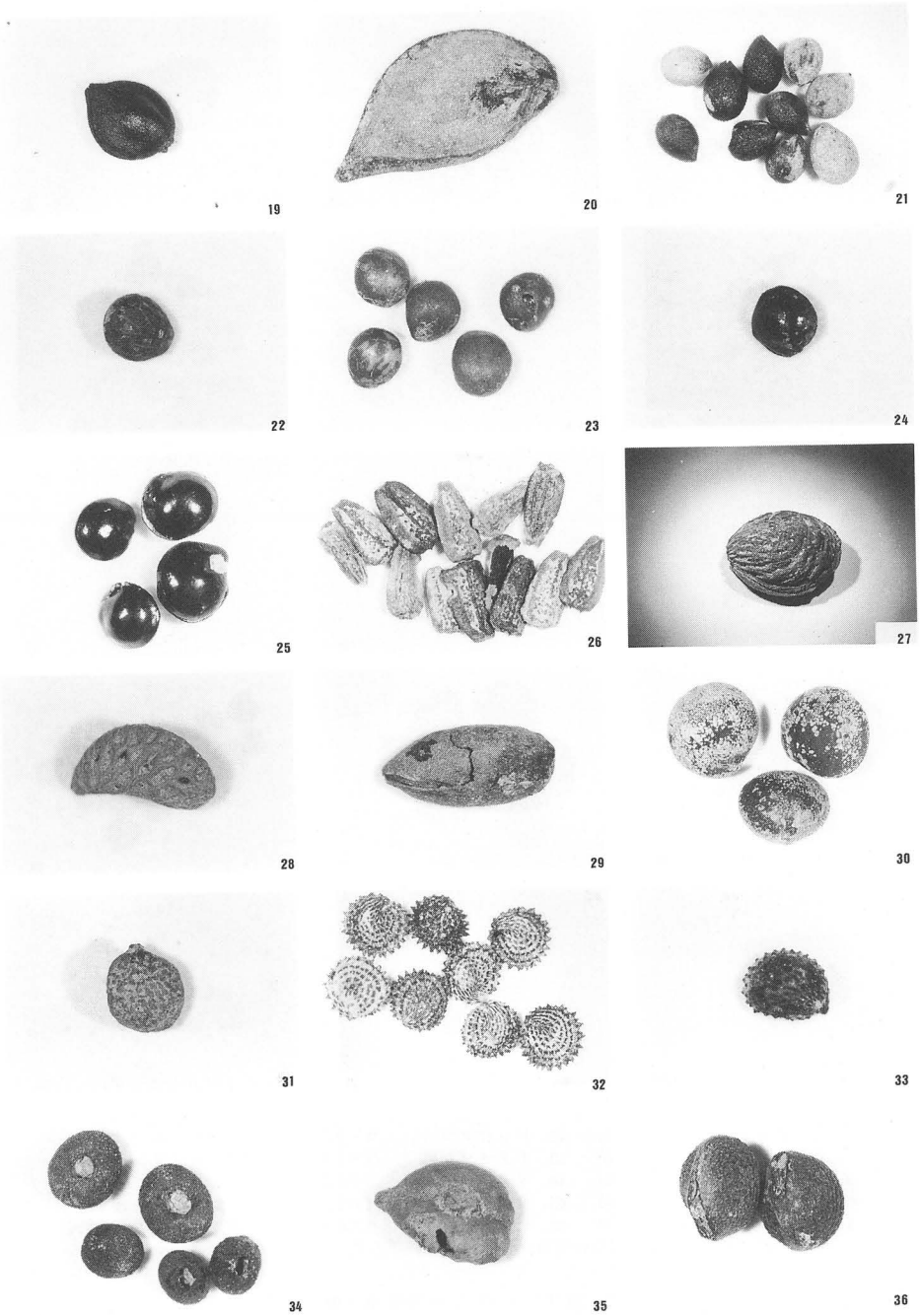
イネ科の種類が比較的少なかったが，イネ，オオムギなどの栽培種が出土している。最も種類が豊富であったのはタデ科で，ヤナギタデ，イヌタデ，オオイヌタデが多量に出土した。カヤツリグサ科ではウキヤガラとホタルイが多く出土した。また，ウリ科のヒョウタンやメロンなどの栽培種が多く見られたのが特徴的であった。その他，シロザ，タカサブロウ，ミドリハコベ，カタバミ，イヌビユ，スベリヒユ，ザクロソウも多く出土した。

註(1)　『鹿田遺跡4』構内遺跡発掘調査報告第11冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1997



1．イネ　(×4.1)　7．ホタルイ　(×5.0)　13．オオイヌタデ　(×3.3)
2．キンエノコロ　(×5.9)　8．イヌホタルイ　(×3.6)　14．オオイヌタデ　(×6.6)
3．コツブキンエノコロ　(×5.0)　9．フトイ　(×6.9)　15．イヌタデ　(×4.6)
4．エノコログサ　(×5.1)　10．カヤツリグサ　(×7.9)　16．ボントクタデ　(×4.2)
5．オオムギ　(×5.0)　11．ウキヤガラ　(×3.3)　17．ヒメタデ(？)　(×5.0)
6．スゲ属　(×4.3)　12．ギシギシ属　(×3.3)　18．シロバナサクラタデ　(×5.9)
※出土個体数の多かった種子については，複数個体を掲載した。

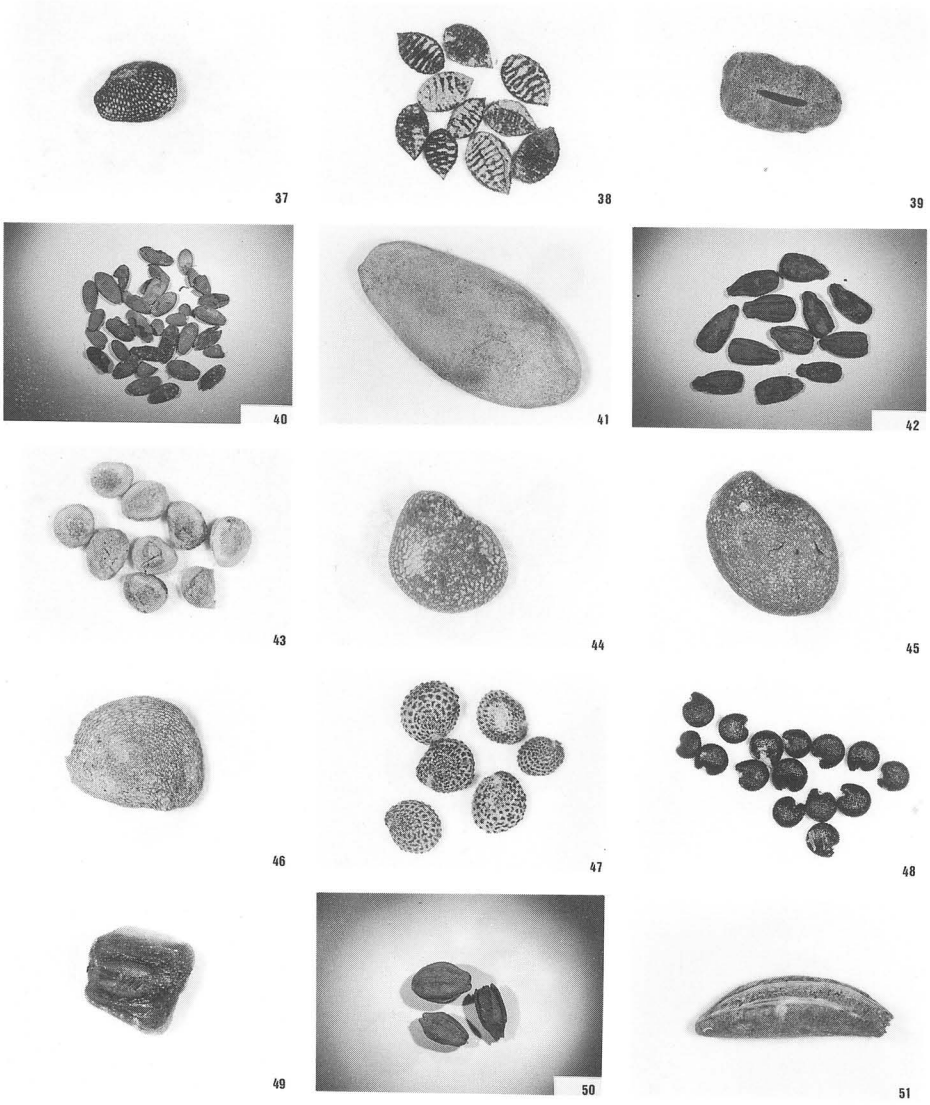
**写真10　鹿田遺跡第６次調査出土種子(１)**




19. ヤナギタデ (×4.5)
20. ケキツネノボタン (×6.9)
21. ミゾコウジュ (×4.0)
22. ヒメジソ (×6.6)
23. トウバナ (×7.9)
24. イヌビユ (×7.2)
25. シロザ (×7.6)
26. タカサブロウ (×3.3)
27. モモ(栽培種?) (×1.7)
28. ナワシロイチゴ (×7.3)
29. アズミナシ (×4.0)
30. カナムグラ (×3.3)
31. カジノキ属 (×4.6)
32. ミドリハコベ (×6.6)
33. ツメクサ (×14.2)
34. ヤエムグラ属 (×5.0)
35. エビヅル (×4.1)
36. サンショウ (×3.3)

※出土個体数の多かった種子については，複数個体を掲載した。

**写真11　鹿田遺跡第６次調査出土種子(２)**




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 37. ヒサカキ | (×6.4) | 42. ヒョウタン | (×1.7) | 47. スベリヒユ | (×6.6) |
| 38. カタバミ | (×4.6) | 43. チドメグサ属 | (×5.0) | 48. ザクロソウ | (×5.8) |
| 39. ツユクサ | (×5.0) | 44. イヌホウズキ | (×9.2) | 49. ヒノキ | (×4.0) |
| 40. メロン(栽培種？) | (×1.9) | 45. クコ | (×5.0) | 50. センダン | (×1.7) |
| 41. メロン(栽培種？) | (×3.3) | 46. ヒヨドリジョウゴ | (×6.9) | 51. クロガネモチ | (×5.0) |

※出土個体数の多かった種子については，複数個体を掲載した。

**写真12　鹿田遺跡第６次調査出土種子(３)**

1997年11月25日　印刷
1997年11月30日　発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報14　1996年度

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中３丁目１番１号
(086)251-7290
印　　刷　西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町１―23
(086)255-2181(代)